# 日涧瑣録

二

大正十四年二月下浣起筆

特別
イ4
1919
370

176638

日間瑣錄二　大正十四年二月廿六日起筆

○分り赤坊問を海す　二三の図書

二月廿六日記

一朱舜水先生文集　十六冊

正德年間光圀公の刻する所、光圀自ら門人と稱し朱舜水を編輯者として其名を署す公の朱と親すること篤しといふべし　北文集大体あ東寺行の輯めたるものを採り信ら斷簡零墨に及ぶ朱の南時童人せられたること又る、一し、首卷初の欲に監國魯王の勅を載す、之れを刻し國を謝するの奏疏を收むとぞ

38- 9159

本国に関する書いしかれども皆日本在留中の作にして日本在留中の文
尾しかる文は家人となるべき日本人の文
に係る殊に江戸に来りて後の文なるべし、也吉
今極めて稀也、殊に初稿本甚稀なり
す、北吉は刊行の為時編纂に属せるを
安積澹泊が藩主を賜りたるものなる
巻尾に澹泊自筆の跋あり
右文集壹部
大君閲下襲編修之功所賜 諱郎拝
拝登二字なれば拝載と云ふも同じ
登花于家焉
宝徳五年乙未四月初三日
惜むらくは北吉一冊を缺き本十冊(巻文)

十二行

雑著)補写なり、但し原本を脱する所()なる時代の写なりと覚しく字字甚佳也
(巻尾あり校定本文の跋あり)
価百二十目也
蒙つて少加賀守朱氏文集あり、えらく字
本なる皆の少なきあり、北文集を刻
する時是を収めたる。

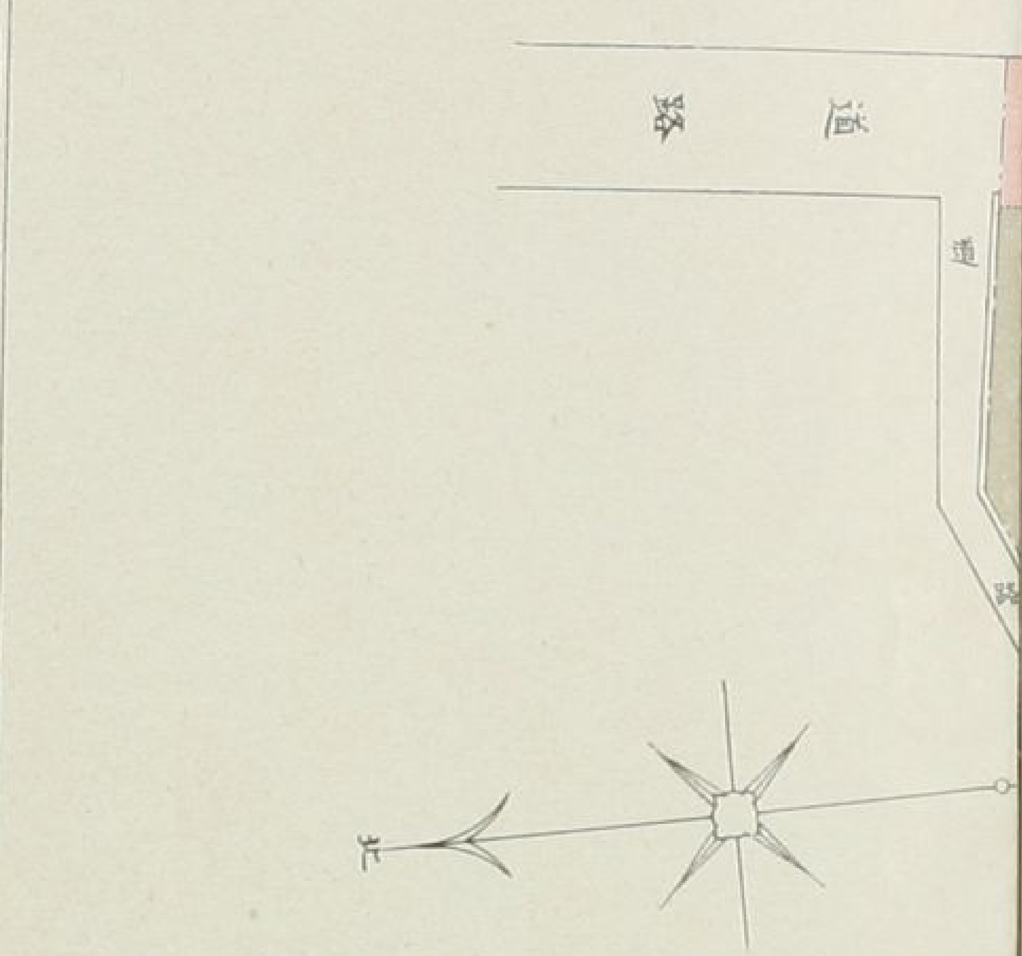
## 清白集

一冊

中林竹洞の詠歌の集なり性と漢詩
文を雑ね、巻尾に弘化二年七十翁中林
成斯識とあり、例のごとく自筆の跋で
なる巻首に古歌十二首を収め、後に

| | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 構造 | 同 | 同 | 木造亞鉛葺平家 | 木造瓦葺平家 | 木造亞鉛葺平家 | 木造瓦葺平家 | 木造亞鉛葺平家 | 同 | 木造瓦葺平家 | 木造亞鉛葺平家 | 鐵筋コンクリート二階建 | 煉瓦造二階建 | 鐵骨亞鉛葺平家 | 鐵筋コンクリート三階建 | 木造亞鉛葺平家 | 鐵筋コンクリート三階建 | 木造亞鉛葺二階建 | 鐵筋コンクリート二階建 | 鐵骨亞鉛葺平家 | |
| 內譯 | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | |
| 坪數 | 一八・〇〇〇 | 一五・二五〇 | 二四・〇〇〇 | 九八・〇〇〇 | 二四・二五〇 | 二六・五〇〇 | 一六・五〇〇 | 三九・二五〇 | 三六・〇〇〇 | 四三・五〇〇 | 二三八・一六六 | 一三三・〇〇〇 | 一三・九二三 | 六二〇・七二〇 | 八・七五〇 | 二二四・〇〇〇 | 三七〇・八〇四 | 二七〇・一〇〇 | 七・二〇〇 | 二四七四・二三四 |

| | |
|---|---|
| 社敷地 | 二〇八五・二五〇 |
| 分工場敷地 | 三三五・五八七 |
| 計 | 二四一〇・八三七 |



摘要

本圖ハ大正十四年一月現在ナリ
圖中太線ニテ畫セル部分ハ創業當時ノ建造ニシテ其他ハ漸次發展增築セルモノナリ

四季の雜歌を收む、此書ハ極めて稀覯
のものにて、近かく都びの書肆雲泉より高價
を以つて購ひ來れるもの、家藏卅四の著
此四五あれども、これを初めて見る所也 大倉
數の序あり

一 輶後宣符抄　八冊

塙本也 保己一京都に零本を得て初めて
刻する本、二巻欠如せるハ原本を欠くもの故
也 此本も今得ること難し、

一 菟藝泥赴（つきねふ）　二冊

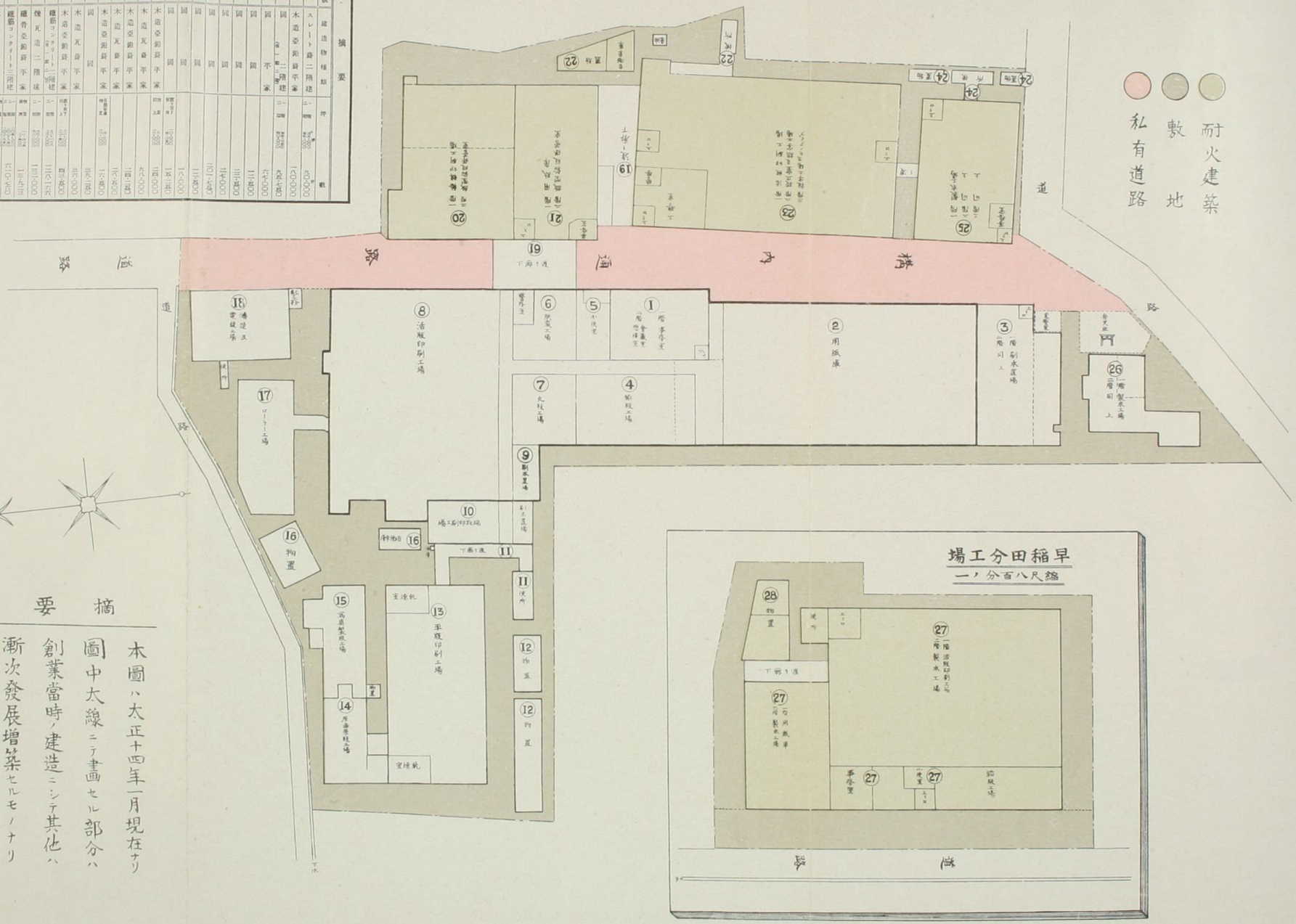
北村季吟著する所の京都（山城の名所）地誌なり、久し
く宗として流布しゐるもの、京都叢書

十二行

# 日清印刷株式會社構内配置圖

縮尺 千二百分之一

耐火建築
敷地
私有道路




| 番號 | 建造物種類 | 坪數 | 摘要 |
|---|---|---|---|
| 1 | スレート葺二階建 | 二階 [illegible] | |
| 2 | 木造亞鉛葺平家 | 一〇〇〇〇〇 | |
| 3 | 同 | 二階 [illegible] | |
| 4 | 同 | 平家 [illegible] | |
| 5 | 同 | 二階 [illegible] | |
| 6 | 同 | 一〇〇〇〇〇 | |
| 7 | 同 | 三〇〇〇〇〇 | |
| 8 | 同 | 一〇〇〇〇〇 | |
| 9 | 同 | 二〇〇〇〇〇 | |
| 10 | 同 | 一〇〇〇〇〇 | |
| 11 | 同 | 一五〇〇〇〇 | |
| 12 | 木造亞鉛葺平家 | 昭和二年 一〇〇〇〇〇 | |
| 13 | 木造瓦葺平家 | 六八〇〇〇〇 | |
| 14 | 木造亞鉛葺平家 | 一四〇〇〇〇 | |
| 15 | 木造亞鉛葺平家 | 一二〇〇〇〇 | |
| 16 | 木造瓦葺平家 | 一二〇〇〇〇 | |
| 17 | 同 | 三五〇〇〇〇 | |
| 18 | 木造亞鉛葺平家 | 四〇〇〇〇〇 | |
| 19 | 鐵筋コンクリート二階建 | 昭和四年上棟 一〇〇〇〇〇 | |
| 20 | 鐵筋コンクリート二階建 | 昭和四年上棟 一〇〇〇〇〇 | |
| 21 | 煉瓦造二階建 | 二〇〇〇〇〇 | |
| 22 | 鐵骨亞鉛葺平家 | 一二五〇〇〇 | |
| 23 | 鐵筋コンクリート三階建 | 二〇〇〇〇〇 | |
| 24 | 木造亞鉛葺平家 | 六〇〇〇〇〇 | |
| 25 | 鐵筋コンクリート二階建 | 二〇〇〇〇〇 | |
| 26 | 木造亞鉛葺二階建 | 二〇〇〇〇〇 | |
| 27 | 鐵筋コンクリート二階建 | 一〇〇〇〇〇 | |
| 28 | 鐵骨亞鉛葺平家 | 一〇〇〇〇〇 | |
| 計 | | 二四〇八三三 | |

| 社敷地 | 分工場敷地 |
|---|---|
| 三二八五二五 | 三五五〇〇 |
| 計 二四〇八三三 | 計 三五五〇〇 |

## 摘要

本圖ハ太正十四年一月現在ナリ
圖中太線ニテ畫セル部分ハ
創業當時ノ建造ニシテ其他ハ
漸次發展增築セルモノナリ

二枚めくれば流宮あり、雪舟の此書を編
しなり、貞享元年浅藤左衛門氏の序あり
と侍り、書名芜蕪泥記、日本書紀巻十一、
大鷦鷯天皇三十年秋九月の條、皇后の歌に
芜蕪泥赴椰莽之呂とありてツキテフ
を山城の枕詞とするなり、考名としたる
也、泥は山也、芜蕪は連歌俳諧を綴
くとふと、蕪集ると次山領と書けり

一仏祖源流遺影賛　一冊

教本家蕪村ごんは即此が賛し

東京市本郷區弓町二番地

日清生命保險株式會社鳥瞰圖

大正十四年三月四日

# 日清印刷株式會社沿革概要　大正十四年一月

本社は明治四十年四月の創設に係り同年九月營業を開始す、爾來十有八年時勢の進運に伴ひ社業を擴張し、內容に改善を加へたるもの甚だ多し、左に其大要を記述せん。

明治四十二年ポイント式活字の需要前途有望なるを察知し、率先各種の字體を調製して普く之れを應用するに至り、活版印刷に於ては稍々實績を擧ぐるを得たり、然れども美術印刷物の程度未だ世の進運に伴はざるものあるを遺憾とし、大正二年當時歐洲の一部に在つて漸く行はれんとしつゝありし「オフセット」印刷機械を英國より購入し、其の試作品を時の大正博覽會に出品して優良の賞牌を受領せり、是れ實に本邦に於ける「オフセット」印刷の嚆矢とす。

爾來顧客の深厚なる同情に依り各種の注文漸く增加し、動もすれば機械能力の之れに伴はざるの虞れあるに至りたるを以て逐次印刷機械の增設を計り、大正五年ロータリーオフセット印刷機械一臺を、大正六年普通機械の三倍の能率を有する自動紙差付活版輪轉印刷機械二臺の設備を始めとし、大正八年一月以來昨年末に亙り平版印刷部に在りては更に四六全判ロータリーオフセット及米國製四六全判ハリスオフセット印刷機械各一臺を、活版印刷部に在りては多量生產の目的に備ふる爲め二色刷輪轉活版印刷機械一臺、單色輪轉活版印刷機械四臺、又印刷鮮明能率優秀を以て定評ある米國ミーレ會社製フェーダ付活版印刷機械拾六臺、其他小物印刷用として獨逸製小形印刷機械數臺を、又寫眞製版部に在りては該製版用の諸機械數種を、製本部に在りては米國製の丁合取綴機、表紙付機、折帖機各一臺及獨逸製折帖機、絲綴機等數臺を何れも年次を逐うて增設せり。

明治四十五年防火建築法に則り煉瓦造倉庫二階建百參拾貳坪の一棟を新築し、用紙及紙型鈔版等の保存を安全ならしめ、同時に顧客の依託品を永久安固に保管するの用途に充てり。

大正六年九月本社創業十周年記念式を擧け、從業者を慰勞し且つ得意先に記念品を頒ち、越へて大正十一年四月創業十五周年記念式を擧け、役員以下從業員一般に慰勞金を分配し、又同時に年功者及特殊功勞者に記念品を贈與し其勤勞を表彰せり。

大正六年十月平版印刷工場を增築し又寫眞製版工場を新設して、寫眞應用の諸版印刷を開始す。

大正八年六月本社隣接地榎町六番地の宅地貳百七拾參坪を購入したるを以て、本社所有の總地積は貳千四百拾餘坪を算するに至れり。

是れより先大正七年十二月社則を改めて社長を置き、社務の更革を圖り社業一層の擴張を見る。

大正十年八月在來の木造建製本工場を取壊ち、鐵筋コンクリート造三階建貳百拾餘坪の製本工場を新築し、前項の優秀なる諸機械を收容し以て從來の手工業より機械作業に移るの進境を見たり。

大正十一年六月事業發展の目的を達成せんが爲めに、資本金五拾萬圓を增資して壹百萬圓と爲し、新株式は現在株主の所有株數に應じ平等に割當、其餘剩株を以て役員及從業員の功勞者に分配せり。

大正十一年七月鐵筋コンクリート造二階建活版輪轉印刷工場延坪百貳拾八坪を新築し、此處に活版輪轉印刷機械を統一し以て大量印刷物生產の利便を圖れり。

大正十二年七月東京平和記念博覽會に美術的印刷物各種を出陳して銀牌賞を受領せり。

爾來社業漸く進み工場擴張の必要あるに際し偶々都市計畫法に依り工場建築の制限を受けんとするに至りたるを以て大正十二年四月先づ活版印刷工場として鐵筋コンクリート造三階建延坪六百八坪

# 日清印刷株式會社沿革概要

大正十四年一月

本社は明治四十年四月の創設に係り同年九月營業を開始す、爾來十有八年時勢の進運に伴ひ社業を擴張し、內容に改善を加へたるもの甚だ多し、左に其大要を記述せん。

明治四十二年ポイント式活字の需要前途有望なるを察知し、率先各種の字體を調製して普く之れを應用するに至り、活版印刷に於ては稍々實績を擧ぐるを得たり、然れども美術印刷物の程度未だ世の進運に伴はざるものあるを遺憾とし、大正二年當時歐洲の一部に在つて漸く行はれんとしつゝありし「オフセット」印刷機械を英國より購入し、其の試作品を時の大正博覽會に出品して優良の賞牌を受領せり、是れ實に本邦に於ける「オフセット」印刷の嚆矢とす。

爾來顧客の深厚なる同情に依り各種の注文漸く增加し、動もすれば機械能力の之れに伴はざるの嘆れあるに至りたるを以て逐次印刷機械の增設を計り、大正五年ロータリーオフセット印刷機械一臺を、大正六年普通機械の三倍の能率を有する自動紙差付活版輪轉印刷機械二臺の設備を始めとし、大正八年一月以來昨年末に亙り平版印刷部に在りては更に四六全判ロータリーオフセット及米國製四六全判ハリスオフセット印刷機械各一臺を、活版印刷部に在りては多量生產の目的に備ふる爲め二色刷輪轉活版印刷機械一臺、單色輪轉活版印刷機械四臺、又印刷鮮明能率優秀を以て定評ある米國ミーレ會社製フェーダ付活版印刷機械拾六臺、其他小物印刷用として獨逸製小形印刷機械數臺を、又寫眞製版部に在りては該製版用の諸機械數種を、製本部に在りては米國製の丁合取綴機、表紙付機、折帖機各一臺及獨逸製折帖機、絲綴機等數臺を何れも年次を逐うて增設せり。

明治四十五年防火建築法に則り煉瓦造倉庫二階建百參拾貳坪の一棟を新築し、用紙及紙型鋼版等の保存を安全ならしめ、同時に顧客の依託品を永久安固に保管するの用途に充てり。

大正六年九月本社創業十周年記念式を擧け、從業者を慰勞し且つ得意先に記念品を頒ち、越へて大正十一年四月創業十五周年記念式を擧け、役員以下從業員一般に慰勞金を分配し、又同時に年功者及特殊功勞者に記念品を贈與し其勤勞を表彰せり。

大正六年十月平版印刷工場を增築し又寫眞製版工場を新設して、寫眞應用の諸版印刷を開始す。

大正八年六月本社隣接地榎町六番地の宅地貳百七拾參坪を購入したるを以て、本社所有の總地積は貳千四百拾餘坪を算するに至れり。

是れより先大正七年十二月社則を改めて社長を置き、社務の更革を圖り社業一層の擴張を見る。

大正十年八月在來の木造建製本工場を取壞ち、鐵筋コンクリート造三階建貳百拾餘坪の製本工場を新築し、前項の優秀なる諸機械を收容し以て從來の手工業より機械作業に移るの進境を見たり。

大正十一年六月事業發展の目的を達成せんが爲めに、資本金五拾萬圓を增資して壹百萬圓と爲し、新株式は現在株主の所有株數に應じ平等に割當、其餘剩株を以て役員及從業員の功勞者に分配せり。

大正十一年七月鐵筋コンクリート造二階建活版輪轉印刷工場延坪百貳拾八坪を新築し、此處に活版輪轉印刷機械を統一し以て大量印刷物生產の利便を圖れり。

大正十二年七月東京平和記念博覽會に美術的印刷物各種を出陳して銀牌賞を受領せり。

爾來社業漸く進み工場擴張の必要あるに際し偶々都市計畫法に依り工場建築の制限を受けんとするに至りたるを以て大正十二年四月先づ活版印刷工場として鐵筋コンクリート造三階建延坪六百八坪の新築に着手し大半落成せんとするの折柄、同年九月の震災に罹りたるも幸に全部の被害ならざりし爲め之れに十分の保强工事を施し、十三年九月に至り理想的建造を告げたるを以て、翌十月初旬活版部の總移動を行ひ、又印刷部は悉くミーレ印刷機械を据付特殊の高級印刷に充當せり。

大正十三年十二月更に活版印刷及製本の作業に充つる爲め、市外戶塚町早稻田大學出版部所有地貳百貳拾五坪餘を借地し、此所に鐵筋コンクリート造二階建延坪貳百五拾八坪の分工場を新設し、是れ亦ミーレ印刷機械及製本用機械數臺を据付既に作業を開始せり。

以上諸般の擴張に依りて工場建物は總延坪貳千四百七拾餘坪を算するに至り、其他內部の設備に於ても多大の增加を顯はし、從つて生產能力は創業當時に比較して實に數十倍の增率を見るに到れり、

なるものを巻末備覧を巻尾に置く、即ち本邦に於て撰述せられしもの也

一 淑慎斎書話　一冊

僅々一小冊子なるも其説く所甚だ平易なるのみならず略ぼ書道に見識あり、敢て支那前輩の説を汲まず卓然一家の説を為すに趣らず強ひて異を樹てず、本邦書話の著書少からざれども多くは支那の口真似なり、此書の如きは少なし。著者淑慎斎未だ何人なるを知らず此人の著に書則あり、著書の委曲は之を見ば分明ならん歟　此書寛政二年の板、稀なる本也

十二行

日清印刷株式會社沿革概要

の新築に着手し大半落成せんとするの折柄、同年九月の震災に罹りたるも幸に全部の被害ならざりし爲め之れに十分の保强工事を施し、十三年九月に至り理想的建造を告けたるを以て、翌十月初旬活版部の總移動を行ひ、叉印刷部は悉くミーレ印刷機械を据付特殊の高級印刷に充當せり。

大正十三年十二月更に活版印刷及製本の作業に充つる爲め、市外戸塚町早稻田大學出版部所有地貳百貳拾五坪餘を借地し、此所に鐵筋コンクリート造二階建延坪貳百五拾八坪の分工場を新設し、是れ亦ミーレ印刷機械及製本用機械數臺を据付既に作業を開始せり。

以上諸般の擴張に依りて工場建物は總延坪貳千四百七拾餘坪を算するに至り、其他内部の設備に於ても多大の增加を顯はし、從つて生産能力は創業當時に比較して實に數十倍の增率を見るに到れり、

一　天到地殺図

李龍眠の水滸人物図、漁荘陸渭の跋
しるす所の四和刻あり、余之れを得んと欲すること
久間嘗て目に觸れざることなし、今偶ま
下冊を購ふ、卷尾全樂堂の印あるを
以て書肆岩崎の臨模とするを然れ
ども陸渭の跋款あるを知
らず、或は岩山之れを覆刻せしめ花跋
とし、而して陸のやうに、玉山林春の鐫と
偽り、漢文の跋を載せず、更に北定本
を得んことを望むといふ





○中林竹洞畫花を以て蔵其の畫法を知るべきの
役れる四五の著書あり皆自筆を刻したるものにて家
藏版と見しきものなり、北の著書中画学に関する
寛世に関する自家の説を刻したる随筆あり、其の中に知不足記
と知るべし、中林氏家藏の書、高野氏書を得て竹洞の
事蹟画家のあらましを知り得て旅筆に所懐
を記せしことあり、今亦清白集を得て読むに国歌
化心相通の迹有り、漢詩和歌共に清新きこころのから
す、北集と収むるもの僅に三十首のみ
と長、其一斑を窺ふべし、左に数首を録す

題畫

数點春山曉黛收　一行寒雁下汀洲　風烟依

約潯湘曲宮出江南水國秋
山帶斜陽殘雨收、江雲淡々秋悠々、漁船歸去
村煙遠、晚氣蒼々蓋其狀秋、

幽居

幽居秋老更蒼條、凡家濱其百丈橋、岩外
終宵疑雨到、滿園秋色在芭蕉

晚情

江天雲散暮禽還、古樹巒峠帶曲湾、無限秋
情吟不盡、植節看尽夕陽山、

冬日

宮人藏蕊凍雲昏、小雪霏々晝掩門、老日
著衣挑燈坐、一鉢濁酒手親温



自寫小像

許由有巢父、拾得々寒山、共獨何為者、嗒然
天地間、

萬山草堂圖

李伯時嘗畫龍眠山莊圖、欲以徙王摩詰輞
川之作、余亦欲作萬山草堂圖、以学二公之妙、然
龍眠輞川固在天地間、如吾萬山草堂、唯存於胸
臆間耳、雖然吾胸臆豈非亦天地也哉、余性
好山岳、有絶俗離世之心、而莫之能遂、晚歲忽悟
解曰、山林者在吾心而已矣、豈別有山林乎、苟
山林在心則所見無処山林者、大而城市廛宮、小
而家具器物、咸在山林也、造化之間、共和和意

則美丈求此夫翹川新眠者也、敢擬二公之
勝事聊自遣云
余嘗戯作此去歩然而未果、時偶比文成記
以示志
ちりとらにあひからはたちうる
心のたくのまのけしきを

偶成

梅花又是及春晴、白髮猶能老書生、
生涯寥寥百無寄、心事有誰知

春日村居

清貧知足一村翁、自咲西春臺又去、一房況
因張鞏患、看花思尺尚陽明　四十八翁左錦繡村人
患眼未愈



晩帰

春容何雪暮鐘傳、吟步西来月已圓、曲水平
橋村路晴、踈梅疎柳半溪輕

湖山夏曉

一望湖山曉、乾坤萬象清、依微殘月蔭、倏
忽宿雲晴、欲迫眉稜淡、凡微鏡面平、
知村人未起、憂下水禽鳴

題木石図

雲石當山徑、虬柯躍幸生、杜詩用拙處、奥味
六翰相同、

二月廿七日

○椒憤斎書話のこと前に云へり、今更に其内二三のことを掲す、敢て其の論の大要を概説せんとにはあらず、他の資料に供せん為迄に、

十六枚の小冊子にて、偏倫用書字体活版論、筆紙墨硯数項に分ち、切に形似を主とするの要を説き、筆紙墨硯を略し、個性を尊重するの要を説き、筆紙墨一概に日本製を作くるの必要を説く所に一家の見識あり、

二月赤坂記

椒憤斎は何人にあるかを知らざるも、阿波の人にして、阿波の人にあることが知れたれば、当つて鈴木芙蓉の子孫か、積家か、一説に称源兵衛、後井川貢と改む、雪下園の別号あり、

文政二年十月歿、北人書画をよくす、西京芙蓉

十二行

、人の字体を習得して其如く似せるを奴書と云て人の奴僕となるとは同じ、ただ残しむるのみ

、書は偏に一門を学ぶべからず、ひろく能者より学ぶべし、偏に一門のみ学んは現の時くして用いもとめるべし、年月業紙を費すこと多く、一首衆意を書くとも現の時きかくよりは、世に時くしてこうの年月を費すに益なきのみ也

一書を以上は惟用を為すのみ、字体貧杯也、墨書分的なるを要とす、風顔、海義の巧なる、今の世にても是を見るときは、古雅なるも

悦ぶ也、其時の人、此のごとく字数を改めず後世の人
悦ぶを心ゆしとするのみ者なり、只用を為す
の故に貴朴也

一 昔の世は二王に限らず文質備て能もすし
是を後の文質とす、巧拙の話を単に終と
解とす、是は弄歌とすべし、

一 唐まひの出は流れ者(法の範)とすべし、明と
もりとは偽無きを論ずる也、

一 実世南云書は任義の本王羲の姓と云て改
字の用を為すを記して後世と偽く遠(国)
と為て字体を(遠)す、此記を以て学べし、
近代唐様と云字の用ゆる也、

十二行

此るときは出は無用なる也

一 書を学ぶの者は惟筆法を能く得て好字
用をなすやうに自由なるを善とす、王羲之
の出は流れかく様の文章の義に従て字体行る
を善と云て、

一 実世南云兵に常の陣なく書に常の範なし
と云へり、其體は紙上に向ひ変化空り
なることなく其時の勢に応じ行る変する
と此を能出と云へり、

一 盤者は不字字者は不銘と云、盤者とは器
の理を能得て変化自在なる時の器なる
氣象と云変と云へり、

言者とハ何を一首かくるものの大小陳者或ハ公
御或ハ古体色〻黄昏にて巧みに、ひ方を或る
も考へ少り彼の目を悦すことなり、九鋪者と
言者との巧拙大二弟ひあることなり
一今の世にて唐ハ上名家の書法傳写法帖
と云ふハ淳化祖石帖より外絶て見ることの
なし、祖石帖ハ巻首に方一寸六分計の朱印
あり、印中ハ篆にて緝熙殿寶の朱文な
り、北印のあることの祖石帖也
一宋元の書家の淳化を模刻したるもの、淳化帖
を増減し宋代の書をかく、停雲寶晋堂
風鼓鴻才の類多し　皆事実ハ遠く亡ひ

十二行

影ものを業法を習ふものの為なるべき也　且停
雲法帖ハ歴代の古体皆文徴明の筆意なり、比類皆
変書帖ハ皆宋元書の筆意なり、比類皆
北のごし信用なりがたし
一法帖中義之の書俄神黄庭経楽毅論の
類皆後人の偽作にして巧拙の分ら
ぬやうにしるるもの也、古を言ふ六分四方程
より大きなるハ法帖のなるべし
一(今)唐拓を董其昌文徴明等の墨帖、意を
拓ぬと習ふものあり、比拓本邪今の寺に尾な
との偽換して拓き者なるべし
一凡法帖とハ手本にするべき法を西〻くかき

なるものなり、法帖とも書くなり、あるいは和
尚も書すし、古名家の真跡墨帖なども和
尚風額聯などの類にかきしるしたるは道勁(義之)
とて流行なり(達)者なるかきぶりなり
任意を顕はすなり、何んぞ学得て此のかきぶ
りなるやうにかきうるや、法帖とは別なり
一 論書は学愚のなりもなく多く会集なること
なれば、達論もなり愚論もあり又なるべし取捨
の力なければ愚論をよきものと思ひ違ひ実を
なすことあり論中横鑑の法などのごときなり
論なれども人を惑はすこともあり
一 欲字は元白なるべしと云説
なるべし

十二行

く云
別に陰陽家者流なり出家の法を云者也
仙文高者講に奉し出家、略して是に付き度
の世陰陽家なり日本の修験者或は真言家な
どの如く、呪詛祈禱の類なり、傍問定るべし
黄帝の世の廣成子書の為仙家なるべし
託して作りなるべしといくつ、黒書の首座者の
来五と名を附陰陽五行を配し、六神を象
り、一行禅師の報微集為仙家の勅宣法
なり、女媧氏の五彩なり、或は火災を鎮め、或
疫疾を除くなどいふなり
こ、思ふものなり、元白は書家の用ひべきなり
今は元白と一つなり

また隠岐国のうい紀聖のあるのあるも

北書流の著者淑慎高は誰れのことか知れざるも、伊と称田の者歟、淑慎高の橘清一伯を蒙見し、これを一人の柳之世史が国の画橘とあるを一冊に刻し、諸家の題詠を載せ、是一説に既に刻したるも、清伯の序跋に著者が画とするることが知れ、六姓氏もおよそ知れ、人名字号を魏院するも、これの木芙蓉の子と阿波の暗つ山のことが別つて、木芙蓉のまこと、コンナ者歟に通じて子がちるとは思ひも寄らぬ、つて、北人が多く画を出せ野ハれもある人ひ者歟の人とハ多くハ知らぬ様ひある

十二行

○時々又国者を漁り江戸歌あ伎年代記十八冊續江戸砂子四冊を編み、年代記は馬場の著述で初篇二冊二篇もし五篇迄四冊ワて續出したものの、一時の珍らしから成るものあつたが、今ハ如何ほど稀くなつて、現に北の儀が四十五冊のひある、江戸砂子ハ多く流布してゐて、古版と再版とがある、菊屋治兵の著ひ珍らしくなるのあれば、續篇ハ如何ほど、こんも喜保二年の版ひ、名寄の横ひ面白味が薄い為めか、西篇ハ二版を出し、然るに面白味が薄い為めか一版しか出ぬ、隠つて北方が稀んとある、北著の色のあ花盾の釘が見あつたから、婚ひ入れて、こんを以前婚多の松永子登の集ひ山陽と縁があるから、隠者

頼山陽を著述の際に一読を乞ひ入手、今ハ十日の菊ではあるけれども、遠人を思ふと、行かう山陽のことが一向まのへ、僅うに山陽の書に接する一句を得るのみ、詩歌も山陽ハ全く施してゐる点、北人ハ詩を崇山淡宗と学んだのだ、二家の詩うまく、又春琴の話もある。

二月廿八日記

愛犬 茶の間に眠る

児 戯れに撮

影

マグネシムにも変ずゴット してゐる所と宮

さを取られるとも撮んでゐる

十二行

玄旨法印酒の銘とも續江戸初年とた左の十二箇条

一切のものの味ひをとをぬきたる酒をハ不死の薬と言ふ

二くさをもてさんと八重つくハ酒を博し今堀ハ

三寶の花廻りもおこる酒をハ楽く思ひのもくし

四ちすりも上戸を笑ふ下戸ハ、酒解よりおうえけり

五戒とも酒をきらもいたんあり解狂するとなるけり

六根の罪をもとゞめすくハ酒を博し今極楽ハ

七ちとをおきそのむこを無用をん人のくせ今酒をいとひそ

八相の道廻りおこる酒をハ酒を博し今徳方ハ

九品すりも上戸をてらふ下戸ハ、酒をにしもうひけ嘲り

十善の主位も我ものとも酒おもも酒の威徳をけり

るまでもなめらふ我身いつもなく酒の文をを楽をする人

千秋や第年ちとて祝くとも酒なき時いさひしうつけう

○酔後雑と新くまひ（二月廿八日）といふ題を文類を
かきつく、ものもちまうの寒いもの正午赤坂を出
発し例し洋食屋田屋風に一杯を傾けて下物をもの寄
りも注ぎものをオーンドーブンもあり、チーズもあんパナ
ラデンもあり、葉巻の煙れもあり日本酒の味
とすることのなかなかに紙しかしあるいはまんまことも味を
賞ひ者ひ物の素のハ別と用もなく机を
のことを午後八度を寄せもつけさんが大ぶるぶ
徒女の飾りいろ〳〵考きつくかの論あるもきつ
のみをう、眼前に横のつを横山地貴博士の近著
世界の文明者といふ冊過ぎかある、地名が恰

十二行

こも自分の心さうの日世と河内人とも隠者横山陽と
ペーパーを同くし大きさを同じくしまひ毎日
ちく論味を成して毎日論文の続けて
学上のいろくのことをもうう面白く覚ることがある、
えこ位て初めて知つたのを日本南アンアスを初めを
踏査したことを横山と中路銭次郎一人ものと
いふことは、あれはすつこんとの外国旅行のかりの素
もあれとそのさしが子ア北を（中）かろ雑を買しん
踏査をやつたとの冒険和沢ものが可なる番
業をある中路も横山も友人であるいろの親雑こ
新しとのおのくこの同伴も知をを千本田汀しん旅
出れ而し役等が北の険渡の地を踏破するの祖

びあると初て大白を浴べしい氣も起りて、亦新電
氣を設置して白石岩の名をはいしておることハ知
つてゐるけれども其の由来ハ未だ横山に伝を初めて聞くことを
得たり云く

白石岩といふ名の詩的な名称で今日之を動力に用ひるハ
元良の水車のやうな古の手法に依るそれハ
すく、又道楽をなる)して来ることなく感ずるなる。
若しそれを如何に利用したらの方法二年
前ハ佛教アんがス山のグルノーブル附近にあ
る白石岩の名の附いた地点を利用さ
んとの計画を深とする川のまつひまつたこと
ある、それから北の白石岩で電氣を起すとの話を

十二行

聞いたのも亦同じ出地にあるが時ハ明治十六年にあつたと
ひかる此事僅か四十年間に於て電氣といふもの
実者の大発展をしたこと今日世界の注目の
要素の一となるまでのこと

これを後に見つを見るのに白石岩の名称の起原の
又ひまに、自分が明治十七八年頃新潟にて主事
びあつたときナイヤガラ瀑布を電氣と変
するの法を研究の結果(会社)無代ら安きおもしろく
思ふ場をかくて設定こと掲げたことを思ひ出す
これのあるとなるすが如きまつたくかゝる問題のこと
つたことが知れる、地震に就ても審しい説が地震のあ
る等ならび地震学の為ハ地質学の為ひるけれハな

あ地の質と場合い地震等の多いことそのダメと感じた事もあり東京のことき ブヨくしれ地震に危険の多い土地は大地震を経ての後 土地がかるることの事実ひあることを体験した自分の現住地八王子川縁ひ震動を強度に感じ庭に築山を造り池中の場合家屋ひ沈ひ一部傾ひてある。なおし全体の土地がいくらかタマツタ様な感ふ震災前ある門前に重量を載せた車力かるるとまた家屋が倒壊した人もあり家を呼人とこともある然るに震後家の来た之分の修理をなくすまでアチラコチラ大枝木をもつて家を支へてゐる住ひあるのみ往前のごとく車力かる



過ぎても震動を感じ、自分の毎日の書物を通ずるを以て出来数年も書ひたる好まるこうれ彼者のまれ手を延べてゐる。今を彼書の方が割合に價が高い、それを稽古の為に設すると面白人が彼者といふこのあいだ書くと云ふ事があることを感じ世界の風俗をあらわすとあらい遠えん考証家ひとが貴こそうる文献捨しと、あらい遠えん面白ひあると思つて其の材料ともなるひある。多く市井の者ハ漢学の者ハ俳諧のや絵画の者の鈴会とうつてゐる事ハ絵画を見識からいかしらあの者の事実や伝説ひとをみるのまくる者き、元拵や修飾をやつ拵ら

ら奴隷分愚なることも無いじゃやうのが寧ろ正直の者と
おもしろみがある、俗者は清らと撥付すべからずと感
じ、或る俗者に（四歳男あるけ）即非和尚の表
ことが出てみる、其の時は男色流行の時代の表
傳ひも充ちまると情趣の文能を受けるおもんがあ
り、即非はあちらこちら流寓あと出うけて居ると云つた
のは、とうかならずの時と美形のめき勿論男子ちとも
給仕を出しとひのくるる、破戒の端とするからとは
ひとある、これを俗者と記と前と言ふことと敢
て交渉はないのがこころ書目きるけもあるく、コシナ枕
を見ちゃしこと差くは数はいしいことを貪す為める
四五日目の友人が東洋文庫を分借りて汗青



会といふを後ケ月初分を借りて見た、寧ろ人がある
かるいかがうんが、互ひに脱面ちくいるくと言ひかはすこ
とが無もあり、談論と渇して一杯傾けるのちくの
ちの、此分を内田魯庵のいふちと黄表紙と敵うた
ず」といふ此が為る、芝全交の黄表紙と三馬が閑事
とちのを敵をおれたいとちと其の民名まで胸を標
精しと和手を投かす前に小出稿とちる
此と少（四と一）笑しに、美術俗出部が寄贈ひ焼
けを除く後無し毎月一回共産の為人を聘しん
書畫骨董談を少日きに同業者の智見を通
発しといふのを、合ちの山田が日活に来り買
十一のうち是能先生のお話しをと勧める来れ、

前と誰んを聊とも変へる流節廣を頼人れが張
流が仕り堅る きた時と遅屈しといふに、何時頃
きるのかと少え居る二時頃位といふ、えんそう一五
りの流は出来ようが、おんのをザツリバラシたル節を
つと流は南方の奥かあるも聴あるを変けが見い
から別と準備もするつ方が宴ろよからと
早速承流しに、一杯飲み傾けそうそう別
ひとく出来るが真面目に同業者七十名聴
少するといふから、もう一番おもち
いことである、上方ひと既ここの稽の事を早くからや
つておるといふ、同書地の義刻家服部耕石かやて
来て開ひから何か彫るもそれといふから、印定

十二行

多種の印材二顆拵を拵出し、これを光の三弦
を張つに材の残りも印材を作りに善る為
とあるから愛ん良材ひとる、印文は咲嘲と楽
し強ひが、咲の縁固ある所から、何とうく刻
第かおこり、「乙丑六十六」「春城堂」と彫えしと頼
人に、まい年齢をを刻すべき白髮
思つても又に、どうもうくく搗用するものから、
来年を寿ろ印文で咲のうするが紀念のうると楽
しまに、何人とうもしれ、自分はうとと人
思いるのが此年の末からとうもまると人が長寿
と呼ぶのうと降参する

二月廿日記

一今から約五十年前を邦に来てみたナウマンといふ
獨逸の地質学者は東京の平原に就て一論文
を著したが、その中に隅田川口の海は古代有
かう今日までの間に約一里半前進したものである
然るにその前進速力は一ヶ年平均四十三尺
であると言つてゐる、然るに果して正確なる事実
やは別問題として、兎に角東京附近の地こ
陸地の年々増加しつゝあることは事実である。



下町辺一帯の地の表面は海泥のあるものにも
拠もすると思ふ農商務省地質調
査所の技師ナウマンが満期帰国
するの際に氏の指導を受けて若干同氏
を西王の亀沼に招待した事のあるを聞
いた、その時沼の田の向こうに相撲が始まつて
居たから、五人の中の相撲の一人が大達と相
三の二関取を呼び来て、客の元招をさせ
ると、すると関取の側に伝つて相撲を踊
り出した、すると ナウマン先生は自分の一ツ
踊つて見ようと言つて出掛の一方に穴つ空

つて、あ手を腰に南て、且その時を突張る
左の如く言を踊の比、
オランダ、キンライ（近来カ）滑り足、滑り足（滑
り足）、ジヤンガホースイ、ジヤン、ジヤンガホース
イ、ジヤン
オランダ、キンライ、重子足、くく
ジヤンガホースイジヤン、くく
オランダ、キンライ、もちり足、くく、
ジヤンガホースイジヤン、くく
ジヤンガホースイジヤンとハ月琴の流
れの潜中の一節也なる
滑り足の時ハ滑る真似をして、重子

十二行

足の時ハ一方の足を他の足に乗せて、然る後元
に、もちり足の時ハ左右の足を交互に、
然る後元に戻る、
之を見て一同ハ腹を抱へて大笑ひ、そして踊
踊の由来を聞くに、先生の言ハく、是ハ自分
が伊豫の宇和島に出張の比、土地の芸妓
を揚げて宴を張りし、芸妓が自分の外四
人ありしに、そこへ一人の者を誘うて又七人祭
する所、若ケンプフエルが自分の面前で踊
つたといふ踊ハこんなものであつたかも知れぬ
と言つて、その真似をして、其時ハ別にして、
も角も、宇和島ハこれなる踊が流行みて

ことハ頗るたのもしき事なり、なを宇和島の殿様中
ハ蘭学熱心者もあつたとのうわさあり
又シーボルトが文政九年船長に随行して江戸に登つ
た時、セクスタント、リロノメートル、寒暖計、時計、
磁気器等を携帯し、金すから星座を計つたり、山の高さや下の関の海峡を計つたりしたり
そして富士をも計つたが、その記録ハたのもしき事
箱根宿と着いた時ハ、氏の随員のビエゲルハ
湯を沸して、その摂氏約九十七度ハ沸騰したと
のそして、山の高さも約千二十メートルと推定
したとかフンボルトの計算ハ、摂氏二百
八略々三百四十米とおもわれることあつたとかうもむ

十二行

ある、北斗のうハ今のから見ハバ何ひもものことのやう
ではあるが、あれの郷人ハ、摂津を回船らしいことも
あるとか

○草一山ハ自分の好きな坊さんの一人ひとりある、北人の経歴が
股本ではあるとやうき、ゐるぬることを久しいが手ハ入らぬ、曾て
北人の事歴をザツト調べたことも、あるが、其の書き
抜ハ散失してハ手元ハ無い、偶ハ思ひ出して、
書出ハ第一番ハ、白隠が揭げたもあるが、多くの誤り
ハあるも、北人が愛ス抜切を収めておく、一山が信
ずの寺の開祖であることハ今ハ知らるるとか

三月二日録

# 一寧一山國師

本方昌

長野縣下諏訪町の慈雲寺に、古畫の十六羅漢を藏すると云ふので、私は知己の但馬氏と之れを觀るべく、其の寺を訪ふたが、折惡しく住職の不在の爲めに、それを觀る事が出來なかつた。歸りかげに、ふと山門を仰ぎ見ると、立派な筆蹟で「白華山」と云ふ額が掲げられてあつたのに氣付いて、暫くは見恍れて居たのであつた。それから一年後、昨秋再び下諏訪に赴き、但馬氏と又其の寺を訪ふて、一寧一山の書の山門の額を見入つた。さうして、此の寺と一寧一山と深い因緣があるやうに思はれて來た。

住職に會ふて寺寶の十六羅漢の幅を觀たが、之れには感興をひかなかつた。けれど寧一山の書幅と友梅の書幅とが、非常に興趣を覺えしめた。さうして、寧一山が此の寺の開祖であつた話など、住職から聽く事が出來、また「白華山慈雲寺略緣起」と云ふ小冊子を得た。そこで寧一山の書なるものは古今の名筆であつて、鑑賞家の間に頗る珍重されて居るのであるから、私は今其の小冊子の中から、國師の略傳を拔萃して、之れを江湖に紹介する事も、あながち徒爾ではあるまいと思ふ。

## 略傳

師諱は一寧一山と號す、宋國理宗皇帝の淳祐七年、臺洲臨海縣の胡氏に產る、鄉黨之を神秀と稱す、稍長じて桑門を慕ひ、郡の鴻福寺無等融に投じて侍給する事三ヶ年、辭して四明太白山普光寺の虎謙に就き、法華寺の諸經を習ひ、二歲を踰へて得度す、律部を城中の應眞律寺に聞き、台敎を延慶敎寺に學ぶ、已にして義學の支解なるを嫌ひ棄てゝ天童山に上る、山主簡翁敬問て曰く、一心三觀何を以てか體と爲す、師乃ち一笑す、敬、參堂を許す、師こゝに坐究する事二ヶ年、去て育王山に上り、藏叟珍に依る、珍退きて、東叟愷寂德照極彌相繼て住持す、師、四主に奉事し、獨り頑極を欽慕す、一日、宗を頑極に問ふや、極曰く、我れに一法の人に與ふるなしと、師乃ち言下に契悟す、辭して天台雁蕩の間に雲遊し環溪一橫川瑛巧巷祥淸溪沅の諸老に參し、敲磕酬酢、益造詣を深うす、至元二十一年五月十八日、明州の鰲峰山祖印寺に住し、棒霅喝雨橫括倒用十ヶ年、大に祖風を揚ぐ、時に慶元府補陀山觀音寺の如智、師と往來親密なり、一日、師に語て曰く、我れ老て衆を領するに倦む、請ふ、我が兄を煩さんとす可ならんかと、師耳を掩ふて之を辭せり、然れども如智、潛に使を宮に馳せ、讓賢の意を陳ぶ、府帖至るに及び已む事を得ずして之に移り、接物利六ヶ年、補陀の地たるや實に海岸の靈區たり、師の道光、此の勝域と並び騰る。

是れより先き至元十六年、世祖忽必烈、宋を滅ぼし、國號を元と改め、進んで我が國を併呑せんとし、我が弘安四年戰艦四千五百、全軍十四萬を派し、西海を掩ひ筑紫を襲ふ、一夕、激風怒濤の爲めに悉く蕩盡せられ、神洲の威靈を恐れたりしが、贏志未だ歇まず、屢奇計を盡し、我が國の佛乘に歸嚮すると聚し、有道の名德を遣はし勸誘して以て附庸となさんとす、如智、既に其任に當る。然れども老病のゆへ未だ發するに遑あらざりき、偶ま忽必烈逝き、成宗位に卽き、先策を施さんとするや切なり、是に於て俊髦を選拔す、臺評、師に湊る、乃ち大德三年五月二十一日、宣慰使阿答剌相公に勅して、一省郎及慶元府の判官僧錄司知書昌國州の知州等五十餘人を遣はして、師に金襴の袈裟及妙慈弘濟大師の號を賜ひ速に滄溟に泛んで、日本に講奴せよと、軟語慰諭し以て信書一通を附す、師這るべからざる事を知り、命を受け船に投じ十有三日にして筑紫の太宰府に着する事を得たり、時に本朝の正安元年なり、師年五十三、

師所持の信書左の如し、

有司奏陳向者世祖皇帝　嘗遣補陀僧如智及王積翁　兩奉璽書道好日本　咸以中途有阻而還　爰自朕臨御以來　綏懷諸國薄海內外靡有遐遺　日本之好宣復通問　今如智已老　補陀僧一山道行素高可令往諭附商船以行庶可必達　朕特從其謂　蓋欲成先帝遺意耳　至於淳好息民之事王審圖之

太宰府、速に使を派して之を執權北條貞時に告るや、貞時疑て遊偵となし、伊豆の修禪寺に編置す、師乃ち任運放曠、徜徉として只道を樂むのみ、貞時、師の超然萬物に無心なる事を聞き、同年十二月七日、迎へて建長寺に住せしむ、貞時素より禪道を重んず、一日師の提唱を聽き、漸汗迸出し大に抑留を悔ひしと云ふ、偶ま圓覺寺、席を虛ふす、貞時師に之を兼攝せしむ、時に兩山一矩叢規肅如として宗風大に振ふ、翌正安二年五月十五日、當郡守諏訪神社下宮大祝金剛壹人公（滿貞居士）の請に應じ、來て當山の開祖となる、而して後席を石梁仁恭和尙に讓り、乾元元年十月十一日、圓覺寺に移る、時に、

夢窓國師（京都天龍寺開山）來て師に參し、問ふて曰く、某甲已事未だ明めず、請ふ師直指せよ、師曰く我が宗に語句なし、亦た一法の人に與ふるなし、國師曰く、師慈悲方便せよ、師曰く亦た慈悲もなく、亦た方便もなし、國師益疑着し萬寺に住ひて高峰禪師に參す、峰問ふて曰く、一山何の言句があり、國師前話を擧す、峰聲を勵まして曰く、汝奚ぞ言はざる、和尙漏逼少からずと、國師尙ほ未穩在、

師、圓覺寺を辭して伊豆の那賀郡に往き、萬法山歸一寺を創立し、去て奧州松島の圓福寺（後ち瑞巖寺と改む）に住し退きて甲州東郡中牧の庄に常牧山淨居寺を開創し、辭して鎌倉の淨智寺に移り住す、

後宇多上皇、師の道風を聞召、思慕已み給はず、正和二年八月一日、勅して南禪寺（京都五山の上位）を董さしむ、師上堂、錫を卓して曰ふ、

和氏之璧無瑕、隋侯之絕類、雖然稀世之珍、得者更須撲碎
何故如斯不見道、匹夫無罪、懷璧其罪

上皇、荐りに幸して法を問ひ、眷遇甚だ渥し、時に輩下の道俗、師の臨光を喜び、參仰禮謁競ふて後れん事を恐れ、絡繹織るが如く、門外常に市の如し、

文保元年秋十月、師病を示す、上皇屢幸して之を問ひ給ふ師自ら起つべからざる事を知り、二十四日の曉、遺表を認め

奉る、其表に曰く、

一寧頓首

法皇陛下、聖駕幸本山、寔門緇歡光也、一寧不幸臥病數日、百體擧而不仁、不能再瞻望、龍顏、大變時至幻質將摧、借攄忠情入無生三昧耳

又、辭世の偈を書して曰ふ、

横行一世、佛祖呑氣、箭己離弦、虛空墜地

翌二十五日、奄爾として坐脫す、壽七十一、

上皇、表を得、蒼皇として寢室に幸し給ふに、師結伽趺座儼然として宛も生けるが如し、君臣皆嗟悼す、上皇直に宸奎を蘸して、國師の號を贈り、左大臣源有房に宣して齊き祭らしめ、塔を龜山法皇の廟側に建て、法雨の額を書して之を賜ひ、又其の像を贊して曰ふ、

宋地萬人傑、本朝一國師

後宇多上皇宸書　　國師號

朕會聞師道風思欲一覩德儀頃年下詔請來補

先皇聖跡南禪途獲酬夙志神交道契頓僧法味有得於中矣師告以衰募屢乞歸休朕嘆祖道微運因留止焉五載于今玆法體違和疾至彌留臨期告別唱寂於本山末後金提靈明天眞所謂無心道人大法主盟者也稱以國師欲報老師直示之的旨旌驚嶺付屬之金言云爾

文保元年十月二十五日　　一山國師阿徒算

後宇多上皇宸書替

內充而爲道機外發而爲德儀竹篦横揮兮威風動沙界金襴斜塔兮紫雲垂錫、承天子之寵光巨浪浮杯、顯使星之皇靈、聲聞華夷、名振扶桑、泰山之重、東流之長、

師の行狀は、一山國師語錄、本朝高僧傳、延寶傳燈錄等に詳かである。

國師

勅祭　　祭文

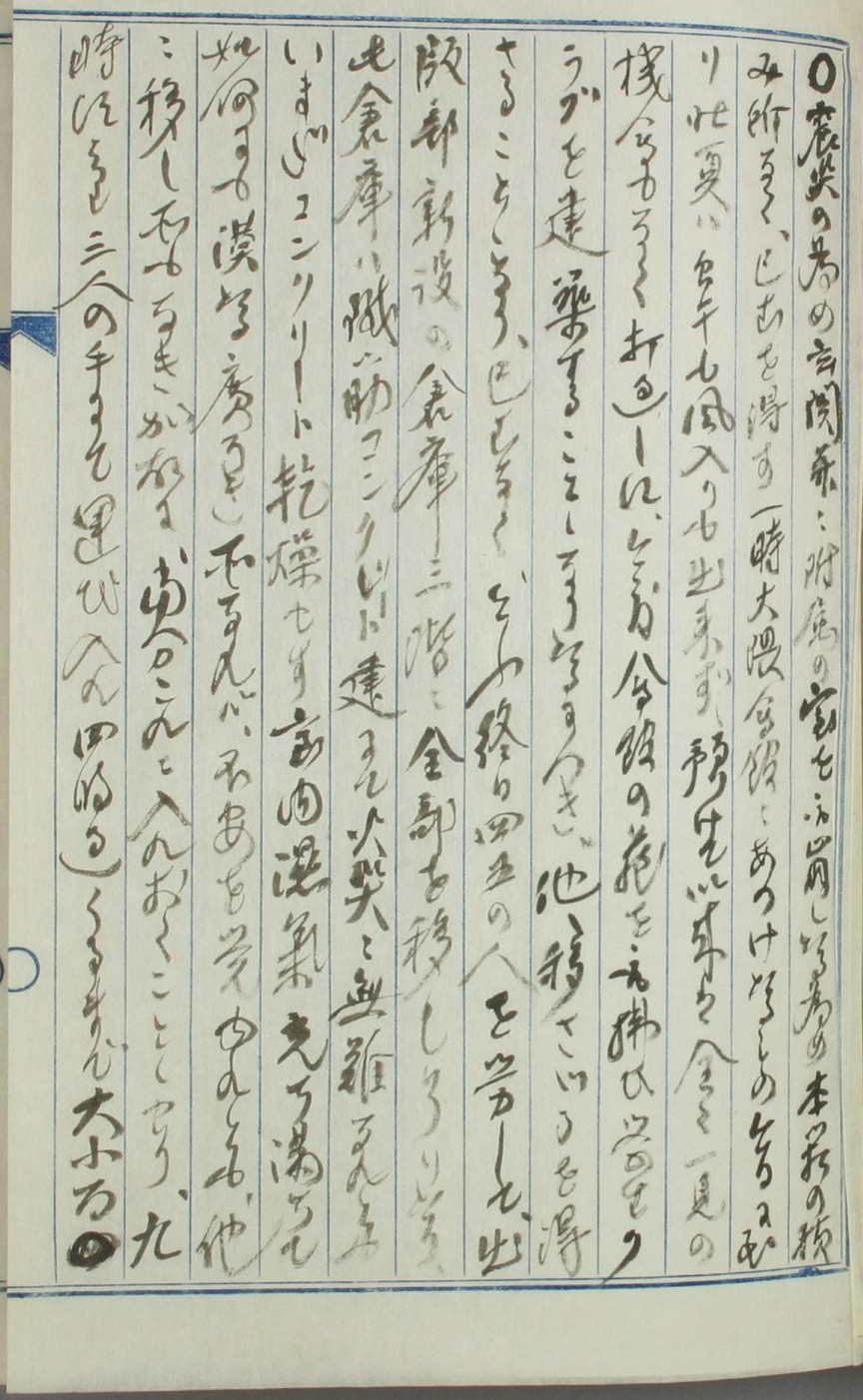
維大日本國文保改元十月二十七日、勅特進前御央太夫源有房昭告于、一山國師大和尚之尊靈曰摩來漢顯宗致欽初祖入梁武帝紆襟增崇至道稽古乃今、先帝梵刹棟託保任靈山附屬眷命弗僭克明克哲問法問心麟鳳爾德金玉爾音光輝祖域榮敷緇林千載迴期功與化參條矣歸眞不留幻質隕玆偉人若亡良弼思慕罔罄死生如一賜謚國師以名副實聖衷孔昭青天白日賻令尊香靈饗可必　　尙享

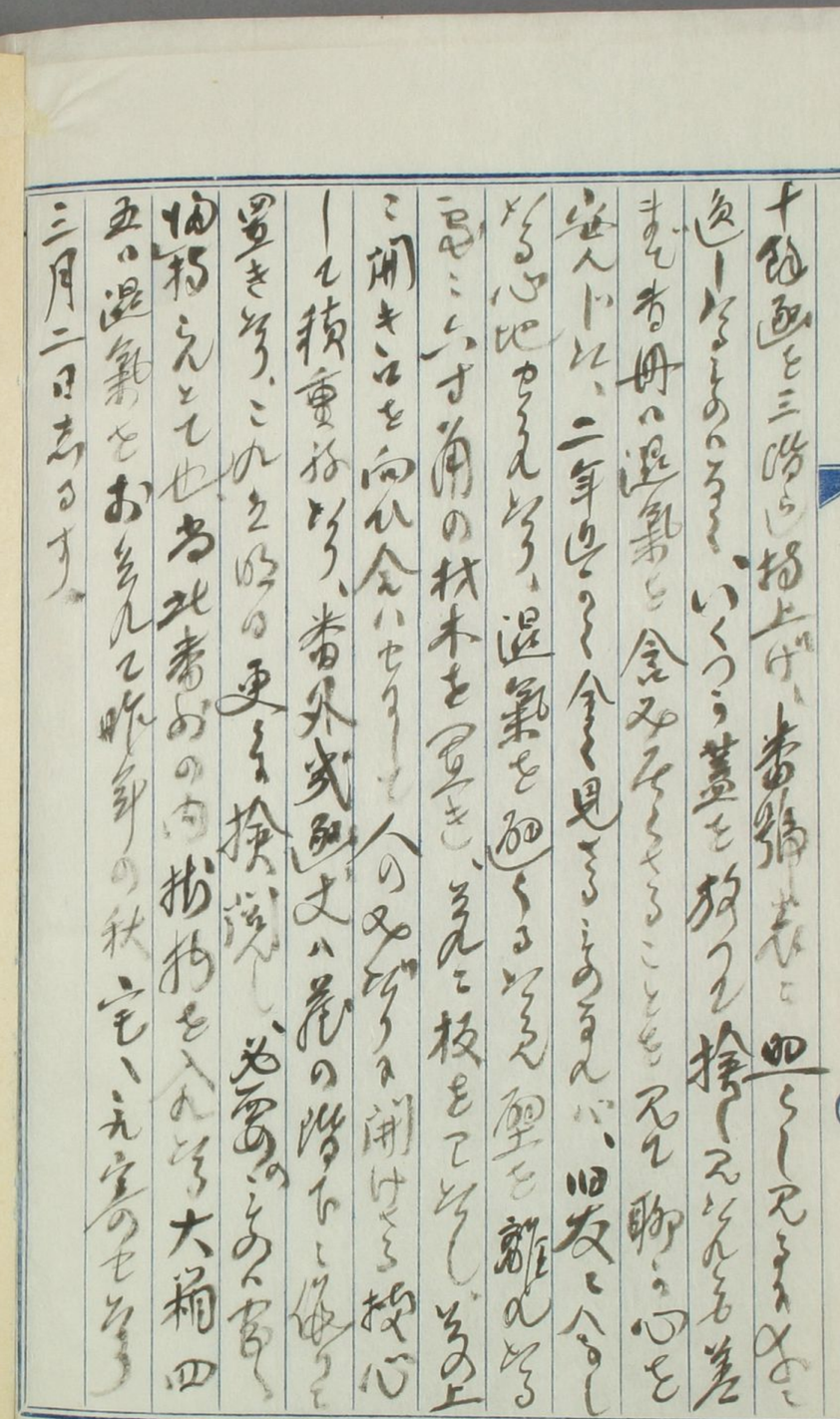
師の性たる宏度慈和にして際涯なし、常に一榻に孤坐し、通謁を須ひずして普く來機を接し、胸襟を開いて能く談じ、人の參請に便なり、當時禪林の法將たるもの概ね以て嚴壯威重を粧ひしが、師の如きは少しも籬壁を設けざりしと云ふ、

師、又筆力勁健、魯公の屋漏の法に達す、故に楮帛を携へ頌贊揮毫を請ふもの陸續として絕えず、常に門閣に充つ。或る時、師の述作の一片、元土に至るや、彼の地の大德之を見て大に玩味讚嘆し、特に芝靈石、茂古林、本中峰等の名宿各々跋尾を附して之を證せしと云ふ。

趙子昂、師を贊して曰く、

截彼南山一仰之極嵩嶽之寧中流砥石、補陀孤絕東海茫々





# 稀書複製會々報

第四期
第四回

大正十四年二月

## 第四回配布本解説

### 小倉百人一首畫稿　冷泉爲恭自筆　一册

（原本松廼舍文庫藏）

この小倉百人一首の繪像畫稿は、維新間際の名匠にして有職故實の學に造詣深かりし岡田爲恭の自筆なり。普通の百人一首の畫本はいづれも婦人や兒童の玩具本たるに過ぎざれば、有職故實の上よりは滑稽に類する誤り多く、歌聖に對して敬意を缺くものなりとなし、其得意の學殖に依つて備さに古畫を渉獵し、衣冠、調度、姿勢の末までも故實に適へるを招撫しつゝ、それによつて百歌聖の像を作り、其第一稿を反古の裏に描き試みたるが卽ち此自筆稿なり。像毎に確たる典據ありと云ふ、その博覽と努力と共に驚歎するに堪へたり。

世に爲恭の百人一首畫稿本と稱するもの二種あり。其一種は爲恭が自筆に成れるものにして、今回複製したるものがそれなり。他の一種は門人恭義の手にて淨寫せしもの。さて又版本として世に傳はれるは明治廿八年に名古屋にて刊行せし『聯珠百人一首』なるが、こは右の淨寫本を名古屋の佛畫家にて爲恭の門人なりし鬼頭道敬が模寫したるを梓刻せしなり。されば原畫の面影だけは流石に傳へ得たれども、描線に現れたる筆力、眉目に籠れる生意など第一稿本に對照すれば、そこに著しきくづれあるを見る。藝術鑑賞に忠實なる者の目より見れば、同日にして談ずべからざる程の巧拙あり。

爲恭自筆の第一稿に關しては頗る錯綜せる經歷ありて、筆者その人のそれと似たるも不思議なり。一

古のたふとき御代を見るよしもかな」とあり。之に

一

觀し得ざりしはことわりなり、其頃公卿中に於て浪

度は反古に混じて塵埃に塗れつつ、轉々して、危く經師屋の手にて下貼り用に使はれんとせしこともありしが、偶々大阪の實業界に在りて書畫の鑑識に富める小川爲次郎氏の目に觸れて救はれ、久しく其筺底に祕せられて弘く世に知られざりき。然るに癸亥の大震火災にて稀覯書萬卷を失ひし松廼舍文庫を惜むの餘り、小川氏は爲恭自筆の第一稿と恭義淨寫の第二稿とを震災の見舞品として松廼舍主人安田氏へ寄贈されたり。是に於て松廼舍主人は新に亟を作りて爲恭通の聞え高き畫家吉川靈華氏に亟書きを囑し、いたく之を珍藏されしが、一日偶然之を古書畫鑑識家田中親美氏に示されしに、田中氏は一見奇遇を叫びて驚喜されきと聞く。今親しく田中氏より聽取せし談に據りて、其奇なる經歷を略叙すれば、蓋し爲恭は此自筆稿を未だ淨寫するの暇なきうちに、浪士らの迫害に遭ひて其儘失踪したりしかば、後日門人の恭義が淨寫し、斯して所謂第二稿なるものを生じたるなるが、元田中家は岡田家と親戚關係なりしかば親美氏の嚴父有美翁の手に歸したりき。然るに幾年かの後、翁の友人某氏此畫稿本を見て愛好の念を禁ずる能はず、其借覽を懇請する事切なりし結果貸與し、其儘某家に留められたりしうち、某氏は物故し、其遺族は斯かる經緯を聞知しをらざりし爲、故人の遺物整理の際、之を反古類と一括して賣拂ひしかば、轉々して名古屋の骨董商などの手に渡りをりきと云ふ。斯くの如く數奇なる運命に弄ばれて屢屢反古と伍し、危く蠹魚の巢とせられんとせし際、惜いかな自筆稿本の初一葉は失はれて跡無くなりぬ。依りて今回の複製には、恭義の淨寫本中より其一葉卽ち天智天皇の一圖(初め半面は白紙)だけを借りて補ひたり。猶又、卷末に恭義が淨寫の二圖を添加し二者の對照用に供しおけり。細字の部二枚も爲恭の筆なり。要するに、此自筆稿本は、爲恭が特に其精力を傾注したる稀世の珍書にして有職故實の典範たり。單に名畫として觀賞に値ひするのみにあらず。

爲恭の事を記したるは尠し。『扶桑畫人傳』の如き僅に數行を費せるのみ。隨つて其履歷を知ること困難なれば、爲恭研究の第一人者たる吉川靈華氏の談



に據りて其略傳を次に錄す。

爲恭は京都の產にして御所繪所狩野伊勢守永泰の三男なり。性晝を嗜み、青年にして既に頭角を顯はせり。此頃より上代の風俗を欣慕する念深く、心を有職故實に傾け孜々として研鑽するに隨ひ、狩野派の畫風を喜ばず、また狩野の姓を名乘る事を快しとせずして冷泉三郎と稱せり。蓋し冷泉とは其母方の姓に因みしなり。されば日常の嗜好も平安、鎌倉の時代に深き趣味を有し、專ら有職故實に意を注ぎ、畫風は元より學問の如きもまた其方向に驀進して造詣深く、國學を究め、和歌に長じ、書も上代樣の書風を愛し、藤原の行成卿の筆意に私淑したりき。殊に上代の繪卷物は唯一の師たり友たりしのみならず自ら繪卷物中の人物となりて其實生活を行はんと企て、每朝未明に起き出て丶衣冠を整へ、雨雪寒風の朝も手に水晶の珠數を懸け、紺紙金泥の經卷を携へて、淸水の觀世音に詣でて禮拜讀誦せしなどの奇行もありき。其の咏ぜし歌に「うたゝねの夢の中にも古のたふとき御代を見るよしもかな」とあり。之に徵しても上世を景慕し、暗に復古に憧るゝ勤王的情操の深かりしを窺ふに足る。其作品の落款には「藤原爲恭」と「菅原爲恭」と二樣あり、よりて多少の疑義を抱かるゝこともあれど、按ふに冷泉と稱したりし頃は常に藤原と落款せしなり。冷泉は藤原氏の苗裔なればなり。然るに後年藏人所衆の株を讓り受けて、岡田姓を冒し、藏人所衆關白直廬預の官職に就き、正六位下に叙し、式部少丞に任ぜられたればそれより以後は菅原朝臣爲恭と署名せり。岡田家の遠祖は菅原氏の出なればなり。されば藤原の署名は明かに其若描きにて、菅原と署したるは三十歲以後の作品なり。爲恭、晩年には從五位に昇進して近江守に任ぜられき。

時しも泰平の夢は破れ、幕府の權威は地に墜ち、慷慨激越の徒京師に充滿し、勤王攘夷と開國佐幕と黨派の軋轢日に月に甚しくなりたれば、此間に介在せる爲恭の如き超凡の藝術家の而も王政復古を夢みつゝありしものが、我は一介の畫人なればと袖手傍觀し得ざりしはことわりなり。其頃公卿中に於て浪

士輩に推戴されし憂國黨の頭領は正二位内大臣三條實萬公なりしが、公は爲恭が有職故實に精通せるとと其畫の氣韵高きとを愛し、且つ其和歌を能くするを喜びて、屢々招致し、時には風流に假托せし宴席にも侍せしめき。そは言ふ迄もなく當年の鹿ケ谷の會合なり。爲恭はもと一個の藝術家なれど、當年の浪士輩と其立場を異にせしや勿論なれ共、愛世愛國の志は敢て他に劣らざりしかば、秘密の謀議にも列席して浪士輩とも交際せりしが、偶然にも奇禍の其身に降りかゝりしこそ是非なけれ。そは時の京都所司代酒井若狹守忠義が爲恭の畫を愛好して彼れを其邸へ招きしが禍因となれり。もと酒井家には天下の稀品と稱されし繪卷物あり、伴大納言の詞書にて土佐光長の畫なり。苟も大和繪に志すものとして其一覽を渴望せざるはなかりしかども、容易に閲覽を許さざりき。斯道に忠實なる爲恭のごときもまた此繪卷物に憧憬せり。されど之を一覽するの機會なく、空しく年月を經過しをりしに、圖らずも酒井家より招かれしかば　宿望を達する機到れりと善び、深く思慮することもなくて赴きしが、初對面に家寶の閲覽を請はんも無禮と其日は其まゝに歸宅し、後日また其素志を遂げんために屢々同家へ出入せしうち、勤王黨の浪士らの此事を聞知し、さては爲恭、所司代の犬となりて機密を漏らすと覺えたり、獅子身中の蟲とは彼れなり、速に天誅を加へずんば後悔あらんなどゝ罵り、時に爲恭に尾行することもありき。爲恭もうす〳〵察して竊に警戒しつゝありしが、一日烏丸出水の寓居へ數名の浪士來り、爲恭を出せと迫れり。されど其際は妻綾衣巧みに辯じて一たびは危難を免れぬ。爲恭は其夜飄然として家を出でゝ其踪跡を晦しぬ。

去秋京都博物館に於て上代展覽會開催の際陳列品中に行成卿の筆に成れる書簡一卷あり。卷末に加茂神光院の住職和田智滿の跋文添へるが、其記する所に據れば、爲恭の人と爲りを推賞するに足るものあり。卽ち其行成卿の書簡一卷に就いて、もと友人爲恭の愛玩せしものなることを叙し、曰く、一夜深更門を叩く者あり。出でゝ見れば爲恭にして、懷にせ



し一卷を出だし、是れぞ天下の稀品行成卿書簡の卷物なり、某今危險一身に迫り、漸く脫出せしも、いつ兇刄の錆となるか知るべからず。天下の寶物を共に失ふは忍びざれば貴僧に預け置かんとす。若し幸ひにして我れ無事なりせば再ひわが手に歸せられよと言ひ終りて、夜陰に乘じ倉皇と去つて行方知れずになりき。其後爲恭は兇刄に仆れ、明治維新の聖代となりたれば、智滿は伶人某に嫁したる爲恭の姉を尋ね、件の卷物を返したる由を言へり。是れに依て見ても、其神光院を訪ひたるは出奔當夜なるべく、それより叡山に潛み、泉州堺へ落延びしも、猶危險の虞あるを以て、轉々放浪して紀州の粉河寺に到り住職願海（大行阿闍梨）は曾て佛學の敎を受けたる緣故あるを以て身を投ぜり。願海和尙は彼れを坊中御池坊の庵室にかくまへり。玆に於て爲恭は剃髮して心蓮と云ひ、また光阿と號し、畫三昧に入りて他意なく彩筆を揮ひたり。當時描けるものは主として佛畫なりき。其作品頗る立派なるもの多し。斯くてあるうち、幕府の忌諱に觸れ、洛南に閑居中の三條公は、安政六年落餝して澹堂と號し、更に洛東の一乘寺に移られしが、其十月六日に夢去されぬ。又爲恭が奇禍の因たりし所司代の酒井候も不首尾にて職を罷め隱居する等の事ありて、數年を過ぎ、京都の消息は確かならざれども、其身に纏はる危險も一過したる如くなれば、時に堺邊まで出でゝ偵察するも怪しむ者なく、また京に留まれる妻綾衣とも信書の往復を始むるに至り、遂に意を決し大和丹波市に出でて某寺に寓し、綾衣の尋ね來たることもありきと云ふ。油斷は大敵なり、信書の往復が再禍を招きて浪士に嗅ぎ出だされ、今日は端午節會なりとて軒に葺きたる菖蒲を眺め居る折柄、妻綾衣よりの急使なりとて一書を携へ一挺の駕籠をつらせ來たるに遭ひ倉皇とそれに乘り丹波市の街道に出づるや、バラバラと現はれ出でたる數名の浪士に要擊されて命を隕しぬ。後にその首級は大阪本願寺大御堂の傍なる燈籠の火屋中に在りきと云ふ。これ實に元治元年五月五日なり、享年四十有三。

（未完）

士輩に推戴されし憂國黨の頭領は正二位内大臣三條

慮することもなくて赴きしが、初對面に家寶の閲覧

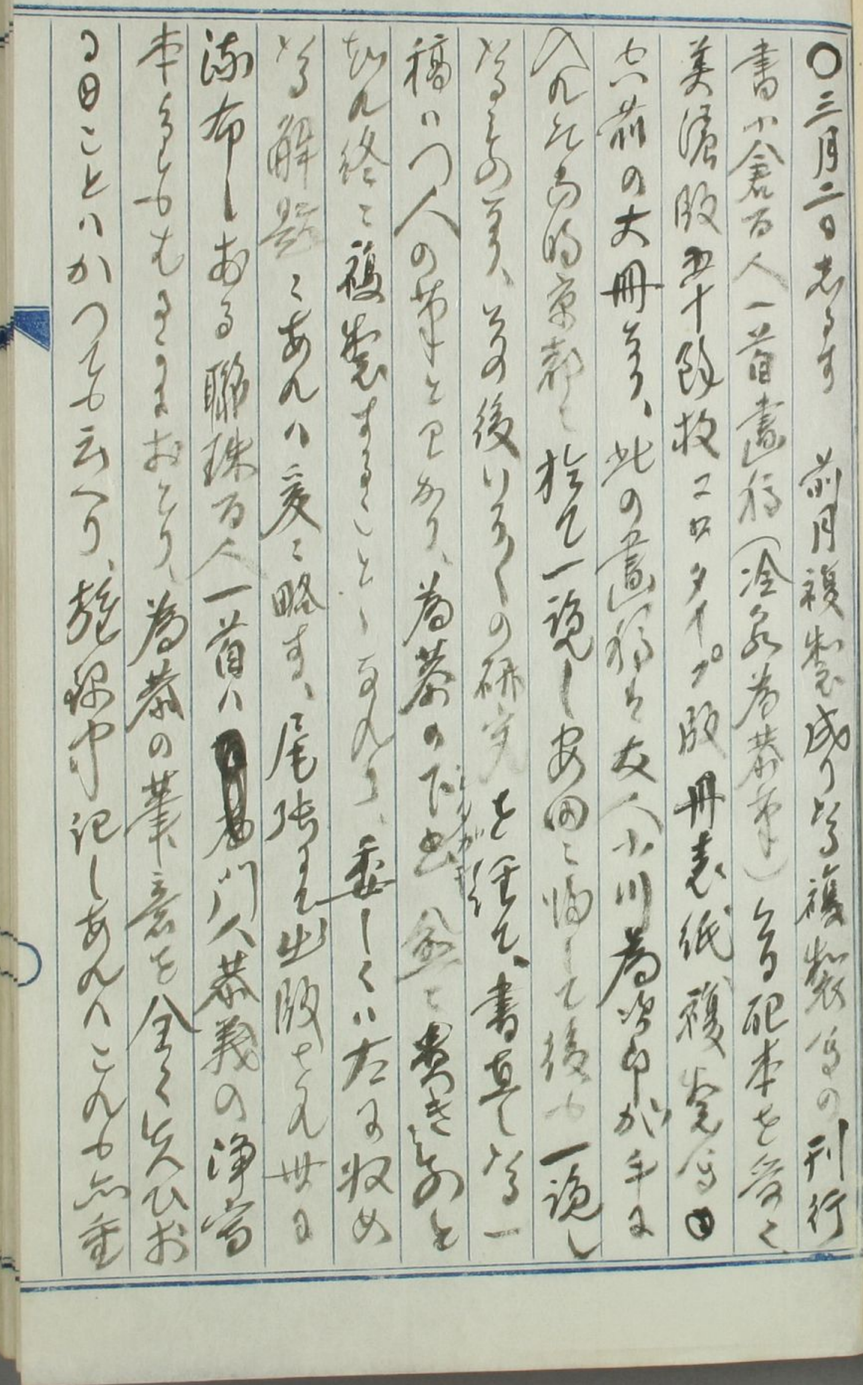


# 新編金瓶梅解説追加

第四期二回の配本『金瓶梅』稿本の解説中の遺漏を補ふ爲に左に追記す。既述の如く第七集の草稿は作者が既に其右眼を失ひし上に左眼もまた重患に罹りての執筆なりしかども、流石にまだ黒白をも辨ぜざる程にはあらざりしかば、畫割りの如きも猶相應に整へり。されども其右眼を失ひ了らざりし頃に綴りたりと云ふ天保二年の『八犬傳』第八輯の稿本に比ぶれば畫割りの描き方も精氣の衰へを見せ、人物の姿形も釣合を缺く所多し。とはいへ、流石に多年描き馴れたることゝて、京傳(政演)や時太郎可侯(北齋)の如き專門家のそれを別とすれば、又種彦、一九のそれを除外すれば、其他の戯作者中には先づ見ざる素人畫の妙味を存すともいひ得べきが、若き頃は版下勝りとさへ言はれし細字の書き方に至りてはいたく紊れたり。其後二年、全く執筆の自由を奪はれ、口授に依りてのみなりし第九集の如きは、筆耕は代筆せしむるを得れど、畫は探り描きになさざるを得ざる由、畫工への注文書中にも見えたるが、げに盲目になりて後までも負けじ魂の熾んなる馬琴が探り描きの跡見えて憐れなり。小兒の戯れに塗りこくる本偶の坊にも劣りて人物の男女さへも明かならざれどもさすがに活氣はあり、されど其形體の果して何たるかは刻本と對照せざれば判斷に困しまざるを得す。口繪第二圖志貴實一郎の傘を翳す上へ歌の突出したるなど、探り描きの實況を語りつゝあるもの、如し。

また此草稿に用ひたるは赭罫の半紙なり。されど普通の罫紙とは異なり、罫線の上へ文字を書くに便なる版式にて、初行と末行の罫幅を細く彫りてある特種の原稿用紙なる如し。馬琴が此種の用紙を使用し始めしは眼疾に罹りて執筆の自由を缺き、書き下し行くうちに文字の傾斜するより、罫線を辿りてそれを防ぎぬといふ説もあるが、罫紙に書きたる草稿は晩年に多き樣なり。また草稿用紙の赭罫、朱文字の書入れは玻璃版のことなれば、いづれも黒く刷出されしは止むを得ざることなり。なほ葉末に刷出せ





祢宜繁政の要事

○哥又神田の書物を訪のに三の書を得たのめし

一 雅路道芝之記　七冊

元禄十五年の刊行なる絵入なる雅路の地誌なれども尤もこれなるべきこの類、前年嬉しく入んなる同じ本ハ後摺なる二冊を缺きの表紙ハ僅のつけなる悪本なる

し、元々初摺なる完本也

一 摩益国産攷　八冊

大義集の編に傳り弘化年なの出版深切なる為なる各社の国産の巻法源責法等を叙しなるものなる農業物



多きを出だしたれ、雖を巻すること

なるも七なる、後も相中に面白なる出

来おるなる、半紙本也

一 破切支丹　石原名人 鈴木四郎著　一冊

此書三後山四郎に傳徽宗に接る印行

せられなるの世に流布し敷て称ら

しかるべし、嬉しき得ハ其の原本なる

寛文版なる、巻尾に年號刻

有り歟なる稀覯の書なる美濃板に

て校数十五丁なる也、候二十四

三月四の記

○吾が日記録する此冊子の記事ハ只に国書の解題

同く讀る方藩の物語、看来れハ図書の範圍を出る
事少なく、且来歴する所の事物の殊に多く、自ら美小、其の
の天地何ぞ甚だ狭くまた、再かく狭きやと、然れども
此今の日中行事ハ主として図書の英集なるあり、
図書と雖も天地も狭小なる、此此事実ハ偽ハらざる
の記なり、此類の旅録者と致味なり、図書の解題と
なるべき迄なり粗略なり、唯唯斯る業録ハ番後
度々ハ、恐く英集の図書ハ終と手を離るる
こと無きを欲せり、散紙有するるハ此記録の如
想なるべしこれハ、此の業録逐に度々可ら未
三月四日の夫なり

○馬角翁ハ松浦武四郎の戯号なり、松浦堂つて



馬喰町の角に家し居るに據る、余が富士山五新町
に在り、共に戯れて互に住地を五家坊と謂ハ人か、
埼玉の浦に(五家坊と)言る極木形の業子をごかぼう
と云ふ、哥枕(おのの)詞秋分味あり、

○老子の郷貴楚の苦縣厲郷曲仁里の人ひとる、
の地名が揃ひも揃つて悪ひ文字なるのハ英国の
老子研究家ドグラスが業かなり、如何も老子の郷
里ハ四さいしいと云ふなるも一奇比

一韓文の紙の部に白州小紙又は白州刺史と獻れこと

一支那の史上に見へる婦人の名に倚既の字を携へんとするが妾の名にもこれと倚既と云ふんらいくらの相類のある點を取るか、やはり呼ぶる都合の良き名が多い様にもある

比紅兒　四羅虬妾　退之妾
園桃　柳姬韓翃妾
朝雲　東坡妾　巷柳白上
真珠　唐牛奇章妾　翠翹白上
遊々　東坡妾　嬌々元稹妾
紅々　張建封妾　聘々
蘇小々

十二行

愛々

皆花童の味がある、どこまでも軽るい義味がある

一三武滅佛、佛終不滅、一韓摧佛、佛終不摧、三武は南武帝、魏太武、唐武宗、韓は韓退之

一武八建仁寺の僧河内に指面に贈を被る河内に下に曰く

見時如白玉、飲則勝丹砂、十年苟面春、
二月花、

○昨日日清印刷會社ニ於テ得意先ニ案内シテ工場ヲ
參觀セシム、来會者多キニ及ヒ数百名ニ達ス、
出張業者若干家ナル新名ノ人モ加ハリ、工場參
觀ノ如キ一時万歳ヲ叫ブ、又モ数世ノ自動車
ニ客ヲ載セ早稲田ノ新工場モ案内シ大隈公邸
ニ晩餐ヲ饗ス、来會者ハ八時社ノ發展ヲ祈ク
シテ散ハセリ、実ニ八時社ノ賞賛ス、実ニ八時社ノ發
展ハ實業界ニ新時代ヲ開ク、今工場ノ建築、之ニ振
付ノ機械ニ要シタル金額五十萬円以上ニ上ルコトハ
出数ノ如シ、余モ會員ニ八時社ノ紀
ヲ以テ一冊ノ演説ヲ為ス、南ノ配ヲ表ス
ル小冊子ノ前後ニ收メタリ

三月廿四日

十二行

一増設工事及設備費

新館及分工場ノ設備ニハ殆ト第二ノ創業トモ稱スヘキ程ノ資金ヲ投シタリ即チ

新館　一昨年四月起工途中震災ニ罹リタル為メ完全ナル保強工事ヲ施シ昨年九月ニ至リ落成ス

工事費　貳拾萬四千八拾壹圓參拾六錢

機械其他設備　拾四萬五千貳百四拾貳圓六拾貳錢

分工場　昨年六月起工十二月落成ス

工事費　八萬參百四拾八圓八拾參錢

機械其他　拾萬九百貳拾圓五拾壹錢

合計　五拾參萬五百九拾參圓參拾貳錢

日清印刷株式會社

一新設機械内容

新館及分工場ニ据付タル機械ハ最モ優秀ノ評アル米國ミーレー會社製ニテ新館九臺分工場七臺ナリ其他製本機械等モ悉ク舶來品ナリ

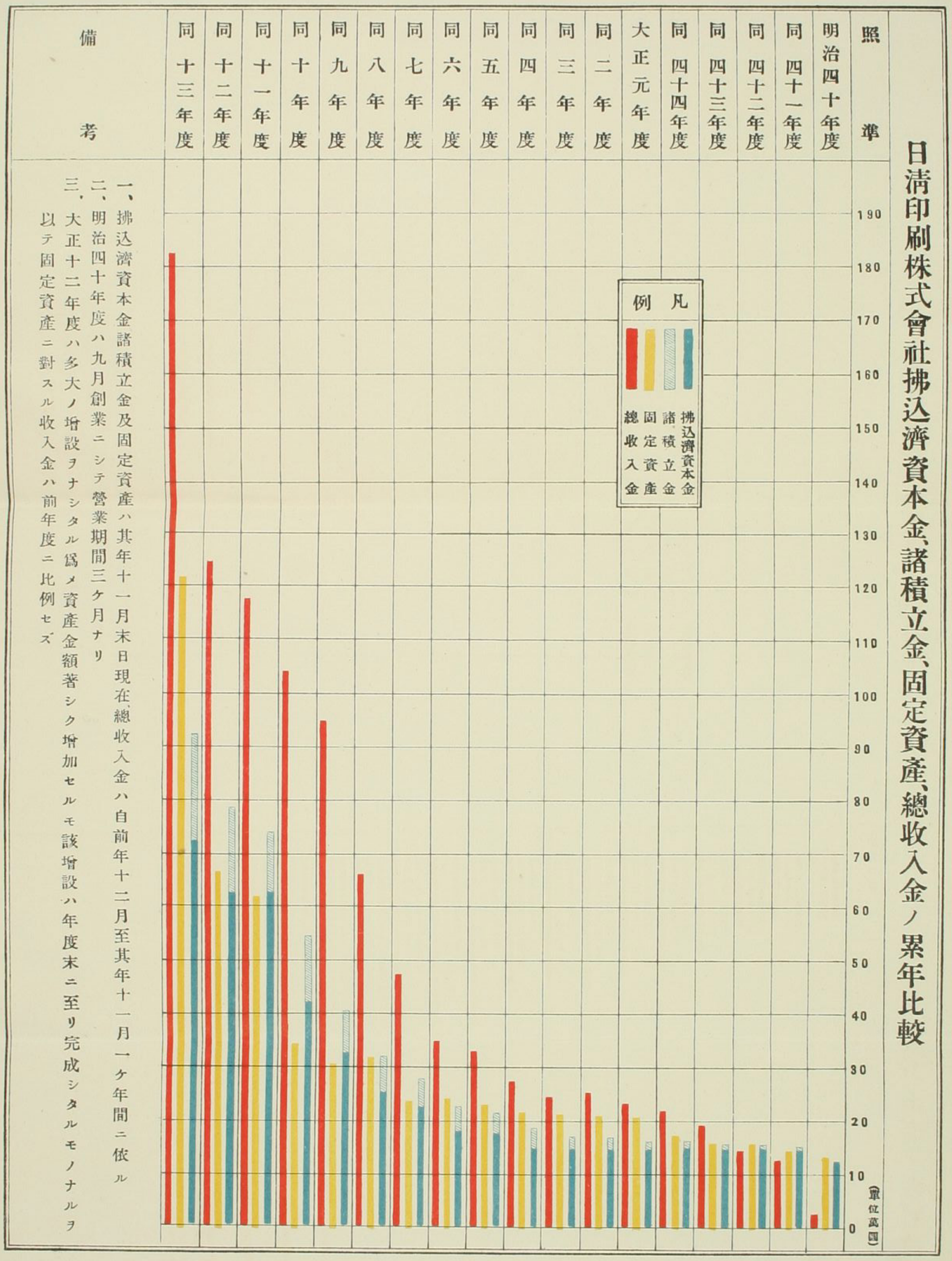
一活版能力

現在ノ活版能力ハ組版ニ於テ一日約壹千五百頁印刷ニ於テ用紙ノ消化約貳千連ニシテ之ヲ仮ニ菊版壹冊百六十頁ノモノトスルトキハ組版ハ一日約十部印刷ハ約貳十萬冊ヲ仕上得ル實力ヲ有ス

現在ノ活版能力ハ組版ニ於テ一日約壹千五百気印刷ニ於テ用紙ノ消化約壹千萬ニシテ之ヲ後ニ掲ク版壹萬五千百六十気ニシテ組版ハ一日約十萬印刷ハ約壹千萬枚ノ能力ヲ有ス

十二年

# 日清印刷株式會社拂込濟資本金、諸積立金、固定資産、總收入金ノ累年比較




備考

一、拂込濟資本金諸積立金及固定資産ハ其年十一月末日現在、總收入金ハ自前年十二月至其年十一月一ケ年間ニ依ル

二、明治四十年度ハ九月創業ニシテ營業期間三ケ月ナリ

三、大正十二年度ハ多大ノ增設ヲナシタル爲メ資産金額著シク增加セルモ該增設ハ年度末ニ至リ完成シタルモノナルヲ以テ固定資産ニ對スル收入金ハ前年度ニ比例セズ

以前述べたる如く、一人学生として新学世界に接する
を以て、人余に向て云く、貴君の入学年を聞く、十
年前迄は新聞の記者を業とせり、思へば、
の人は自分の若い頃政治界に出でし人也、あの人今
者存命なれば、或は二代目のあるべきなれど、而して貴公
の活動舞台社の社長となるべき時、自分の株
主の名を以て席を占めあり、貴公の就任の演説
中経歴を述べられたるを聞きし、初めて二代目と
あることを知りたり、思へば古くいことなる、大
抵政治を志ざす人々は、皆こと日へず、存在するものにき
のひとし、貴公に於ては如何と、余笑つて曰く、
自分の若かりし頃は早くから政治に夕チサワリ

ゆゑ、えん貴尺をして部屋を早く開かせしめるなり
きん、田舎は部屋が狭く貴人と同じ狭きことを云
いれば人あり、えんを村上市郎侍士なり、此人余
が父母と縁故あり、侍士と初第面を今より
二十四五年前、秀英余の家に招かれし者
なり、偶ま席をつらねて侍士と生す、侍士ら余
が膳に附しある姓名札を見て、余を問ひて曰く
あなたの御後の市郎さんかと余答へて然
りといふ、侍士余の面を凝視して怪むことき
色あり、曰くさる芸人なりと、自余は数年前に彼
後所在を尋ねしことあり、えん等の関係ありし人
しく貴方を知る、えんを考へ合はせても、もし



老人なるべきを得ずと真面目に語り、兎角余
を目前異人のごとく考へくる、彼のあるのみ、自
分も破顔して偽物なることを保証す
と云へば、翁は益々の交りあり、貴下の渡と
恰かも撰を一にすと一笑す、此人の年齢を少
なくとも三倍少きことを知りぬ、
此の偶然の出来るは何のゆゑか、
深からしめのゆゑ

○三月廿日、又神田に散策して同書を過ぎ、珍籍一冊
僅うえたの二書を購ふ

一白河風土記

此書白河藩儒廣瀬典の編纂する所
もとハ写本として伝ふ、今七十数年前
始て写さるゝ一本を見せしことあり、大正
元年十月初めて活字本出づ、序文ある
十四冊本を合綴二冊とせるもの、和紙摺
なるハ真本なるべし、唯此の風土記し
白河藩の郡名地名を今に残きるハ
何如ハ尊ぶべき歟、今セー本を以後に
属する分可なり、あらしことを記臆す

一瓶花挿法　一冊

此書細川潤次郎氏蔵本の一写
一名拈華美辰といふ、吾国草書本の一写
吾国既る著



述べ、白氏文集を巻数数釘
皆体裁を同じうす、今此の書をよろこぶ
日有ること能ひ婚ひ入る、此書表花公の
経史を巻数し瓶花挿巻の法とつき
其の鈍滞を補ひ、吾国の農也
化巻蘭須知なる家と花す、此人益裁
こ段味ある美を花と経験を、徒らに文
を弄することなきまでも

○集古荷葉歌こ義を来る、別こ出る事の記事を
唯に芳蕗次西徳次郎の国の帰参の研究」曽
つて西の生前集録ノこ掲載あり一読もしこともあ

りし頃の記臆す、[illegible]
[illegible]
て故多つけなるものとこゝに見出でまゝ、志かし各地
の帝者を用く頃ゝなるい孫とすべ
よへい、こめつけ、とほゝ　松阪
ごろつきよーしーせー　桑名川地
ごろすけ、どをしたい、ほーしーほー　三河
のりつけ、ほーせー　[illegible]地
ほりきて、ほーこーこー　[illegible]地　仁[illegible]
えんちの[illegible]なき手の[illegible]
州[illegible]の帝者のチト表[illegible]
十マリが手伯[illegible]故[illegible]
[illegible]

十二行

[illegible]
其の[illegible]
[illegible]、北人小東京大[illegible]
代余[illegible]一年[illegible]
也

三月廿日記

## 唖十三

山崎鶴城

右はいつの頃なりけん、伊勢松阪に住めりし吾友西芳非山人、人々に問ひて得たる梟の啼聲にして、予も亦少しく補ひし所あり、此頃饑底を捜りて見出でつれば地方別に分類して貴誌に寄することゝはなしぬ尚大方の増添をまつ、芳非山人は理學士にして西松二郎と稱す、實は長崎人小澤氏の子なり、任に松阪に在りて工業學校長たり、淹磨をあつめ狂歌を善くし、洒脱にして然も儼然たる所あり、安政一年五月十七日生れ明治四十二年二月十六日歿松阪禪宗養泉寺に葬る。

山城京都　よへい、くるつとかえせい、
　　のりつけ、ほーせー、
攝津大阪　よへー　ころつとこけー、
攝津北部　くるつとほーけー、
大　和　のりつけほーせー、のりするけ、
伊勢松阪　よへい、こめつけ、とほーせ、
同　桑名　ほこすけほーせー、士族地
　　ごろつきよーせー、町地
尾張東春井郡　でんすけ〳〵ほーほー、えーつれ好
　　連ぢや、つれてく〳〵、連れて行く
三　河　ころすけ、どをした、ほーほー、
　　ごろすけほこせ、
遠　江　ごろすけほーほー、
遠江中部　ごろすけ、ほーこしよ、ほーほー、
駿河藤枝　ごろっちよ、ほこしよ、
同　沼津　眞菰刈る沼津の里の梟は「ころつちよほ
　　ーこ！と朝よひに鳴く　不貫舎
甲斐鰍澤　ごろつち、ほーこ！、
相　模　ごろしち　ごーごー、
同江の浦　ごろしち、ごーごー、

羽前庄内　のりつけほうせい、
同　新庄　のりつけほうほう、
同　鶴岡　てでーぽつぽー、のりつけほーせー。
羽後金澤　のろすけほーほー、
同六郷町　ほーほーのろすけほーほー、
磐　城　ぬりつけほーほー○でれすけほーほー、
磐代會津　のりつけほーほー、
會津北方　ほーい、ほーい、
同　福島　ほろすけほーほー、
同二本松　ふーくー、のりつけほーせい、
　　裏の妻君の名をお福といふ型は晴天なり
同須賀川　ほろすけほーせー、
紀　伊　ふるーつくのこ、のりをーすりをけ、
同　日高　ふるっく、ふうふう、
同　熊野　ふるつく、ふーふー、
同和歌山　かゝ、のりすりをけ、
伊豫松山　ふるつくほーほーは雨
　　のりつけほーほーと鳴けば晴と子規報ず
　　或日のりつけほーそー、
土　佐　ふろつくふーふー、
同　高知　ふるつくでしこしこひとり、



　　ふるっくふーは雄　でしこしは雌
阿波德島　ぼろきてほーこー、
丹　波　ほーほーふるろっくほーほー、ごーへー
　　ごろくと、かやせ、
同　龜山　ほーほーごろつとかやせ、
但　馬　のりつけほーそー、
因　幡　のりつけほーそ晴のりつけほーせん雨
同東伯郡　ごろくとほーせん、ほーほん、
同圓青谷　のりっけほーせん晴ごろつけほーせん雨
同　鳥取　のりつけほーそー、ほーほー、
　　どろつけほーそー、ほーほー、
　　どろつけほうせん、
伯　耆　ごろくとほーせ、ほーほん、
同　次山　ごろくとほせ、ほゝー、
出雲簸川　そろつとこーか、てれつくほーほー、
同　松江　のりつくほーせー、
石　見　のりつけほーせ、
美作津山　ほろきてぼーこー、
備　前　ばーばー、ごろくとほしたか、
同　岡山　ごろすけほーほー、
　　とーしてとーこい、

同　秦野　ごろひち、ごーごー、
一藏御岳　ほろすけほーこー、
同神奈川　ぼーぼー、ごろすけ、
同所近村　ごろすけごーごー、よがあけたら、すを
　　つくろ、
同八王子　ほーほー……ほーほー、
同　川越　のりつけほーほー、
同　騎西　こーごー、ふろしきだいこー風呂敷大根
　　ごまみそでもゑーぞー、
同　江原　ふろしき、でーこー、
同南足立　ごろすけぼーこー、
上　總　ずるつとほーこー、
同山武郡源村字植草　ずるつとほーこー、
同長生郡　ほろきて、ほーこー、
同　流山　づるつとほーこー「あしたおきてすーつ
　　くろ」
茨城南部の下總　ぼろきてほーこー、
千葉縣下の下總　ぐるつとほーこー、
常　陸　づるつとほーこー、
同　水戸　ほろすけほーほー〈〈〈〈、
近　江　ほーすけほーほー、

美　濃　のりつけほーせー、ほーほー明日は晴
加州金澤　のりつけほーほー、あすは晴
越前今立　のりつけほーほー、
越後尾瀬　のりつけほーせー、
同三島郡　のりつけほーせーと鳴けば晴
　　のりつけとりこめは雨
同南山城邊及高田　のりつけほーせー、
信濃小縣　ぼろきてほーこー、
上野前橋　のりつけほーほー、
同　多野　ふるしき、でーこ、
下　野　ていすけ、だいこ太鼓　ぶつざいた打裂た
同宇都宮　ごろきち、ぼうちよー、なたもつてこい
　　五郎吉庖丁山刀持つて來い
陸前仙臺　みそつけほーほー、
同桃生郡　のろすきほーほー、
陸中一關　ごろすけほーほー、
　　ならつけほーほーならつけほーほー、
陸中盛岡　のろづけおーほー、
　　のろつきおーほー、のろつきおーほー、
陸奥福岡　のろすけおーほー○のろすけだいほー、
青森弘前　もろしけもーほー、

備後　ぼろきてほーこー、
安藝廣島　ふるつくとーこい、ぼろきてとーこい、
長門　ほろきたほーこー、
同阿武郡　ふるつくふーふー、よがあけたら、すを
つくろー、
同　萩　ぼろきてほーこー、
筑前　とろつこどーどー、はなくそくわしよー
同　福岡　こーぞーはなくそくうぞー、
こーそーかなくそくうかー、
筑後久留米　こーぞーかなくそくーか、
こーぞー、はなくそくーぞ、
豐前宇佐　こうごー、つうしてづうくへ、
同耶馬溪　ぼろきてほーこー、
のりつけほーせは晴
豐後日田　こーぞーかなくそくーかくーか、
日田星村　こーぞーかなくそくーかくかー、
こーすーころつとほーせーは晴
同　中山　つーしてつーくゆいー
疾くして疾く來いとの意味　○ころくと鳴けば犬を呼ぶなり、人の死ぬ前兆、
西國東郡　ふうきてふうふう、

東國東郡　つうしてつうきい、
肥前長崎　こーぞーこのつきやどーか、
唐津南部　かねつけどーこー、かねつけどーこぞー
西彼杵郡　かねすけぞーこ　、
南高來郡　こーぞー、かれくさ、くーか、
肥　後　こーすー〳〵、かれくさ、くーきやー、
朝鳴くを「日こーすー」夕鳴くを「雨こーすー」といひて翌日の晴雨の兆さす
同　熊本　こーぞー〳〵、かれくそくわんきやあ、
薩摩市來　米つく、とつ、くお、はらきたほーほー
同　長嶋　よすけ〳〵、こめつけ、よすけ、
同阿久根　とくくわうくわうこのすけとくくわう、
渡島福山　もうほう〳〵、
登　別　のりつけほーほー、
臺灣生蕃界　五分間位にほー、



の始め邊邉　熱海にありて去月来り急性肺炎に罹りて
熱海に靜養しと聞き四十年来の交誼関心更に憂慮を懐く
す、偶て本県に於ける前田医学博士が往訪せんとす
るを機会に同行して、今日輯出発して其の病を訪
ふ、其日は熱が三十九度を上下し、殊に病人に苦痛な
るは尿閉の一事にして、例の神経質の病者を近頃に
至り、自尿の尿を排泄する能はず、カテーテルを以て
排尿を尿道に差込み多く尿を出す苦痛の甚だしき苦
痛あり、病人の苦み些も衰弱に向ふ傾き氣味も
あり、年齢は六十七といふ高齢なれば、或は癌
状はたまひあくまでも衰弱の度を加へ行くことを
案ぜしや、医師佐藤先生は深く心配して保

証が未雖しと云くり、此の病苦に就て其の面貌を
見ると顔色も赤きるるぎしと見くとると真の心面なる
べく、高の、衰弱は見くざるし、その語る言葉
「自分も二三の仕事が残つてゐるがそれ死でもよい唯
に死ぬ〜とコンナ義のきかない、困んで死ぬことは付
らの理想に無つと」とそれも此歓和の語が出た病
苦に就ては保の出ないのが実のウライ全く一種の
精神である、柔軟精神とでも云へべきと」と語り
「一度三浦伯爵も同じ苦痛を感じたとうまく
こと、言て回復したら病床の所感を書いて
見る積り他人の知らない苦痛とそれを敢
て死の義もない物語る実を吐き、こゝ前言と

十二行

予定があつた
翌朝真が初めて三十七度其至に降ひしたのみ前日と
真の分離が此まる此物に或は午後に真が昂進する
かも知れんが多分明日へ真が一時ひ下つて金と分離す
るであらう、餘り一時に急劇に下ると危険がある
から、明日に成り分離すると云ふ心部でよいと云ふ
此、此日午前病室に入り熱のひつたことを祝した
ら、ハ明るうも度当が見へて、あ眼を閉ちるう、
梦を見た話をしたそれハ
外から頼まれた序文が書きうく〜成投
かを文故のしと毒にやつと出来たとお
ハよろしいと満足に思へたが、うんハ梦もあ

つゝと
頗る苦しき気に語られので、通り出生席室を出れ、明るほ
ら始終棒ふての状態で時々譫語を吐けく換
かるれと家族ハ云ふれ、宅角金を山田(清)を為
へ入れて談話を交へなきや笑を折々生れる疲労
を氣きりて遠慮しらが、左事も金子(馬流)五十
嵐(力)の事ハ、兄為に来りがれどいこれまりも此日ハ前日
談を遠慮さでらず、席人ハ志きりに劉を棒ミて兄の
こまく如し、家族に言ひ聞言葉の内る、いつもく同じ
顔えうけ見せて八、国る、さえひハ芝居に、あらぬ、入
入る人り立かけり奥つれ顔を見せよ」と言ふれ、宅角
劉が離れぬ、



示す金物ハ面倒なる人也協会者も面倒なり、隊後の事
も想像されて、席客が審て戯れと言ひしことを、
を同人ハ ま と笑うもて一笑を為す、其の言葉ハ
ひんすかず、古今東干菓子、諸鑵詰、二
番煎じ茶、ヤクザ翻訳
帰内の家族并田の一日滞在をもとめてやまず、余よ
りも志きりに請ふ、後に七日帰京を見合金子滞
在と決し、八金子五十銭も皆止まる、余前午後執筆
八日朝執筆前中より下り為めの為汗あり、前
田ハ之れを見て金を分離確実とせす、為汗ハ其の
徴候なりと吉ぶ、此日金子五十銭を席募
近く代めて、疲労の為め話を交へずして止む、三浦

観樹山中にして一句を案のセるに、今ハ見す可きを
或ハ考ヘて興奮をんと細人に注意す其詩に云く
日高杉憐恐有縁、向山時復笑多歳
無事春光扇我花神、結(てこ)何の因幸

道遥天

其詩一絶これを

道遥翁に

## 観樹和尚

道遥観樹と交りて、熱海にある主流醫日々面会の間に往復するこれを五ヒに其の病状を知る度毎に相一致する所以也

其の分離の日ハ病人も静養を要すると醫師の注意を以て余も之を病人と別れがたくを忍び別を告げず一両

十二行

とせ、熱海を去る、

いつも熱海に別りおもふに感する此度も無味を無ふする其人病に臨し而も重態なるの故を一向無為なるを、唯に旅行の為に、流れに任せ、同行の前田酒屋あり、此度の公務を酒あり、前田酒屋あり

一夜露木様上と私と道遥の往歴を語り聊か無味を覚えたり、生涯の道遥を深しとあの人ハ文壇の大音家なりと云ふ、此話を聞き、道遥ハ敢て ヲリジナリテしの人とハ思ハず、唯比他人と先ちに道遥を解くの功ハ筆の所為なり此意味に於て殺ハ確

うん開拓者を指導者則ち教育家とふ
と得べし
酒次五十嵐ら亡友香取秀真の行状を
述ぶる余等の知る不を語る五十嵐翁はあの
人の子家と養子となつて築きたしい其
の後人自分生んだ子なる故に子孫
子孫自生に語る様なもんに陸奥の
子を聞へんと欲しつゝあるし彼是のなり
ものを及べうと北海全く初耳也
道過ぎて康謝小松祐芳を誠しなら
しく山田高氏の語るを掲んは余等の地面と入
ものを前山田を高芳と招き高田中市岩小

十二行

既往歳中どの不どの芳商を誠しなる経歴
あるや者商と愛しん問会えはやよと云いんとうと
いふ、何の為に彼ることを言い出したか、或は病
床所感を後日書くの養者まちんなるを入れて
あるしか、或は友人の病歴を少きみなら魁も
る料る他ちんとしなるか、愛に附記し置く
明京後早大まし見るあるとして木村徳衛博士を
拝面せ生まる清水仮十三日京地を離れかた
きゝ情あるといふまつき十一の出版部を見る
こ前田を訪ぬし、その間の中徒をなさしむる
ことを余をして解放す

三月九日夜記

○松浦氏の中小一畳敷の部屋を作りたるまま後氏、その寸法を尋ねたるに一畳敷の庫を心ゝとしへしことあり、震災後多くの図書を大阪に移せり、けだし市立寸法本の如き物にて入れたき為め床脇に接続し、床脇は一畳敷にて入れば無き之れを以て考案の庫に擬す、左の写真は他の寸法を参考の為第一枚を者積八畳敷にて凡そ略々上図に達す、形数大小百十部、尚ほ二三の箱大なる作載陳列の体裁なるしかるべき者なるあり、完全の一畳敷の庫は寸法全部を収め得ること を験し得べし

三月十二日

第六小屋敷寸法

○熱海なる山の湯治客は（遊）其後の容体を細
報し来る、其内に云く
体温は殆んど平常に復し、眼瞼腫脹
の跡も薄くなり、電話時も聞く能はず、眼
目中間断なく幻影を見る、其も幻影
中の人物が芝居をするも、格別活動せず
でもなく、二三分おきに、かうりと軽機し活人畫
かのページェント程の物のものなるか、軽機目
まぐるしく、うるさくて、又浮世絵
風の場面なるべきに、たちまちて七分方（遊）の西
洋風、三分は土俵絵風か、ずつと下つて芸者
年風なる歌川風なるべし、如何なる

十二行

不思議なりと　彦人の互談也
今は京都の時なれども却つて喜波吹嘆感
傷的に流れ、一日数十回、涙せらる、北海
の人客の為るは尤も不可なりと云流の注
意なるに、いろくの様方面なるに、此の
け中桐氏は彦人に対し得意の家族後
も始めんとしなりを「ヤツト」（遊）り
廿五の鐵（遊）開（遊）式に使ふ「北海の栄」の
踊の振を教へ、明日の午後と今日の
前とに行はる、ことに成り、彦人（くれる）に口授され、彦人を
又喜こに行つてみる土行さんに伝へて、今日の午後
の踊の師を呼び寄せて三味線

をひき士行さんが振付指導中に候、の論語
子等ハ参らずてんでに重應寺の比丘尼
京方面すハ按摩ニ入る南と御渡しく
午後すハ流石ニ疲労さんしたから、枕お干
渉さんす、士行さんに任され候　十一日 若
疲労甚しき折柄振付指導すハ甚だ意なるも
の昨夜書畫骨董商の団体に頼まれ新興の美
術俱楽部と別ち二時間に亘る談をやれば、自分も
いろいろの演説や講演をやつた経歴があるが、書畫
骨董商を相手に講演をやるのはこんどの如きが
心ひきつけられ興味を感じた。觀衆の神経の張ありさハ
多数の前に演説をすることハ見合わしておけ、殊に私

すりはてもなき所く出かけるのも一応あり、外の事なる
断へるのだから、自分の趣味に関係あることもあるのら、
進んで出かけたが、どうもザックバランに口から出任せを
いふ方が却つて雑然たる聴衆に興味を与へると思
つたから、能と能面と一杯を傾け多少酒気を帯
び場に臨んだが、此の新築まもなく演壇も仮んで
あり、為人位を容れ得る堂々たる七八十名の聴衆が
おれば、見渡した所、骨董屋に使われてゐる、年若の
番頭や二十才まで満たぬ者が多少交つてゐたが、これを
見てもコンナ聴衆に纏まつた面倒な話をしても解
らぬ者だと、前田と識節膺が宋元以前の古畫を
讃して飾る受けがよくなるのだといふ道理だとう

十二行

ものなれば、むかし講演をやうやうある間に感じたることハ
ちゝ年と共に謹聽したる一人ゆゑ中世まるゝ毎
つたことゝなる、著書のちゝ年や高家の番頭をゆ
あるゝバ三十分間の話ひちゝなき飽くまでひあらうに流
石に書書骨董の物と育つてみる文化、相南の現
解かあると見へて、自分の講演の下半ハ時々笑
聲を洩らくに、自分の講演の大意ハ書書骨董
の学業者が物を談話と知るの見安をいろくの例
を挙げて説いたのもあるかゝ俗ら飽きるを及ぶに先つ
開口一番自分ハ書書骨董ハ素人ひある、美を
こゝへ引張り出したのハ平山堂の主人ひある、平山堂ハ
書画骨董ゝ日利ひ故ハ北人遊の餌食ハ



談つたいうと駄洒落を放ち、本論に入る寺
があるゝ段味の淵源ひあること、寺から生んだ茶
が趣味界を支配したこと、天下の名茶ハ多く寺
から出ておる理由、名人の事蹟や其の頃の時代や美
に関係ある事柄を談話と知ることが愉快板味を
おこして書書ゝ骨董ゝ一般の考りと味
を深くすることゝいろくの例を挙げて説き出す
ハ時々文球の来歴を詳述して、北の文球の持主
神屋宗湛と豊太閤との関係を細説し書
書ゝ就ても文晁が書したる茶山時為日本橋の中央
と能面する情を就ても時の事情を詳説
き、来歴が充分解るとゝ抱えん自身板おおも

しるくるくもおのつから執筆を省することを論じ
美人が未だ形式に拘泥するの愚を示すには梦窓
国師の西芳寺の庭園を例として答へ、最後
に廣拙論に移り、多くの名蹟の模倣したものであることや、天下推一の名蹟の模倣
されるかを、廣作が現存することや、廣拙の代りに何人コピーを
ふべきものかを、廣拙の珍重せらるゝ西洋の例を挙げ、廣作の巧妙
なる人の例を挙げ、廣作家列傳を作り答へ
とすべしとのことなりき

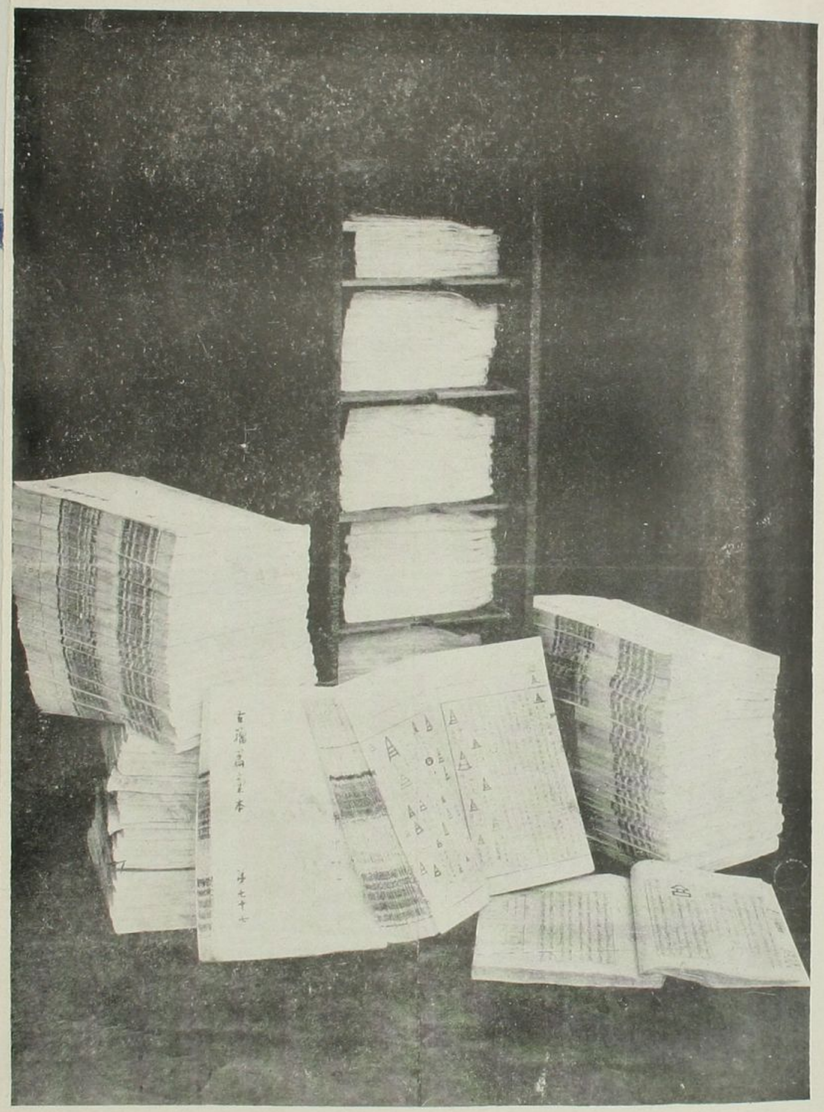
三月十三日

○高田忠周が三十四年間の努力で著はした古籀
篇は支那にも無しとも言ふべきものである、桃花以来



の説文家が研究したものを集大成したもので枚数
一万数千頁、巻数五十二六十五冊全十二帙、
北内学士家凡そ八巻で、許慎の手の及ばぬ
ところ三代に溯り、往来の字を収めるに字が七万
ある、説文は一巻二千字と云ふ、一字の変体
三百字あるものもあるから、先きに大正八年帝国
学士院賞を與へたが、今度出版者の寄
附金を以ても五万部印刷し、世界の図書館に分
置し、万部は有志に頒つことを新聞紙上に
る用也、

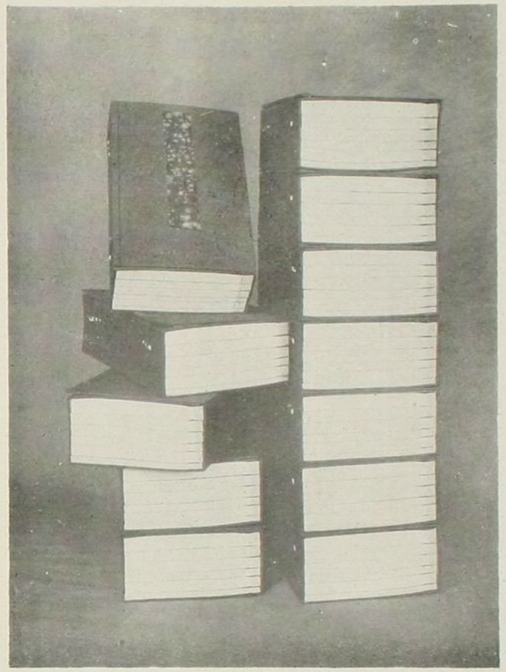
○高橋義彦氏の歴史地理一冊を著
はす、これも故支那東洋の旅行者の内容を紹介
閑



古籀稿原稿本

することを職とする新聞と称せる出版物なるものを
格の書物に擬んで此書を印刷して以
を失し、数年上梓のこの火難にかゝるといふさ
きに富山房をして此印刷せしめ玄田の歴史的
現を研究し一昨年の震災に焚け、自今八年配本
のものもさうし程なく、玄田の遺著は火と縁因ある
数二回まで焼け、尼に遇ふとはこの也 十四日記
日補遺日年来論ずる所、昨年、吳昌碩
の門人、ちゝうの人、を知る、彼人の悪癖を
垂片を好むを、その一二月、えんこ拓ふ價八百元と
上さといふ、吳の門人に吳の廣氏を為すものあり、氏
吳の家と為し、日年吳に何の廣氏を制せるやと

十二行



古籀篇縮圖

學古發凡縮圖

減ぬ吳曰く、真贋は後者の眼に立て解し得べし
判すると雖ども、余京都の西芳寺の茶室のこと
を聞き出で、其の席の主客數例を示す日年の説を
徵す、彼曰く當て集寺に利休和尚の席と和
尚の席と心得たる、和尚は上席と坐する外
法と見て、西芳寺の夢窓が文字なりと四席
坐するを上坐とし、なるべし一説なり、又
茶祖を見ることなる後移り、彼曰く自分も時々ヒ
子り試む、頃日其道の人自分の入門
中と宗悦の茶祖と云ひ成祖と自分を感じ
め、其人云く宗悦の茶祖を人皆ヒ子ウタ、この

とうもろこしを皮切りの見うを自分から見んハ一種の彫刻のごとく見る、恐らく数日手を離さず心こゝ[illegible]るのアチラコチラを彫つたるなれば、すると、なるほどこのヒントに接する自充悦のうちを、又自家の版も表こゝにハしめんを彫ることを為すと称する日年大津絵を面するを長ず、七頃もいろ〳〵のうちを描くを筆枝に苦辛し、ようとうを余んこ思く今の世人の風俗や洋服姿をも筆材とすればドウカ、日年思く、苦しみを老れハ岡本一平描く所と相似の異なるうんと、余ゝ〳〵へて思くらく、大津絵の一流の面をうち漫画に似て漫画のあるべき、一時的戯画と同日に論ずべからさるの事、数ゝ、日年に前数書書骨董高に拠うん一冊の談話を試みたる話をしたが、日年ハ大阪の人びあるから、関西のことをよく知つてゐる、思く関西ハ東京に先だち同じことをやつてゐる、但し東京ハ現実主義で講談の話いまゝ言ふこと書書の著ハ者のことをがいつも選ばれる、例へハ山陽俳優ゝ多く活歌とうゝてゐるといふ、

○又坊間に同書を過る倉心のうちを更らに更らに僅うハ一二を得ゝ

三月十四日記

三月十五日記

## 一印籍考

一冊

享和の年大阪ひ出版したるまで印譜の題集こハ欠き難いものである、僅うん二十

二枚の書にあるから宮本は徒に出ふが版本
にあるゝ、今甚だ高價なる著者の書
川（之唯）で大強豪刻家である、宮其葉
門人である、印書の調べは不充分である、玉
石混淆なるけれども、寿和須部譜の補
とも云ふ歌譜とこれいと云ふべきである、巻尾
日本の刻者を挙げて云く其葉は即ち聖
なるもの、僧信心菊子琴、崖麥夫即ち
関なるもの、池大雅は即ち鬼神なるもの
いふなる。

一本朝神階編　十一冊

尾州藤浪時縄の編輯に係り享保版也



北者神諸神の階級を類纂し、委曲
考証を施したるが故に平家祈祷と甚
だ神益ある書也、殊に民衆の崇拝する俗
的諸神を下に寧ろ考証を下し居る所と
尤も價値あるを見る、神社の神社考
神社啓蒙のごときものの寧ろ劣とする
きなり

一奥海日記　一冊

四次廿二年細川潤治郎松崎平多等を派
の記なり、珍書なりとせんか、北人始め
て著述を敢てし又第人と著述をなすと
し皆りと見へて、何程のものなる社説の多

ても、文章は多く漢文ならでは出来ぬる
ものゝ、自分の好んで北人の著作を購ふ、こゝ日本
其例に依る歟、北化行も別る愛の風景を
細叙するの外、史實と和歌の考証あり、著
者漢文家の紀行とはおのづから趣を異な
す

一　本朝播磨略

往年購ひし所の北書は立冊の内一冊四の
巻が闕けをれば、何れにか欠本があるは補
充せんと書肆に頼もれ置いたがヤット
二ノ巻を得て完本となりぬ、四冊の欠本
は十四年も購ひしが、補充の一巻は十二年も

十二行

拝つた、

○城後流産が生れ公家の子長井雲坪が畫稿と
なりしなるべし不過と終つた事跡の大概知るべし
北京高田氏の所蔵の原本北人の手跡を連
載しをれる中に自分の紀行らしいものもあるか
ら、こゝに掲げておく、

○雷災前に大略脱稿し災後追補する時を待つに隨筆
教山陽はヤウト完成し、再りあくまで、二部手元
に達し、拾ふも晩和の折からなれば、あつたとうに、拝を
けて自祝した、雷頁位と思ふあつたものが六頁位
迄に二四位の定價と考へると、二四八十

# 不遇の畫家
## 玉蘭堂雲坪（三）

耳一蹄庵

その年（嘉永元年）の秋も深みゆく九月の末、長崎泰德寺十四世の住持鐵翁禪師の雲謙庵を訪れた見すぼらしい一人の青年があつた。

禪師はこの青年から奇特の志を聽取すると共に直に耳請ひな容れて門人とされた、いふまでもないそれは雲坪の元治であつた。

禪師の訓陶は彼の天稟をいやが上に助長せしめて、四年の後には斯ういふ逸話をさへ生じた。

禪師ある時、町の千足屋といふ家へゆかれた、床の間に一幅の畫が掛けてあつた、禪師はツカツカと其前に立つてアゝ、俺は名を人れることを忘れたと、側の硯筥を引きよせて、筆をとるより早く鐵翁と記入し、漢狀は後でといはれた、主人は驚いて、

禪師それを樵山さん（其頃雲坪の畫名）が描いてくれたのですよ

といふと

ウン樵山なら俺の名をいれても差支ない。

それほど彼の畫は師の鐵翁に重んじられたものであつた。（京都秋蓮氏稿）

文久二年に師翁から、これからは八幡町の先生の所へ往けといはれた、八幡町の先生とは頃崎秋蓮が遥んだ二人の畫人の一人、木下逸雲のことであつた。彼は師の命に唯唯として逸雲の門に入り更に研鑽して終に木下逸雲の後嗣と迄つた逸雲位と謂ふけれど其頃の逸雲の榮位は中々に顧ちえられるものでなかつた、畫技の勝れた詩ばりではゆかぬ、詩文書畫樹樹待つてゆかねばならないのに品行といふことが更に其第一であつた。

長崎は常に支那への往來する處、それに鑑して詩文書畫の才子がかなくてはならなかつた、イヤ書も相應でないと人が許さなかつた彼は詩文は逸雲翁に、書は初め師翁を習ひ後に曩之を臨模し一種風格の文字を書くやうになつてゐた。彼の支那漫遊中、日本書、畫、東洋と稱して出たのも所以なきにあらずであつた。

元治元年の元旦、逸雲は彼に錦雲鶴、雲坪の三つの號を認めて遣ばしめた。雲坪の名はそれからである。

無軸中の淵、玉克三は直に雲坪の二大文字を揮毫して彼に贈つた、同時に師の逸雲も朱字で雲坪と刻した印形と白文の方印を、「文書畫印」とあるものゝ外に長方形の「品藻山水」の朱文に刻したものと併せて三個を彼に與へた彼は死ぬまでこの三個の石印を秘藏してゐた。

慶應元年八月、師の逸雲は東都諸友の招きに應じて旅行することになつた、無論彼は同行する筈であつたので直に病櫛つて終に其畫を果さなかつた。

しかしこれは彼に取つては或は幸ひであつたかも知れぬ。逸雲は慶應二年の江戸から歸る時、搭乘した亞米利加の帆船黑龍號が長崎へ着く可き日に終に着かなかつた、それは永久に。

雲坪は其報を聞いて慶師と生死を共にすることの出來なかつたことを千載の恨みとして我若し病むも醫藥は用ゐないと心決した。長崎で破した時も藥は皆床の下にあつたといふことである。

逸雲を喪つた長崎は彼の眼には一向詰まらない處となつて了つた。

彼は死ぬまでこの三個の石印を秘藏してゐた。

# 不遇の畫家
## 玉蘭堂雲坪（四）

耳一蹄庵

恰度その頃オランダから來てゐた官教師のフルベッキは逸雲・雲坪と親交があつた、彼の希望もよく知つてゐた。それが今度上海へ轉任することになつたので彼に親く同行を勸めた。彼は歡喜してその好意をうけ、同行する所になつたそして趣味の淵川、美濃の老山の兩人も同じく手を携へてゆく事になつたとまさにそれは歡喜三丁目の春も逝かんとする四月の初めであつた。

支那へ行つた彼は徐雨亭・王酒之・蘇穆等の名士と交遊してゐた、朱文光と同門の徐雨亭とは殊に親密であつた。其頃から彼は明代吳派の畫家張瑞圖の筆法に私淑して專らそれの研究に沒頭してゐた。

支那漫游は彼に取つては非常に利益であつたが、困つた事には食物の變化の爲めに常に四大源和の日が多かつた。それで禍二度の病臥で、老山や淵川に先だつて歸ることを餘儀なくした。

彼の外遊中に日本の國情は一變してゐた、世は明治と稱まり江戸は東京となつて天皇の在します所となつてゐた。明治三年の秋まで彼は根機に畫を描いて東京へ出づべく旅費を拵へてゐた、そして其年の冬彼は長崎を去つた。名古屋に多少の知己があつたので暫く滯在して畫筆にいそしんでゐた。

名古屋から發足して遠州掛川へ來た時に風邪がこぢれて傷寒となつた。宿屋の主人は義侠な人であつた、よく病人の彼に親切してくれたそれより一層彼は能くしてくれたものに女中のお何さんがあつた。一月以上も駐込んで了つまの小消ひの錢までお何が出してくれてゐた。幸ひ全快した彼はお何との間は最う仙人でなかつた。

更に一月滯在して東海道に宿の支度を了して東へ立つ時にはお何の旅費が彼の後に立つてゐた。

東京へ着いて麴町に小さな家を借りて初めて人生生活の第一歩に這入つた。彼は大飛躍を試むべく、しかし彼は彼に不利であつた、一代の巨匠雅邦、芳崖すら衣食に窮してゐた時だ、いはゞ名もない田舍出の彼にはそれは決して無理かならぬことであつた。

胡公誠の樓閣と法螺で、後から來た安田老山が賣出したのを見て、彼は世間の人の目の低いのに驚いた。

『お何田舍へ往かう』

明治六年の末にはサツサと家を疊んで夫婦の足は北へ北へと向つてゐた。故郷を出てから二十七年既に現はし出して來た、彼は天香少年の請ひに應じて石澤の宮澤家の客となつたことも一再でなかつた明治十七年の秋を曳いた時は、そこから沼垂へ住つてくるといふ山掛たれもあつたといふ。

宮澤家に來て約一月遊びに來て約一月以上も滯留し、武翁と意氣相投と畫筆に親んでゐた。

沼垂の町へ着いたのは明治七年の春もまだ淺い雪のある頃であつた。

宿舍の旅裝を解くが早いか、彼は叔父治郎八の家を訪ねた。

年の頃三十位の男が店にゐた。それは治郎八の孫であつた。十四五年前すでに治郎八はこの世の人でなかつた。

アナタが豆腐屋の元さんでしたか祖父はアナタの事を氣にして私が嫌い頃アナタの葬式を營んでお寺の過去帳にはちやんと法名が載つてゐますト笑つた。治郎八の孫の厚藏で暫くは此處に滯留を勧つてはゐたが永住すべき地でないと見た彼は、お何を促してまた飄浪の旅へと出た。

長岡、柏崎、高田を過ぎて信濃は中野の町の傳田といふ神官の家の客となつた。

## 不遇の畫家
## 玉蘭堂雲坪（三）

耳無庵

その年、嘉永元年の秋も淋みゆく頃、師匠それを桂山さん（其頃雲坪の號名）が描いてくれたのですよ

といふと

ウン桂山なら俺の名をいれて

長崎は常に支那人の來住する處、それに對して諸國繽紛の文才詩才が輩出しないと人が許さなかつた。イヤ書も相應でないと人が許さなかつた

彼は詩文は勿論繪畫に、中國は初

歳してゐた。

師の遺靈は東都諸藩元年八月、師の遺靈は東都諸藩

友の招きに應じて旅行することになつた、無論彼は同行する筈であつたので重い病

## 不遇の畫家
## 玉蘭堂雲坪（五）

無耳庵

傳出神官は繪が好きなので彼を遇する事が厚かつた。彼は喜んで此處に腰を据えて繪筆に戯しんでゐた、その年の夏の半ころからお傳は妙にヒステリックになつて常に彼を困らしてゐたが、秋にはもう眞實の病人になつて到頭二十八歳を一期とし、失の膝に抱かれながら寂しく息を引取つて了つた。

彼は現の中に、神の人の好意で形ばかりの葬式を營み遺體は中野の瑞雲寺と云ふ寺の墓地に埋めてもらつた。

彼は非常に悲嘆して何ともいへぬ

隙えに彼日を過ごした。傳出神官は彼が病弱になるのを見れて、或日彼に勸むるに

先生、さう心配ばかりしてゐて嘗ましませんよ、それ程病弱といふ所に中村といふ資産家で書畫の鑑賞に明るいばかりでない自分も相當に識して丹青の道にも堪能の人がありまして、先生の繪帳を見て是非遊を俟つてゐると私まで申越しましたが如何です氣晴らしにもなるでせう、あそこは一茶といふ俳人の出た所なり、タヒ近くには鶴尻の湖が秋色を呈べて遊ぶには佳い處ですヨ一つ川掛けては……

と、大いに說く處があつた。

彼はまたなく喜んでその翌日の夕方には早く傳出の人となつてゐた。

そこで約一昨ほども遊んで繪を描いてゐたが、或時飯山の人から來遊を促して來たので早速また遊尾山下の客となつた。

飯山では稱名寺といふ眞宗東派の坊さんが懇切にしてくれた。ある時、坊さんは彼に對つて

あんたもまだ一人の暮されないが一ついゝのをお世話しませうか

と云つた。

サー良いのがあつたらお願ひ申します

と、冗談半分にいふたのが事實となつて、世話好きの坊さんは自分の檀徒の山崎鈴松といふ者の娘で琴子といふ二十五六の器量よしを彼に世話することになつた。

琴子は纖纖ばかりではない貞淑な凡長な、ちよとお伽とは比較にならぬ美な女であつた。

飯山は嚴藏の太家繁室を出し花鳥の風雅繁窓を出した處である。それで飯山の人達は彼をこの地の人たらしめんと企てたのであつた。

が、しかしそれは徒勞であつた。彼はいくばくもなく琴子を伴れて靈然として善光寺へと出て來て了つた。

## 不遇の畫家
## 玉蘭堂雲坪（六）

無耳庵

飯山の人達が止むる袖を振ちぎつて長野へ出た彼は、東の門の實屋といふお寺の門前に、さゝやかな家を借りて住むことになつた、それからは松本大町京都から琴彈の高山あたりまで足を伸して得意に筆の人となつてゐた。

その翌年の春に草に秋の露をきく十月の半に、戸隱寶光社の神官山本某といふ博志者の招致に應じて、彼は幽邃優の人となつてゐた。

この閑雅な靜寂な神境は彼の意に滿足を與へ落着いた氣分に浸つて彩筆を揮つてゐた、彼は容易に山を降らふとは爲なかつた、長野に殘つてゐた琴子は止むなく大きなお腹をして、これもやがては戸隱しに妻を現はすやうになつた。彼は戸隱では瑞岩、または藏王館、戸隱蕎山人と號してゐた。

彼はこゝであらゆる山水の形態靈瑞の變化を研究し淵山四季の變遷を研究することが出來自在にその妙技は更に一段の神境を添へて、自己天下一品戸隱の名手となつてゐた。はじめは謝濤風の細いものを畫くやうになつてゐた彼は戸隱の太い線を描いてゐたが以來その筆を更めて、やかな更の彼は父動物を畫くのを得手だと自ら稱して二三の外には描くことを辭してゐた。

それが此處にゐる間に軒端まで常に來る猿を朝夕に目慣れた彼は知らず識らずの中にこれを寫し出すやうになつて、それがまた類る神に入つて、白然の所扱は彼に妙技を與へたのであつた。

その頃、戸隱の中社の方に宮澤長宛といふ同神官があつた。彼はこゝへも屢來て厄介になることが多かつた。

宮澤氏の愛婿瑞雲氏は東北東山寺の神官長で常盤氏の舍弟であつた。

瑞雲氏から、常盤氏の愛兄弟である久々野の醫師手塚武翁の處へ明治二十年の五月頃遊びに來て約一ケ月以上も滯留し、武翁と意氣相投して日々酒杯を重ねに親んでゐた。

それよりさき侯爵世に聞あり氏の夫人の實家なる砥澤の宮崎家の主人そ來り合せ、話次ゆくりなく瑞雲繁太郎少年が畫を好んで、四の春寫した金紙の猛虎の如きは師事したことのない少年の筆とは思はれぬほどのものであるといふことから、同じく來はしてゐて瑞雲氏は、それほどの執心なら靈坪先生に世話してやらうといつたそのことを聞いた繁太郎少年は矢も楯もたまらず、十五の年の秋、父母の許しを得て、唯一人戸隱へ上つて、宮澤氏の處で親しく雲坪に面會し終に師弟の關係を結ぶことになつた。

彼は宮崎少年に天香といふ號を與へて四君子からはじめて畫藝の法を教た、少年は好きこそ上手の藝への如く傳る可らざる能致を戸隱に現はし出して來た、彼は天香少年の請ひに應じて石澤の宮崎家の客となつたことも一再でなかつた。

明治十七年頃、節を曳いた時は、そこから戸隱へ沼垂へ住つてゐるといふて出掛た事もあつたといふ。

宮崎家に存してゐる多くの彼の遺品は其來遊に描いたものであつて、中にも淺紅山水の一幅の如きは尤も彼の得意の作であるといふ

## 不遇の畫家 玉蘭

その年、嘉永

## 不遇の畫家 玉蘭

## 不遇の畫家 玉蘭堂雲坪 (七)

無耳庵

明治十八年東都の友人から頼りに出京を促してくるので久しぶりで三月十三日の夜長野を立ち、十五日の午後に上野へ着いた、山下の宿屋に旅装を脱るより早く、川越雨谷を訪問した、雨谷は非常に喜んで手を執るやうにして座敷へ招じて一別以来の話に春の夜を短く話し込んで了つた。

川越雨谷は大阪の郷事をして廻はる前に、彼を陥らしめて眞實の病人にしてしまつた人である。時は鐵翁逸雲の門に籍を執つた人であるを一期として、雲坪の感じはじめて雲坪の感を見たときあまりに其筆致が雨谷のそれと似てゐるのでこれは雨谷といふ人でないかと思いたほど酷似してゐる。

翌日は浅部大華、潮和亭を訪ふた酒杯を遣り酬りしてゐる處へ長三洲が誘ねて來て呼ばれます〳〵賑やかになつた。

彼の雲坪を見て、「こんな甘い人のある處では恥かしくて畫かれない」といふたさうである。

明治廿五年の春、武州川越出の詩骨古香上人を訪ねんとして路で疾病に襲つて歸つたがそれが病疾の買癖の重つたので再び起つことのできないことを彼は既に悟つてゐた。琴子に僅の餞式は日蓮宗でやつてくれ賜へかしてよい、決して人になど知らせてはならぬ。と遺言した後で、雲坪は淋しく死なないとつぶやくやうに獨言してゐた。

明治三十二年六月二十九日、彼は六十八歳を一期として長野の草茅に窮死してしまつたそして遺言通りに要科の日蓮宗原立寺に之れを葬つたが香華を手向ける人も更に無かつたといふ。

彼の最後の俺は死なないの一語は嘘語では無かつた。二十年の後の今日では彼の繪が動いて來た生命のある繪は翔て破壁に於てその光を見出し得る。

彼の生涯をつけ加へることは、貴方は定來ないと思ふけれども、定来ることハドウひもものよいの、先年集めた材料を教えるまでは見たいといふ(ある)ぎぬのひあるまでハ敬ふるまでが楽みで、先年と違ふ(本)へ敬と違ふ迄出来ても見る義おとらん、唯京ものを翻しても見る目が、校正と同じ(が無い校の)び失体なのでは、唯此の方の本場所者の撰人に準の序が有けもあることを見えしに、此序は敢て若き軽重するものがいるのが、撰者の撰述侯歟を来さんことを望んでもまた寄せ来ることを望みます。

八掛入セしめることゝなり、北巷主）と親しの拙稿此度
集このゝ人を煩はし、為めに謝礼かたく
等の人々に贈本を要す、殆ど此の若干の為めに
年に百部の印刷をなす、知人多く知らんまぐ出版
うとい折りこ願んを問ふ、あるもあるといふ等
も贈本を要するもの約四十部程を要す）する
ことゝし、取りあへず二十部を既に上部したこん
迄に来たる人この遣のし方ことあるが、今回の破格
でのもの、既元の出版部の計算に掛れば二千
部全体を賣拂ひ得んば収支トンとイあるとこの
別度迄出仕る所ひあるが、出版部と換算をす
けれど、文章責任のそなめがたなるの

三月十八日記

十二行

の時分の素寒さ、書籍を携へる者は、書籍と共に
載し書籍と共持主が宿を去り入れ、掲載せんと
みる、自分もお鉢が回りて、あるる前記者が訪ひて
来れば、恰度四五の客が出る真つ最中にあり、
ひて、断りのいとまもよいと雇て待ふから、上げて来
意を問ふもそもそも、先生の至本を有名にい保さん
お説を伺ひきたいと云ふ。恰度夫婦共が撮影
しに折、小本彩を床脇に置き数十積かさ物なのが美
俗るようてみれば、るんを指し示して、四五の標本
とするべきものを出し示して記者も興味を感じ
たくしく、十分く説明を与へ、ツイ一時間計り珍
本に関する説明を業況を記させ、さんざんに免役

と思つてみるとそれハ当真理を流出し、す玲瓏の
推積の光景を写すことを立つべ
しと強くなんもよの可感とひますを清しとして愚
四一時の月戦が切て世ハ切れ、えの紙に
紙仗さるとハ寧ろ自分の不本意とする所
なり

三月十八日記

○新潟なる立友吸山五峰の色数傳と羅ろ伝れ方
面焼家の小ハ彼懐ろ中の報ろ、北書を知人
高山中一の紙筆に係るとまた繁雑なるも
北の尖を羅る場ものしく、色の巻用をと保険つけも
りと云へハ四後の困難ハあるまじ。四皇の恩幸
出しなる家ろ多ろ。彩色ハ家ろ多ろ

十二行

の書として見れ、なまこと云ふか、不幸ようと北の
範囲ハ五峰の遺印あるといふ、但し全印ハ
あるまじ、印匿の抽子刻個ハ匿撮の落拔けし何
れくの数しなるか、それハ大切なる遺族として
惜まるべきまじ、それに相当ある遺印の伝ふき絶
ず、それ日蓮に相当五峰遺印の面義平を紀念
とて遺跡の刻字を写けるとまた、義しなら
ずハ恐らく散乱の不幸に会もん余のこうけ
なる三四顆の印ハ稚れ五峰花印中の白眉なる
日蓮英英稚れ五峰一顆、巻
菱湖刻風海鳥の印、花津、心美人書出尾
印、花六刻印四顆、田山大王刻印一顆、林子刻

木印一顆、端数顆余を五峰と刻受し、再び四国に帰し、なほ多くの花者共人を異にするものがあるは北花を免かる、我の幸と云ふべき乎

三月十八日記

○道造の看護のため、拙海に赴いてゐたが、昨夜帰へり来り、看護の状を詳細に報ずる、好転の傾向あり、看護人は四後といふよりは、疲労はすでに甚しく五月五日の看護人のうち一人と雨宮ちよと交替せんとす、我海の城島開店（廿五日）の近づいたのに、自分の「我海の栄」を頼もるのうち、皆と気が気でないうちにことの事実が丁度士行が見えると日出のかに仕合せ士行は四月日義者の場りを仕込んに、まんを出るが目前に見えるとあり

十二行

去る十四日義者三人を会し、医師に附添て、三味線を引うもて試演をやつて、その間二十分計りの出演へこんだとて、義者は表しにくいことであるが、十分の満足を表しく、十分〜踊を美国する氣力もないのに、幸と成功のしにくからよるつたら、例の病癖が起つて病状が後戻りをしたとうも知れぬ、尚明後日後病をかめて仰臥の使手拭地に浮めぬ〜書をかいたとう、こんな唄の内にある一句を書いたのにそうしたが、まんを成功して病人のおき畢つて海外と云つたとう、流石芸術家らしい事がある、

三月十九日記

○五峯の遺稿を修するに当り、湯浅の行願如を省
又し、余と相とをもとめ来る、五峯存命の時、文字録
しなる家に有ること、記臆するも、按ずるに、
得る能わず、偶ま内藤[illegible]氏の支那紀行訪浙
紀程の間に、四首を収めあるを録し、能来神面に
遣る、右按ずるに五峯の遺稿二首を得、これ
集中にもあるや否や、亦教供ちんことをおもう、
と録しつる

三月二十日録

百里楊渡、草湖田、胸中山水行来在
淋漓大笔延文章、携掃生涯十丈
[illegible]

十年宮商、右御山載筆と題する[illegible]

十二行

閲歴廿年、家門無限感
屈指顔

○大村青崖支那の図書本の刊行を分て図本叢
刻といふ、客歳五六種を出す、皆精刻なる
多く人の注意を惹かず、零畳後中絶しなるが、新
刊の出るを望うまるる、余書籍と程氏墨苑
を乞う、蓋し北の書刻中の一にして、恐らく既刊
中の白眉ならん、惟ひ昔年一冊出るるを、敢て渇
を医まるるを以て、次つて時ハすしもあ、北者
の如きハ雲後刻完きを得ん、ことを望まるるなり、家
花王氏墨苑あれども未北者あ[illegible]、○北者頗る

稀覯に属す、

羅軒叢古義誇　四本　嘉刻中の一書、羅軒名嘉年字
書する所の詩義の誇なり　羅軒名嘉年字
康熙銭塘の人　康熙年間進士に登けり、書枯
度七雅を　記あり、施す淡彩を以てす、赤四五
の書　白色の絵の具にて　打出しを以て
しるせり、複製なり　と　仕也、家蔵に一冊あり　似た
るものと　花す、多分　時代のものなり　白文支那
の　義　伝　意　書　なり　なんと　書　天　壇　書　なり
嘉刻中　余の愛するハ　唯北の一の文　伝る時
ひ入る、

○大系　四書　引　便　説　四冊ハ　冊　鶴　義　書の外　書と

十二行

て出版されたるものなり、冊数書ハ　自刻の故を以て
珠とせり　七　甚　以　稀覯　就中　北書ハ　要
用の　書　引　なり　今　極めて得難き　人の　北書の
刻　あるを　知るもの　稀也、堂前　嘉永二年
向井　間の序あり、　序　家の　編　多　ること
北序と　因て　知る、今日　得る　珍　録　いこと　也
（價三十四）

三月廿一日記

北日又　唐山志　十六冊
要す、他に　一書
武門故實　百ヶ条　三冊
北書表紙の　墨　筆と　武門故實　要
ことあり、　桂　秋　南の　著　そ　相馬

元禄の序あり、各条に北人の漢文の短評あり、弘化年間浜宮に附したるものなり、

武道和実の心野しく世に流布し、法燕なるものあり、北市設く所間刊して要を得たり、極めて稀覯の書となす

○武つ和実百ケ條の巻末に左の一ケ条あり、之を抄出す

三月廿一日

原間シトツ、行列殿中などわ使の通り難き時ひとうん連れ通る儀をまゐきシトツ、と云り

寄セ太使をするなり

図のごとく木なるわ

使なるもこしらく折釘なり腰へ狭むやうにして

持ひするなり、輿シトツと云て深井のやうに上なり

八ツ物をこしらく兼物の前に穴をあけ常に蓋をして下なるシト間をはめ上に鎖をおろしおく

なり、行列の時是なる人に使をさせ物論行列

いくつもあるときなれ油くるなり、先年大樹

日光御社参の時御シレト間を御乗物の内にも持くぬくやうに仕うみなるゆえ御乗

茶とて紀伊御乗物のゆくに御シトツい

用意なるなり紀伊御の有職氏田平

左衛門物語なり、伊賀本平家物語に古来降

参の時の詞に花以来数くまたはシレト間

さしに罷成んと申なる由如何なる人の身迫と

用を弁じさせる役者、シト間をうくる人、醤の役を、シト間を腦とさす者、奴隷也、主人、ト付け雑、誰を比方とも望んと勧むることろう、

○前の示唆の記者、強えて寸秘をの多を作ったとい前に記し於た軽の回答を出て来れ、いつものことであるが、新を記あり筆記といふ氏つてあるのが例で、いくらカンデ含める様な事あるいとしまを見ると支離滅裂で吐吐を偽す、ぶんう忌さえ感ぜらぬ人のあるも無理はない

三月廿三日記





# 可憐な豆本

## に圍まれて

寸本由來を說く

元の市島早大圖書館長

東京日日新聞　（第三種郵便物認可）

元の早稲田圖書館長市島謙吉氏は、數年前から豆本の蒐集を思ひ立ち、今では和漢洋を通じて一千三百部（三千餘冊）の寸本を集め得て、常に座右にそれらの小裝綴をねて、たのしんでゐる。牛込區東五軒町の書齋で氏は語る『なあにつまらない道樂でね。自分でも玩具いぢり位に思つてゐるが、持ち前の徹底癖が手つだつて、現在では兎に角日本に殘された寸本といふ寸本はことごとく集めて秘藏してゐる。たゞないのは元祿ごろに出た伊勢物語と『竹取物語』で、この二つは久しくたづねもとめてゐるけれど

### 未だ姿

を見せてくれない、私は職掌から公私ともに關なつた書籍の數は、それこそ何萬卷といふおびたゞしい數にのぼらう、さうして各種の書籍をあつかつてゐるうちに、ふと思ひ付いたのは、豆本のことで、普通の本に對して感じるおくでは本への愛著となつていつた次第だ、そこで本愛玩の先輩柳慶氏が、自作の豆本に序してゐる、大にして粗ならんより小にして

### 精なる

に如かず」といふ句から思ひ付き、私の書齋を「小精廬」と名付け、寸本集めをたのしんでゐるのだ、日本における寸本の元祖は寛文のころに出たもので、元祿には入つてから挿繪を入れたり、物語りの類を出版するやうになつた、その起こつた動機は携帶に便利だといふ點にあるらしく、辭書や詩集、謠本、讀字集などが一番多かおほい、その次ぎには人に見られて困るやうなもの、例へばお殿樣や幇人などが

### 紙入の

中に秘めて置くやうな種類の寸本。それから、繪が小さい爲に、中味も小さ一たければならないもの、即ち小さい佛像の厨などにをさめる胎内經の類である、それは米粒ぐらゐの文字で經を誌めたものもあり、最古の木版といはれる武天皇の百萬塔に入れた陀羅尼の卷物の如きは、一寸ばかりしかない、先年私が北京で手に入れて來た大觀帖六百卷の目錄ばかりを書いたものなどもめづらしい一つだ、もう一つは子供の

### 玩弄物

として作られたもの、雛殿などにかざるためにできた箱入れの源氏物語などもある、最後に物好きから作られる本或ひは大きいものに桶つくために、極はめて小さいものを作らう

といふ老への好事家がこしらへたもの、人のできないことをやつて見せようといふ自慢から生れたものなどがあり、これは出来栄が靈ゐ事を本意としてゐないだけにそれに屬する豆本は總てたくみに且つ念を入れて作られてある、その外に試驗のカンニングに用ひるためのものもある、これは銅版の次ぎに出でつた

**石印を** 使つたものがはじまりで、いまはやらないけれど、支那で役人の登用に行つた「科擧」用の豆本が、盛しくある、岸田吟香氏が作つたものも大分世間にあるけれど、趣味の點からいへばどうも感心できない、眞言宗の僧侶がやかましい面倒な儀式を行ふ際に、その順序を刷つた豆本を、手の平にかくしてゐて密つと眺いては式を進行させたといふ話もあるが、これは記憶ながら私の手許に持つてゐない、明治になつてから

**銅版を** 應用して作つた豆本は、眼鏡を添たものなどもあつて、回轉的趣味を喚る、私の集めてゐる豆本は四寸に三寸以下のもので、それよりも大きい俗にいふ赤本や浮世繪集の類は世間にざらにある、最も小さいのは一寸に七分のものでこの方は殆ど失はれたといつてもよく珍品中の珍品だ

○閑に乘じて筆を採る式

門故實ある人條、めずらしいろ〳〵あり、左に二三を拾す

一 **通トヾシ** 是は二間も三間も隔したるものとこの方らし毒藥を用ひき殺すことなり、毒藥の名

**法口侍** マツソタケ

竹根のやとらかるところ

**烏頭の生根** ちくも

十二行

右五品等分ケ合セ置きそれを紙にひろげ

何ものなるか人々はちくなり其所をもくせり

入て終に死す、矢鏃ヲめぬれば毒藥とする韃人の

ブスと云も此四品也烏頭しブスの名あんバ也云

一 **ホロを基に上る**

ホロを基と上ることは大將等人の討死すると云

ふ事を想出す、初めて業なり、ホロは七寸

のかけはづしとして紐のかけはづしにひかるるの

最下のひもを鎖の紐と云ふ是を解て鐙の鼻

へくゝりはるなり、鐙の鼻をホロに付とも云

ふなり、ホロハ頁とうるるなり是を鐙くくり

はれハ下へおり立つべきやうなり 馬上なるこのき

討死するを、再び馬より下りぬと聚く示す意味、
この城持ち堅く難く、ここを退いて武を汚す勿れ、
討死と決定したることを急ぐ時、一ノ瀬
ん流すことなるべし、佐甲橋は常に大伯の陣を目
前にするものなれば是をそうちゑと合弘さすべ
きに大伯の打死と見るべきは、佐甲橋踏止りて防
くことを知すべし、ホロを基と上り、基の字題
の字の誤なり、基は碁盤の後世誤つて
碁に作るなり、軍防会報れも本ロを題して将
の死を決すと書く、佐甲橋へ知す者題又上げ
て見する印と云ふ義なり、川中島合戦の時信玄
の舎弟左馬助信繁、信玄の旗本基危しと見て

十二行

ホロを基と上げられしかば、其手の者共上りて
防きしもの、信玄旗本切り崩さんと云ふ信繁
いうち死するなり

一タテナシ

是は紙なる布なるか、鎗も鉄砲も通らざる
ものタテナシと云ふ、信玄の鎧の袖タテナシは其
上へ金物を飾りつけたるなり是は侍授ごとなんと
今義に記すの性の悪き紙数百枚を寒中あらひ
し二十日計りまた星きに浸るなり閉うんなるを
上げ、あをしぼり、のし汁けのあるものうるて、大
を擂鉢にて能く擂り、其汁うすのうの如くな
る、これを生薑を五分一交セ、宋山甲山辺も能く

あらいたしすりおろし生薑の三分一文七匁市ま
紙ままも鑑或いキゴ三の形を作り北ルをひ
き日に干す、ひる時又ひさ、如此する事百度
共上ま陰合つよき酢を鉢ま入れ置き火鉢
の火をおこし共酷を鐵椎しつけ共地をた
たき、又鐵椎を火れあぶりて右の酷をつけ共上
をたたき、如此すること毎日おこなう百日間新
ままく仕立る時は、ぬり板の六五も五)ま、餘ま
七貫かず、北義秘傳にて汚穢に非ずおろそ
かに傳さるべし

一 やぶり板古義

やぶりは射こみなる物も為て主ら針釘の



数とい選い抜きかなき物也、軍士常に鎧の引
合ま用意すべき流木鞘、そく鉄ルおじ
雑也、疵口に強んばいかると落く入ずやル
りまま ぬりすと言ことまま、六の箱の新ん
ら時は、北の薬すあまんばあけ八ま、盛ま
四泡共おたもるもこう薬屋又くま、赤晨
ま殊のの秘義あるし由ト傳ま

薬方

蟻蜂生きまま微袋に入れ三重程ま挽
ふて陰干すべし袋一重ま八疵ひ破る為
ま殺すまま、ま元一つま入れ支給ま
ひ殺すまま、ま元一元つ入れ置き二

吉田藩の記事は、○蝋牛、皮を去り陰干一ツの牛の蹄陰干三ツ、右三品細末にしてとも油一滴、飯のつぶ七粒のへらにておす、試みに柱にもく釘をおしこみ、此藥を其釘に付つけば、釘抜けぬるなり、鐵を抜く法

鉄瘡の疫毒に信じ難き事なれども、世に外国の獣皮を以て鉄を蝕とする事、之鉄を折れ試み、鉄五貫目き能はざる酸と紙との細片も獣皮と同様の効あり、と云へべからざるか、鐵を抜く方なるか、ナメクジ云不思議の働き

十二行

をなす特性あるを以て見れば、之一枚に撒すべきか、今の獣皮に毒薬を撒く法あり、其毒撒の法なりとも不思議と云ふべし、之を水に浸すの法は、水口を甚だ小にして、武門の所業を苦しめ、能く軍出記事茅●の文言に交つ有り、今日解し難きものあり、今武つ加賀の国書の是要なるか

こんのみも

三月廿

三日記

○大心四五日の頃京都び東都蔵書を刊行したが其際に構後をしなうに、北陸より摺り本が東京に今来り、なんく離れなくに五京のものが賜い得るのを便て、四五種を獲に、

一京童　附論説　二冊
一英藝泥起　原宮崎　二冊
一京羽二重　安永版　一冊
一京羽二重織留　元禄二年刊　一冊
一洛陽名所集　元禄三年刊　一冊
一堀河之夢　宮尾似柳　元禄五年　一冊
一洛陽名所集　山本春正　寛文版　一冊

原本は五冊乃至十冊程のものを立籠宮雪半紙本に縮刷の上縮写も収め合冊る五十枚程の厚いものである、原本は何れも今は稀覯の書で便宜な用まゆるを要多く手を入れ難いから此の活字の本も且く〻満足することゝ已むを得ない、原本は多く京都周辺の産物である

いとゝ子フ　は山城の枕詞なるにより考証とす、

たゞき書に羽二重の名徒々あり、精細と羽二重の織方に論くらうとう、羽二重と云かゝ織物の語も自ら出つ、織物の附録の意を宮まるとせに市屋の書目をあらはす、路追七附録と云ふ国じい洛花と在る時代の考証ハヤサもこゝがある　三月廿三日記

○忍藩の侍醫河津春庵の著に醫則　巻揮四冊あり、嘉永年間に刻せる此著者漢法を出て西洋の醫法に陶冶、且其の説く所往々洋法を排す

つゝあり過渡的に於て生ずるハ異とすべき也、
其の婦人の卵巣に余するハ女睾丸といふがごときハ
甚だ奇を好むに似たれども理なきのみならず也、左
其の一部を物す

## 女睾丸

女睾丸者在子宮之左右、其形質文理及脉絡
之未変、四賀之接車、一々其男子睾丸符合、
蓋生精液、由輸精管、納之于精嚢、
西醫名卵巣者、為孵卵之巣宮也、余實
験之、知其誣妄、男子至睾丸之動静脉社
女子亦至是器、男子至精嚢摂護之脉絡、
在女子亦至精嚢男女、而睾丸精嚢男女

十二行

相對無有異同矣、但女精嚢者小也、然以脉
絡支分相對、共精液充盈、可證其為精嚢、
若西醫之言卵在是器中、則男精亦應直
由睾丸中発之、女精為卵、男精為神者、西
学之妄説、醫道之大害、宜鳴鼓攻天下傑
人不問其罪何也
彼れ之卵巣を女睾丸と名くるハ可なり、卵を排するハ
ま、、彼れ陰精を説て云く
陰精者生殖之種種、男女一之而施為不同、男精
成凝體、女精成胞衣、男精毎交媾必泄、女精
非為胚胎之時不泄、所以然者以育再産也、男
男子十五六睾丸製表精液、精徳乃動、女子則

通任血、云々

彼れ斯の如く説き、而説の睾丸血中に精を分泌し精液となるものとなす説を排し、云々

按ずるに説則精液原在血中、睾丸受之、泌別為精也、果然、腎之泌別亦同、豈然哉、睾丸者製造精之器也、身体諸器完備而後凝流二體之精氣湊會於睾丸以製成之、譬猶草木受天地之化育、幹枝暢達而後発花結實、原者血中剩液腎泌別之、故人生則腎已為官能、睾丸不之用、睾丸官能属於體質完成之後、是以有泌別製造之別也、



過渡期の漢洋両方の見方ハ此新き相違あり、色光未だ尽さざるの因なり

三月廿三日記

○増子素一郎が死後の忘れきれる遺子が禮をやうに表て、遺命に因りて之と断つて一冊の図を贈られて何ぞ色を附いて見よ、新舊約全書にあつて博多の好難義信者にあつ此が、生前曾て一切代も身分に留意耶蘇教をなすことなしとなる、かた、其家族に意未関係の事に自分の婦る此書を以つてなしの八、光亮其の最も崇信する所を婦るを最上とし如のあらん、此書が自然の好題向と云べきに、

自分ハ素人ひ之を納多受けた、

○此時の古稿を飜閲するに中に一紙あり、諱祝
すんハ山湖山の詩を記するに、條公を高野東山の高
野を得たるを喜こび少るの詩、刻して曰ハ此と酬つ詩
社一種のポスター也、野助の作あり愛と収めあり
て時大正乙丑春三月廿三日、柳来河南蕃と別り門
に送る、齋中雜知等
○余当時俳味と関する旅行を終し、漸や一冊をな
さんとして未だ名あらず、偶と文部人の随筆に「雅
間録」あるを憶い出て、假りて以て此書の名とな
す
○震災と換し、余が家改造を期し未だ資を得
ず、障壁坐椅頗る荒廢に任し、敢て修理を加へず、愛犬
漸や老て蒙と倦怠、室内に横行し、余が寢室に睡る、
往々土足を以て衾を汚すことあり、余之れを叱すれハ
尚子愛犬の為めに解して曰く、此家ハブの家を至等
偽りて云ふ、多年こゝに居候也、何小叱するゆへん
と、余笑て已む、(註)家の称廣ハ犬の長と曰さる程
長し、ブはブルドッグの略また愛犬の名也
○昨日本郷琳琅閣に於て頼山陽篠小作布家手沢
の図書を獲たり

綴白裘新集合編　二十四冊

初集　風雅面順　二集　海宴河清
三集　祥麟献瑞　四集　彩鳳和鳴
五集　清歌妙舞　六集　共楽昇平

乾隆卅六年校訂重鐫

北書谷冊「賴子成圓書記」の印を捺す

朱字なる子成自刻と云へきなり、首

巻冒頭に白に「賴山陽の號之」印

「散人」「所菴」と称し「松岳」の朱字印

を捺す、北印吳巢の刻と見しきも

なり、本家の手沢を証する由なりとの

以て書籍之んを珍とす、元来山陽に

菴本少なく、印記あるこの坊間に入る

こと極めて稀也、山陽遺稿の出し

を待つ、第巻に菴本なるも可なり、小林誠

侍に「讓之」の二字を刻を云へり、さ

十二行

りとて後人の為めにあらずして者を以入

れしめたるに過ぎず、思ふに小林壮年

の作の書か、松岳の印を用ひるはき

は多くの暗示を與へるに似たり、山陽文

那劉の回書を高し、帝大に蒐集を

始めることきも十一原因なり、北市二家の手

沢本といふを以て五十円を以て購ふ

三月廿四日記

○山陽未刻の詩集（此方之）なる一冊にて孫任

を添くて贈られる、其經を莫迦

を莫迦宗といふ、蓋し嘲世風俗を任侠とする

国体を尊ぶべきを知らず、遂に無政
寒来暑往、開花落葉、物了来蓋、年々循環
約束実行。天地世界、道徳不変、法律不変
黙約、暗約、口約、証文、一切不変。渇仰礼拝
謝嘆服、人間醜汚、自我偏見、日夜争闘
利害一念、光弗仇敵、朋友陶冥、道徳是変
法律是変、証文無効、一々是変、人間僭越
驕慢、放恣、雑乱、万物霊長、顔色失
大打毒。
人間之来、不正直動機。一切貴賤、不正直是変。
懐中利益、表面損失。懐中受貴、表面貧乏。
懐中冷笑、表面叩頭。懐中怒又、表面善薩。

十二行

一切善事、面従腹背。執刀活殺、殺打弾圧
感情激昂、一時作用。人間有洗、証
拠不充分、外見人情、実際全然大打毒。
市川毅

滑稽の面白き文の諷刺を写実、昔しも親のにコン
ナ任を仕つり例が多く、唯に漢文の稚り居る人今日文学
番日と及ばず、北斗七星の如き人芸術家多く、余が
主本英集の多くを紙上に見て、架中に置けば
比類あり、余一冊を書き、調世間の文一度出版の
流領を吐く滑稽と云へる

三月木曜日記

# 莫迦宗阿羅漢山宗則

◎今の世の人は總じて賢明に過ぐるようなり、ちと愚かになるの必要あらむ、我が阿羅漢山は、開祖の不明なる莫迦宗に屬し、努めて世をも人をも愚化し、淨化せん爲め、脫俗超凡を教義とする一種新樣の社交機關にして、阿羅漢山を以て其道場と爲す

◎阿羅漢山徒は、時に崇佛の體を爲し、時に弄佛の誚りを辭せず、肅然として襟を正すと見れば、唐突に矛盾錯覺の狂戲に沒頭することあり、畢竟教義の深奥なる妙味に基因するものにして、有緣の道俗漸く親みを重ぬるに及び、宗門の功德いよ〳〵廣大なるを悟得すべきなり

◎阿羅漢の數に因みて阿羅漢山に十六個寺を置く、宗運の興廢によりて增減することなし

◎阿羅漢山に宗寮を置き、八名の別當之に任して宗務を統轄すと雖、元來方便よりの數なれば、末世の情勢に應じて變動ありと知るべし

◎阿羅漢山の寺格は本來平等なれども、宗則制定後の補缺は晋山式に依りて宗寮の允可を受くるの定めなり、法燈の繼承につきても同じかるべし

◎阿羅漢山の寺格は、阿羅漢名を記せる木牌及本宗制定の絡子を以て之を象徴す、宗寮の授くる所にして神聖の寶什なり

◎阿羅漢山宗寮は、莫迦宗曠布につき、時々阿羅漢會を執行し、且つ世上に類型少なき年中行事を定め、以て宗門の躍動に資せんとす、是れ只管に愚の及ばざらんことを恐るゝが故なり

◎阿羅漢山宗寮は、廣く有緣の善男善女に對つて、莫迦宗に歸依せんことを希望し、時々執行する阿羅漢會に參會する者に莫迦宗居士の待遇を爲すべし

◎莫迦宗居士たらんとする者は、隨時最寄の阿羅漢山宗寮へ申込まれたし、但阿羅漢山は常に法務多端なるを以て、在家居士の來訪談議の場合は豫め都合の打合せあられたし

◎阿羅漢會執行の際、參會の居士に對し、宗寮の趣向に成れる感興的條件を附して案內することあるも、居士は之に拘束されずして參會するも妨げなし

## 莫迦宗阿羅漢山宗寮

○昨夜枕後早く寢ねし二時ごろ夢醒め枕頭に友人三宅雪嶺の個人雜誌「我觀」あり、把つて讀み卷尾に雪嶺の自伝、戰西前原一誠」一章あり、五十頁に亮たる長文なり、雪嶺氏こゝに北征の戰狀を述べし如き、前と西郷の墓參記事の脚色を出しなり、余これより、本年十二月偶ま前原の殺後五十年に當るを以て北征あらんと雪嶺の自叙あり、余が家前原と同郷、卿星和原と城後府を異にすれども前原共も官として来り、余が家に寓す、余幼少の頃前原と愛せられて其の風采を知る、後東京に赴き、茅の後心前原を本挽町の旅館に訪ねしことあり、前原の東京に来りし八桂冠後の

十二行

四月に萩に蟄居中、出京せしめられて余ら卿星に来りしも、八年前より六七年前なれども萩の乱に先だつ一年計り前と覺へたり、萩の乱は明治九年の秋、余の東京に滞在は八年なれば東京着後二三ヶ月なれば未だ明瞭なる也、惟ち前原の出京は、前原の亂に就ては正確に余の前原に会するもこれを最後也、前原の最後也、前原を以て宮金横奪者とし、西郷隆盛の名を騙る者とし、人をして意七同情を寄せしめざらんとするこゝろなり、余七一切ハ甚ル

惑ひしことあり、今雪嶺の北越曲を著すに就て自叙の文を読むに間諜の為めに隔てられて帰す、越曲の前も之れを以て往律とす、前原は元来撲直の人なれども畢竟あんも機大なり、西郷の偽書に欺かれて乱に與するの文(間)を問者に異なるごとき雄弁にて軽挙に陥りたるも其性格光明なりしこと無一と云ふべきなり、彼れは間諜に国を救ふ証を致す、後に之れを以て参謀の事を奉する能ふべし、事を奉ずるに身を忘れ、ヤケなるもの一挙は無謀なりと雖さまざまに諫静に赴くべしなれば彼れの叛乱は自者と云ふべきなり、時の政府に挑撥されたるものなり、彼れは死に就くの方り、東京の法衛に立つて其言いんと欲する所を言



んと欲するも許さんざりし、当時の反対政治家の陰険なる措置を窺ひ見ることを得べし、彼れは一身を刑場の露に弾じたるもの、二人の兄弟あり、刑場の露と化し松下村塾の創立者玉木文之進氏なる居腹せしめたり、其事の場所萩の郷江墓の上に出つ、而して世間人なる於て事為石碑のごとし、一名前原の無謀を云ふ(ある)しに政府の陰険政略を言ふ(ある)なり、雪嶺の北越一片同情に出づ、今も亦所感を抱かしめ得さるものあり、但し前原は到底奇蹟の人なれども流の新文明に嘔歌し得る人、常に新政府に恒例、城後なる時、平民政府に国家租税を軽減まして仁政と心得る程の四式頭脳も有し、孫正基の紀弾

を受けることさくあり、彼の四月流れ年に起れば、
八十年事西郷の乱と共に、彼を知る者も起
りしめるを或は政府の暗殺を知るべし、彼は
到底身を完うし得ざる運命を有せしに似たり、彼の
母一族へ多く女性を異にするが故に、人家と夫父を
知らず又其兄弟を知らざるなり、彼の父は伝世彦七と
云へ、養子の昌一なり、弟に山田顕太郎あり又去年
化伝世一活あり、昌一は弟の子見たり、前原殺する時
四十三、我色の節い

序幕

第一場　前原屋敷の場　家庭の会合諫早作
第二場　西郷隆盛伝使石の場　次郎宣八間諜也

第二幕

第一場　前原門前の場　一説漸せて間諜に陥
第二場　奥性数の場　えざるを知る
第三幕　玉木文之進屠腹の場
第四幕　前原父捕縛の場　自殺の父を捕
第五幕　本願寺別院假獄の場
　　同時の独念岡口隆吉酒食と
　　離て別離の宴をひらく
前夜伝世内藤栗城の為め宴あを開き歩兵隊に張る奉上役

且つ之を伊藤痴堂に講演をなさしむ吉田松陰米艦に投ぜんとして不成の刑死し後改葬の事に及ぶ

従て事実の誤るこゝろあり、余一二を正す、松陰等が教三樹の墓を盗み、即座斬殺東行の知る所なりと云ふこんを戻しなりといふことをきゝ誤りなり後日前原巷説関口隆吉等に与へ、松陰を勧めて墓地に埋めしめんとする也北事痴堂に語り講演を為す一説、痴堂講演の内に前原の事に言及す、而して世人を云らさんと雲嶺の北條を侯あり、宛かも立痴堂の涙を引つきくの思ひあり、聊か涙とゝもに涙の価値あるとも思いんず、先づ痴堂の講演格と見んに可なり

北心中奥手油蛸に言及する偉うん一行に過ぎず



未政関に酒を飲むこと数の事に北人を出しなる更に変形を異にしなる事実に拘泥しなかれし、油蛸前原を室を除きなるいろくの意味に於て異説なるとも政府を罵倒せし彼をして例の過激の言を以つて政府を罵倒せしなるなり未政とあるまじきなり

家花と前原一誠の忠義の事義と称すべき大悔あり、余が細君雄と助録しあり、北悔金と豪の三美主と一旦手を離れしもの偶然雲の農家とある際手を入れ、

北農家は母の抵抗もし庵室の前にある貧乏なりし、北悔の旧主に戻り紀ハ一奇過うち、奥手

の幅に至つては五寸の多きあり、一幅は故五峯の余
に贈る所、他文一幕を存す、他四幅は十年前
平山亭に贈り下る三幅詩を録し一幅文を
録す、外に一渡辺崋山の書簡あり、皆余が前
不著に載せることを説明するあり也

三月廿日志之

○服部斜石と晩と号す三顆の印刻成る、三顆共
未印也、小印は伝海其他諸陵先輩の材を以て母
作る、鈕と談人遺芳の銘を作らんとす、(未了)
他の二顆は児の三絃の新作を以て心る、紫檀の
尤も精なるあり、木理細緻の皺あり、余此の
材を得ること久しく、印文を案ん得ず、思く

十二行

ここに、此種紀念とすべき材は文七六何等の紀念
の物あるを得ず、他日平戸に住年来
等を刻す、如斯この余の余の欲する所、自ら笑ふ

平壽

蹟影暗香
家在半龍文家物
八十年青城客

表紙　生一録

乙丑仲春

耕石蒙人

五十六老生、然れども家に在りの印は地形の文を防げず、掛けて表に書す、必ずしも捺す

十二行

三月廿七日録

○用を審にせざるべ

○昨朝地を東谷梅田を分て朝食の四時合に出発す、地名は江戸故味を談合する合せて十数名の合乗中田中智吉方村を雲母川佐風香取鑄家前田曙雪外二早稲田出身者三名合せて、田中八巴と申し、やさしきれども梅の霸気あり、日蓮系の居士なり、此人のある久しく通じ、少けれど合するに地名の始めを世事月の来関に紀念会を保すとう何都を少いとの人義家の後裔なりといふ、極りしいものなれば、別る者出さ、北条氏の山気なり、夜前田曙山の梅を関する談話なり

同く

都下に去年梅といふものあり、こんを深井の樣風が一種の山梅を移し植て培養し、なるの初まる今は数多くあれども去年の梅と同しかるべし所謂る深井去年なるものゝ、也さくらと山さくらは一寸見分け難きも酷似すれども、花の度ごとに、ヘタを見れハおのづから区別し難きもの也。深井去年のヘタのハ毛のぬきこのあれども山梅すなわちこんなり、之をもつて別つべし山梅ハ梅の丈も純なるものゝ、八重其他の品少うして、シダレ梅なるハ言あまもなし。梅ハ日本の外に他に絶対なるもの又



ヒマラヤ山なるものゝ如くに別物なり、北花日本の国粋として誇る北花の権威ともいふべきい盆栽とする能ハず、別庭盆栽ともハ此のなる術を以てすれども育て得さるなり其の屋せる意義、流石に四華なるなり、六梅と梅と云へるなるあり、誇に梅ハ切らるゝ梅ハ切るあれども馬鹿梅ハ決して切る可からず切れハ枯死す、時に枝間ハ枝の今冬のごとく蕾生するものあり、こん梅の病毒なる其毒ハ猖獗しも其の枝木を滅するの如く附近の他の樹をも滅す有害のものなり、此の蕾生物

八月廿九日芝除せらる可き事、徒に風聞多き事
と雖とも、なるべき大なる間敷ぞ、
日本にて植物を図すること、たるく本草の家の為
所なれども西洋のごとく押花や押葉をなす
ことい無りしなり、梅の花を押花す
ること田沼氏あり、其の後碩斎春山の後
中宮い悲んで御陵を拝せんと時於て
梅のひらきの如くを中宮い幾ひらの枝
花をえらべて、其の義を貼付
一首を歌を書きて之を歌塚に奉らん
と乃ち押花の始なるべし

○今日東美倶楽部の図書売立を遊び漫
に所の旅籠十数に、内三四を左に録す、

三月廿八日

一當麻曼荼羅科ッ郎　三巻合一冊
近寶堂　当麻曼荼羅の注記に甲乙あ
り、此書は図を尋ねて、編者は元元上人
也

一菩提樹之辨　一冊
仏法、寺瑞、菩提樹を降らすの風説を
基として風来山人例の戯諧を弄したる
ものなり、二三の絵を挿む、あり七年の版
也



一釣書二種
江戸海川録　冊数　金来舎版　文化二再版　一冊
東都釣の魚猟大全　便蒙庵　特別珍録　一面ずり　一枚
釣書は多く多弱の冊子也、されども獲ること
と難し、家蔵に若干あり、之を保セて金十
二貫文、大金は一枚摺りなれ、一面を釣法
下の図あり、これを称とす
一日本水土考　附西域人数考　一冊
西川如見著　享保五年の版を保る、巻首に
地球面の図あり、日本の風土を論じ
其美世界に冠たることを説き、版る識
見あり

一 慕夏堂文集　韓版　一冊

此書ハ疑問の書ともて傳くるに、学ぶ者ハ必ず
ことあるも手ある人々ハ始めて也、著者金忠善
ハ日本人なり、文祿の役、加藤清正の麾下
に屬する一士、韓軍に降り、終に帰化し、
韓姓に重用さる、名を金忠義と称ふと、
彼れの名也可性沙と北文集の序に有
り、邦人に斯る姓名あるを覚えず、又
投降の人なるも敵に重用さるるといふ
事未だ少く所なし、頗る疑義に屬
す、卷首に数序あり皆此人を義士と
なす、実没あり所、金ハもと夏を慕ふあ



自から慕夏を號とす、豊公の無名の
義を吾国に投降するものと、其の義と呼
ふ所以なり、一笑すべし

一 ちつぽく料理通向帳　一冊

浪華秀昇子著の和八年江戸に刊す
る所、長崎清来支那料理を紹介し
たるを避け、日本風味を別に一工夫
を加へたるの本書の特色なり、やうの獻
肉を用ひつゝ、これ肪性の食を避
けることを避け、仮し矢張り支那式
の調度を用ひ、其図巻首にあり

一 江戸絵図株帳　写本　一冊

[illegible]屠[illegible]岡の出版[illegible]多く、
其間に火災し罹り板木共ともに焼失し、
中ごろ[illegible]に株を譲りたるものあり、[illegible]
而して鶴[illegible]鶴徐氏しく[illegible]
[illegible]に及ぶこと[illegible]熟断等易[illegible]
[illegible]ここに於て株に就て公儀と書肆
との間に交渉取極めをなす、これ其の文
書[illegible]書史に[illegible]花鳥の資料[illegible]刻本
[illegible]

一 畫語録　小本　一冊

知不足斎叢書中に苦瓜和尚の畫語録
を収む、[illegible]乃ち其書を持て單行[illegible]

十二行

[illegible]
文化十年絶版に[illegible]
後の書多き[illegible]
り画を載せ画を補化したるものあるべし、此
書の特徴とす[illegible]

一 志賀重彩色歌相撲　五冊

延享四年版小文字本也　首部より紙[illegible]
[illegible]初摺本[illegible]

一 驅勢搦　竟の時　三冊

此也坂河に多く流布す、珍書とあるべき[illegible]
七分の人多く此書の[illegible]権威と琉味と
を解せず　若書は廣本の浪武力[illegible]隆

盛の時に生れ、後を継ぎ武を統べ武を以て
後を継ぐ、其言ふ所の味深し、著者の
名を鈴木心三郎と云ふ、石手道人と称す
多くの著書世に刊行せる、二人比丘尼因
果物語等数多あり、破切支丹、
デウスの事、耶蘇教に関する事あり、此
書は一八五中の著述に係るもの、日
本の後世の国比者をおもしろきあり
○昨歳年所川流出羽又七洋銀の一冊を携り汗青
舎をひらき、和田義方深山天竜柏の廣路等と会
す、此の銘に国宝を持参す、漆山持参のもの廣出
名所図会 續篇 西湖の新の書の故下一冊あり未



刊のまゝ、巻尾に登々蔡が故下とも記し居る長
陽楊の記あり、後の極めて精細なり、余も前年大坂
の廣田氏の此の未刊行花千を得ることあり、早
大図書館に花千あるべき筈也、漆山七尺八、所謂の
一重切と名くるものを持参、えゝ金字を縫あり」の
二字銘あり、井原西鶴の色と伝あり、なるほど元禄代
の色なり、西鶴の色に似たるものなれども梅のかゝり
鹿路は西南歌多の紀念物、二脈持参、おもしろく感
じたり、西郷の本筆と思ふ日この事を物し居る通
悟形の記録あり、五六十枚あるものなれども、兵の動静
其他を語る、極短し、「破竹」「雷撃」「本筆」と
二行に割り、其下に本筆と書し、「本筆」の印あり、

内容は概ねのようであるが、従って彼此隙書多く隙の字数見すず、隙の孔重なること恰うど、北の本の一隅に焼痕多かしむるも字を欠ぬ、多分兵燹と思惟えたりつくあるを拾ひ上げる、あと覚し中に一冊の書簡摘みあり、而卯丑と他色丑十卯完丑兵数の摘要を指揮したる也、祇誓ひ丑ともあるもの、而卯の自筆と見るべきもの也

丑切に書きたるものあるも兵馬供給のの手間し八幡と名る処地を見る、所謂英雄時代の日あるも云べき歟、外に中原某を指して白状せしめるる口供を印刷したる一小冊子あり、此内：柏田盛文の名の列記あるを見て興味を感じたること尠

十二行

く文言を味ひいとまなくしてとにかく全くそれ以外の固定中疑義のあるもの数部抜萃表見を掲ぐ

三月廿九日記

○乾海と称する海岸（信濃国）は逸と新宿の又名称なる等も、互に及ばざる点を多くしてなる思ふ

二枚つきの端書と例の主ふ書きの自筆なる列る、自筆なる（四後ありとあり）出すら柱に縦の寸法（内里）数も出来ると、又一死状を送しなる残念なれど、法名に今後の出来ることを思へば除夫の情ちきるあるべし云

○古地表三豆帖二冊一帙を齎し来る、皆猪瀬東

寧の伴流の山水とか、各々文部法文家の法に倣ふ、
紙は西大、極めて敬如あり、小粉笺中未多東京の
画冊子、食指動き躍ひ入る、北画冊一冊を端
に時湖の静観得壽の題詩あり、巻尾に桂園の題
詩を附す、他の一巻首部に桂園隷書の扁額巻末
に栗里の跋（　）の題詩あり、帙の大さ縦一寸五六分
幅一寸二分許、快とす、表紙壮歌注也、以て吾庵
中の珍とすべき迄る　三月三十日記

○支人和田芳之助氏、モンタヌス日本誌
を贈り来る、此書は十七世紀の初期より五十年間家
国か東印度会社より我国へ差遣せる蘭使の紀行と
據り、十六世紀の末より我邦と基督教傳道の為め



に蒐集、西洋の書の数冊を参照して蘭
人アルヌルツス、モンタヌスの偏する所、原書名を
アトラス、ヤパチンシスといふ、北者の和蘭に開版せらる
や間もなく二三の国語に訳され流布し、日本の多
情初めを改め、此許本の原書は一六七〇年
ダヨン、オギルビー執筆部動出版のものなり、既
に訳されたる尤も最初のものといふ、原書は文化懐
も大きく冊子なれども今は縮刷の書なり、此訳書の
形も著るしく大きく殊に多くの挿図を収め原
本の面目を失はざるを旨とす、本書の特
長は外人の日本観なり、殊に徳川豊時代なり徳川初期
に渡り、外人の見たるままの事実は史料として貴ぶべき

の價値等、別して外國人の狀況、政府の施
措等の類、亦たゝ文獻甚多なるべく、之れこゝに實
を得るものゝ多からんと為す。但し外人の聽きひゝうめ
し書きこゝに載せるものゝ如きそれ全部信憑すべきもの
なるハ勿論なれども、多の誤まりあること、第のつくるもの
少からず、其の挿入、或る人の後面のこゝろ、日記
外人が粗なるスケッチを作ること、それを書きこゝに
載せ、日本の風土人物と共の狀景を、表わす、
丹細無の紙ゝなる或る圖土の圖をも思ハるゝ、祖等
名を言ふ術の無けさりしあを得さんも、古者の氣味の寧ろ此を
ふを得べき歟、況んや此に就て特に一言を附



記、圖ハ實況と誤陽なるもの多ハ其創合に
ハ誤陽しおるも、圖を以て文を附度する莫れ
と注意しおるもの多し、（圖の一二ハ見本より取るも左
に收めおき）其外一般を窺ふべし、本書ハ伊藤と
外數の事を敘したるに、使節ハ自分の外、京都大
阪江戸の事（もし記すあるも）市外人の
見るを許さんとする事を見る、未詳なる政治の
推移の狀を七陳べ、豊公と秀吉の確執を
及び割合とする情を表ち、彼等ハ自由自分方
をなすエムペロルと言る稱するがゆき、政治の實權ハ方
あるしなと称く呼びしも、現りあるとハ云へ、我
政体に通ぜぬを缺くことの一証なるが、その割合に

政推推移の状をよく理解しよく教示しなば何人の
手都人の説明しなるものあらざるべし、漢籍の目
に日本の事跡は殆ど何のことを見くなりと完しくす
べて異聞なりとする者多くの一奮を喫せざる能わず、著
の英獨佛語に訳さん、日本が最初に、エラク宣伝さん
旨なれば、此者の力に俟つべきものと謂へさるべし、巻
末に蘭使江戸の大火に遇ひ其心身を以て
免れし荒千の記あり、明暦の大火に遇し
なるべし、若者の可成委しく書こんとの執意から
一つ一つに知る限りのことを考証の目に書くの一癖あ
り、往こ記事本往を逸して横往に入り、読みるべき
ことあり、元往に既行記行に免れざる所也、

十二行

謂者は心して信往のあるべきものの細説を看くこと
の注意なり、故に原書を精細なるへ免うん
さんとも、却て要を得ざる類あり　三月三十日　記

○臞心活人心法三冊　通霊子道人著す所我承在
二年一京都に於て上版せらる、北方三冊の内中下二
巻は專ら医薬を挙んるも、上巻は四支五體皮膚
を摩擦活動するの法を挙げ廿五六の図を解を附す、
軟近行はるべき静坐法の如きを之れに淵源するや疑な
白隠禅師の一家の法あるとす、これも北の活人
法と甚だ近きものあり、余嘗て村上専斎博士に就
て白隠の家法を学ぶべしことあり、先つ両手を以て毛
髪を搔き鼻の両側を摩し、頸項を擦するより始め

終に両手を以て足を抱つゝ、力を極めて之れを引く等、皆北者挙くる所と同じ、唯比多のみ相違あるのみ、余久しく北法の図解を得んことを欲し、今八則ち得たり、思ふに是れ道家の工風、仙術なるべしと、斯る訓録を得たるを謂ふ歟、三月十五日記

の三月書る坊間を過ぎて左の二書を購ひ得たり

伊勢物語　二冊

慶長古活字本にて所謂嵯峨本なり、素巻唐紙也、是の版なり、挿絵あり、比較的紙質の良なるもの、雲母紙と似たる紙なり、特ひ得たるは幸なり

十二行

紙質も他の伝来嵯峨本の特徴を有す、現今白紙の如本三百円の時価あり、北者五十五円、価の差ること亦甚し、因て寛永版の伊勢物語は挿絵は同一なるも、書体全く異なり、且つ数冊版也、混同すべからざる

荘子鈔　十冊

北鈔の著名なる人なるを知る、講釈の[illegible]尾……ゾとあるは延利版より慶長活字なるもの、一特徴なり、五山の学僧の講釈本を版なりとする、之れ疑を容んず、北者

巻末に置くべき後序の初と奥付
第一巻の終りあり、正保二乙酉暦
三條通菱屋町林甚右衛門とあり、
今や稀覯の書也（價廿五円）

十二行

# くらはんか茶碗

脇本樂之軒

近頃一部の好事家の間にクラハンカ茶碗とハふものが寺離

僕が河内の枚方を訪うたのは今から四年前、大正十年十二月の十五日頃で、尙古會部の窯址を尋ねるつもりであつたが、道不案内の京阪急行電車が男山を素通りした爲淀で下され、早速の思ひ付きでクラハンカの研究にかゝつたので、謂はゞ不用意千萬であつたのだが、同地の山蔭に窯を築づいてゐる吉向君や町の好事家なる八尾某等の手引もあつて、相當の收穫を得たのは望外の幸であつた。

町では先づ茶船の本家を訪うた。何とか云ふ姓はあるのだ方、土、釉藥、模樣等に著しい變化があるのではなくて、飯碗とか、汁碗とか、茶飲碗とかの用途に應じての大きさの相違である。菜盤も大盤、小盤の別があつたのであらうが、盤は今碗の方程珍重せられず、クラハンカ茶碗と云へば大小はあれ、皆茶碗の形のものである。その形をみるに、多くは徑三四寸を出でぬ、半圓形の普通の形で、まれには端反りのものもある。土は白いとは云ひながら鼠色を帶び、釉藥も白と云ふには少しく鼠つぽいものが、多くの場合半光澤の程度に、厚く、生つぼく、高臺内までも一樣にかゝつてゐる。胎は厚作で、蛤齒になり、高臺は低きも高きも大なるも小なるもあ

三十三人以上の人を乘せる事は出來ない規定であつた。若しそれより一人でも多く乘せると覆沒の恐れがあつたからで、この人數の事については德川時代を通じて屢々觸書が達せられてゐる。

三十石では中では物を賣らなかつたので、泊り々々卽ち大坂、文方、定、犬見等で物賣る船が出て、食事の事迄[illegible]

息子さんは餘程の謙遜家で知つてゐる事も知らぬ顏に物語るので要領を得るに苦しんだが、それでも大體の事はわかつた。そうしてクラハンカが關係のもので家に傳はつてゐるのは、今之だけですと云つて、出してくれたのをみると一つはクラハンカ船に用ゐた船名額で、一つは『くらはんか茶碗由來の事』と題する書き物であつた、船名額は楠か何ぞの船材を使つて作つたもので、横二尺竪八寸厚さ一寸位の文字面に同じ材で、幅二三寸ばかりのすかし彫りの額緣が附けてある。船名は天神丸と楷書せられ、その右手の方に現された人[illegible]の象と共に薄肉彫となつてゐる。天神は云ふまでもなく落松葉のものは年代に於て最も古いと云ふ一說もある。僕の經眼した桐紋ちらしのものは、同じ胡須繪ではあるが、筆で書いたのでなく、印刷であつた。印刷は伊萬里の下手物に屢々見る所で、今その創出年代を呼び起し得ないが、高臺又は内面に附けられた伊萬里特有の一種の五出花に見受ける所である。實にこの五出花はクラハンカにも屢々銘として見られ、尙馬の字を變化したのを用ゐてゐる事も普通の伊萬里と違ひはない。

伊萬里は德川時代の初期から、關西方面に於ける陶器の需要の大部分を供給したもので、その分布は京阪地方に於いて

# くらはんか茶碗

脇本樂之軒

近頃一部の好事家の間にクラハンカ茶碗といふものが持囃されてゐる。自分の見聞の範圍では、未だ之について研究の發表されたものを知らないから、之に關する自分の考へを述べて、廣く識者の教を請ひ度いと思ふ。

クラハンカ茶碗を說くには先づクラハンカ茶碗に物を入れて賣つた河內の枚方（ヒラカタ）の茶船卽ちクラハンカ船について語らねばならぬ。またクラハンカ船を說くには、それよりも前に淀川の三十石、否廣く過書船について語る必要がある。

過書船と云ふのは慶長頃から過書卽ち幕府の特別免狀を持つて大阪を中心に、尼ヶ崎、淀、伏見の間を航行した船を總稱するものであつて、船の大きさは二百五十石積から三十石積までであり、その多くは荷物の運輸に用ひられたのであるが、三十石積は旅客の爲に主として使はれたので、さてこそ大阪、伏見間の客船を三十石と呼ぶに至つたのである。

この三十石は夜書の二回づゝ毎日大阪、伏見の間を往復するのであつて、下りは半日又は半夜、上りは一日又は一夜を要するのであつて、就中夜船の光景は廣重の浮世繪等にも書かれて、その苦をかけた風情ある眺めはよく人の知つてゐる所である。で、それらの繪によつてもわかる樣に、一つの船には五人の船頭が居り、客は定員二十八人、卽ち併せて一船三十三人以上の人を乘せる事は出來ない規定であつた。若しそれより一人でも多く乘せると覆沒の恐れがあつたからで、この人數の事については德川時代を通じて屢々觸書が達せられてゐる。

三十石では中では物を賣らなかつたので、泊り々々卽ち大阪、枚方（ヒラカタ）、淀、伏見等で物賣る船が出て、旅客の需要に充たしたのである。この泊り々々の物賣り船の中で、他の土地のは餘り特色もなかつたかして、有名でないが、ひとり淀の茶船は物賣る呼び聲が破天荒にぞんざいで、殆んど喧嘩を吹きかけてゐる樣な調子であつた。この喧嘩腰の物賣男と物賣ふ旅客との喧ましい問答を最も寫生的に寫したのは、例の十返舍一九の東海道中膝栗毛であつて、さすがの彌次郎兵衞もここでは何方が客か賣手かわからぬ樣の橫柄な言葉使ひに膽をつぶしてゐる。その押問答は長いのでこゝには略すとして、一例を擧げて見ると、『さア〳〵、飯くらひさらせ、』『われ不景氣な顏をしてけつかる、錢がなうて買へんのかい』等云つた鹽梅で事情に通ぜぬ彌次郎兵衞は江戶つ子の肝癪玉を破烈させ、却て乘合の衆に笑はれてゐる。

斯う云ふ風の激しい取り引きであるから、賣言葉に買言葉で、互ひに亢奮した果ては、盌も茶碗も投げ出すと云ふ風であつたからして、今も枚方の川筋に其の盌碗の類が往々落ちてゐて、それを川筋の浚渫に當る女等が拾ひ上げて、それが偶々好事家の目に觸れ、その品物の有つわびしげな感じと、併せて歷史的由緖が面白い所から、茶席の珍玩ともなつたのであらう。

要の大部分を供給したもので、その分布は京阪地方に於て

僕が河内の枚方を訪うたのは今から四年前、大正十年十二月の十五日頃で、其の日は男山八幡に詣しそれから川を渡つて山崎に出で、尙古曾部の窯址を尋ねるつもりであつたが、道不案内の京阪急行電車が男山を素通りした爲淀で下され、早速の思ひ付きでクラハンカの研究にかゝつたので、謂はゞ不用意千萬であつたのだが、同地の山蔭に窯を築づいてゐる吉向君や町の好事家なる八尾某等の手引もあつて、相當の收穫を得たのは望外の幸であつた。

町では先づ茶船の本家を訪うた。何とか云ふ姓はあるのだが、今も『茶船』で通つてゐる程、この町での名物となつてゐる。家は京阪線の停留場から一筋町の半ば位も進んだと思ふ邊の、右側にあつて、三十石が發着した箇所から程遠からぬ下流に當つてゐる。餘程間口の廣い家で、荒物等を商なひ、相當に有福な暮し向きらしくみえる。淀川筋ではすべて河中に突出しを作る事を禁ぜられてゐて、今云ふ船の發着場も波止場らしいものは殘つてゐない。恐らく船の出入りをするのをみかけると本家茶船から裏口に繫いだ船を早速漕ぎつけたものであらう。この本家茶船で實際クラハンカ船の物賣りをしてゐたのは、僕が行くよりも更に三四年前に歿したと云ふ先代の主人までゞ、その八十餘歳で歿したと云ふ老人は非常の美聲であつたと傳へられてゐる。當主の見やう見まねに子供の時から物賣聲の稽古をして、之また聞きものだと云ふ事であつたが、生憎その日は京の町へ用たしに出かけたとて家に在らず、はたち餘りのたくましい息子さんが應待してくれた。

息子さんは餘程の謙遜家で知つてゐる事も知らぬ顔に物語るので要領を得るに苦しんだが、それでも大體の事はわかつた。そうしてクラハンカが關係のもので家に傳はつてゐるのは、今之だけですと云つて、出してくれたのをみると一つはクラハンカ船に用ゐた船名額で、一つは『くらはんか茶碗由來の事』と題する書き物であつた、船名額は楠か何ぞの船材を使つて作つたもので、横二尺竪八寸厚さ一寸位の文字面に同じ材で、幅二三寸ばかりのすかし彫りの額縁が附けてある。船名は天神丸と楷書せられ、その右手の方に現された人麿樣の像と共に薄肉彫となつてゐる。天神は云ふまでもなく氏神に因んだのであらうが、左手を脇息に凭せ、右手に筆を持つた人麿像を結び附けた因縁は、息子さんに尋ねてもわからなかつた。兎も角も之が船の艫の方に掲けであつたものとすると、茶船も相當の大きさの物であつたらう。そうしてこの船名額は最後の茶船の所要であつた事は云ふまでもない。

今一つの由來書の方は、奉書紙か何かの紙本に墨書されたもので、書體からみると明治の半ば以上に出ぬものであらう。今僕は出先で胃痙攣の爲病臥して、當時齋した材料を一つとして持ち合さぬので、明瞭に辭句を記憶しないが、そもそも茶船は、大阪陣の時に德川家康が大久保彦左衞門と共にこの川を渡り兼ねてゐたのを、茶船の主人が渡してくれたので、その褒美として、望みにまかせ、長くこゝで上り下りの船客へ汁飯等物賣りする事を保證されたと云ふ事であつたと記憶する。もとは何か然るべき書き附でもあつたのかもしれないが、今の由來書そのものは辭句も亦明治以後のものらしい。只實にもその樣な由緒でもありげにみえる事は、物賣りの聲の餘り亂暴なのでも推察せられるが、尙淀川筋には三十石積よりも小さい一種の二十石積船があつて、それらもやはり大阪陣の時軍器兵糧等の運輸上手柄を現はし、やはり長く德川幕府の特別の保護の許に置かれてゐた（それ等の船は男山八幡領の船であつたが）史實があるのを思ひ併せてみても、的確なる史實こそなけれ、或ひは由來書にみえる樣な事實があつたのではなからうか。

さていよ／＼クラハンカ茶碗を說く一段となつたが、之は本家茶船では見る事を得ず、前記八尾君の丹念なる蒐集によつて啓發せられ、之より先き僕自ら京都で求めた標本があり、最近京都に旅行して同地陶界の新人河井寬次郎君を訪うて、こゝにも又二三のものをみたので、それらを綜合して簡略に愚見を開陳してみよう。

茶碗にはいくつかの種類がある。種類と云つても、燒き方、土、釉藥、模樣等に著しい變化があるのではなくて、飯碗とか、汁碗とか、茶飲碗とかの用途に應じての大きさの相違である。菜盤も大盤、小盤の別があつたのであらうが、盤は今碗の方程珍重せられず、クラハンカ茶碗と云へば大小はあれ、皆茶碗の形のものである。その形をみるに、多くは徑三四寸を出でぬ、半圓形の普通の形で、まれには端反りのものもある。土は白いとは云ひながら鼠色を帶び、釉藥も白と云ふには少しく鼠つぽいものが、多くの場合半光澤の程度に、厚く、生つぽく、高臺内までも一樣にかゝつてゐる。胎は厚作で、蛤齒になり、高臺は低きも高きも大なるも小なるもあるが、普通は低く中庸を得て、伽には高臺内の中心凹みがあつて蛇の目形になつてゐる場合もある。内面も往々蛇の目形の重ね燒の痕あるもある。之だけ述べればクラハンカが九州系統の窯の出である事はほゞ推察せられるであらうが、更にその胡須を以つて現された模樣をみると、その粗末ながらも美しい傳統的のカーヴをもつ形の輪廓と思ひ併せて、伊萬里のものである事が斷定せられやう。

模樣で最も多いのは梅であつて、その無雜作に便化された達者な筆致は、マンネリズムそのものゝ一顯現であつて、製作年代によつて多少の、否非常の巧拙の差はあるが、そこに見紛ふべからざる特色がある。この圖は又、我等が同じ伊萬里產の伽羅の油壺に最も屢々見る所の模樣と同一のものである。

この弧線狀の枝をもつ、謂はゞ伊萬里特有の梅の模樣の他にはなほ落松葉、二重格子、桐紋ちらし等あるが、この中で落松葉のものは年代に於て最も古いと云ふ一說もある。僕の經眼した桐紋ちらしのものは、同じ胡須繪ではあるが、筆で書いたのでなく、印刷であつた。印刷は伊萬里の下手物に屢々見る所で、今その創出年代を呼び起し得ないが、高臺又は内面に附けられた伊萬里特有の一種の五出花に見受ける所である。實にこの五出花はクラハンカにも屢々銘として見られ、尙馬の字を變化したのを用ゐてゐる事も普通の伊萬里と違ひはない。

伊萬里は德川時代の初期から、關西方面に於ける陶器の需要の大部分を供給したもので、その分布は京阪地方に於いて

ひとり枚方に限るのではない。從つて以上述ぶるが如き、クラハンカ茶碗と同種の遺品を見出す事は、今日に於いても必ずしも難くない。現に僕が幼時中國に在る頃は屢々この種の茶碗を目擊した事がある。只嚴密に云へばクラハンカの茶船で使用したものは特種の注文によつて、特種の約束が加へられてゐたのかも知れぬがその有無さへ今は判然しない。要するに枚方の川筋から上つた確證がない限り、この種の茶碗がいくら現れても我等の考古的感興は動かぬ筈である。實際枚方の川筋から上る正眞正銘のクラハンカ茶碗は、年數の多少こそあれ、長き星霜を河中に埋もれて、砂土の洗禮を受け、或ひは釉藥の光澤を失ひ、或ひは緣邊磨滅して所謂口兀手（クチヘタデ）の如くなつてゐるもあり、自から一種の趣きを汲み得るかの如くにもみえる。かの富岡鐵齋翁が　涎措かず十箇を持つて己が絹本尺八に替へんとしたと云ふ煎茶碗の如きは、おそらく士人の雅玩に入るべきものであつたらう。然しながら近來猶ほ杓子も語らんとする所謂クラハンカ茶碗なるもの丶骨董としての眞價に到つては、僕大いに之を疑ふ。

附言　本稿は病中匆々口授にかゝり訂正を要する個所の大からん事を愧じる他日の訂正を期する。　樂之軒又識

* * * * *

# 谷文晁に就て（一）

竹内梅松

## 一　序言

各派を通じて、近世に於ける名手を考覈するに、その數必ずしも尠くはない。が、偉容群峰の間に聳立する富嶽の如き卓越せる巨匠を求める時、その數決して多くはないのである。そして彼の谷文晁の如きは斯る人の一人と云はねばなるまいと思ふ。彼や葛飾北齋と共に最近世の產んだ一大偉才であつて、取材の上から、將たまた筆技の上から、八面玲瓏、往くとして可ならざるはなく、恰も落下し來る瀑布の如く洵に端倪すべからざるものがあつた。若し化政期を中心としての近世繪畫史から、彼と彼とを除去したとしたら如何に寂莫を感ずることであらう、それは想像するに難くはあるまい。以下、彼の『人』とそしてその『藝術』とに就て一顧し、聊か卑見を記述してみやうと思ふ。

## 二　彼の外廓

文晁は谷麓谷の子である、寶曆十三年九月九日、江戸下谷二長町に呱々の生聲を擧げた。名は正安通稱を文伍、後文伍郎と改めた。雅號は最初文朝と云つたが、後に名の文晁に改めた。なほ蜨叟、畫蝶樓、寫山樓、畫學齋、無二庵、一如居士の別號がある、晩年に至り剃髮して後は文阿彌と稱した。父麓谷は名を本修、通稱を十二郎及び文十郎と云ひ江戸の人

山口縣大津郡深川村の坂倉氏邸

# 萩焼（はぎやき）の話（はなし）

第十二世　坂倉新兵衛

ひとり枚方に限るのではない。從つて以上述ぶるが如き、クラハンカ茶碗と同種の遺品を見出す事は、今日に於いても必ずしも難くない。現に僕が幼時中國に在る頃は屢々この種の茶碗を目擊し

使用したお

てゐたのか

に枚方の川

くら現れて

の川筋から

そあれ、長

は釉藥の光

なつてゐる

もみえる。

本尺八に替

の雅玩に入

子も語らん

の眞價に到

附言　本稿

他日の訂正

# 谷文晁に就て（一）

（一）

慶長三年の八月豐臣秀吉公の薨去から再度の征韓軍も中途にして引揚げる事になりました。その際第八軍毛利輝元公の許に働いてゐた韓人李勺光こ李敬こいふ二人の兄弟が御座いました。遂に歸化して毛利公に從ひ廣島に止まり、間もなく公が長門の萩城に移らゝ事になりましたがそのまゝこの二人も萩に引き移り、茲に初めて朝鮮以來の製陶を初める事になりました、適當な土質を調査し地形を探索した結果、李勺光は大津郡の深川村字三の瀬を撰み李敬は萩城外の松本村字中の倉に土地を見出しまして茲に窯を築く事になりました兩人共にその築窯の費用材料は申すに及ばずそれぞれ俸祿を賜はり士格に列せられました。階級の八釜敗い封建時代に斯うした優遇を受けました事は寔に珍らしい異例で御座います。

兄の李勺光の窯は深川萩こいひ、弟の李敬の窯は松本萩こ申します、然しその作品は全部毛利公の御用品ばかりで、一般の需要に應ずるやうになりましたのは、漸く明治になりましてからの事で御座います。

（二）

その當時の有樣は窯の火を止めますこ直に藩公に御屆をいたします。そして檢使の方が二人お立會の上、窯出しをいたします。澤山の中から眞に優秀なものだけをおこり上げになり他は全部その眼前に於て破棄してしまつたもので御座います。

原料の土も出る山は常に嚴重な番人が附られて他からそれを採掘する事を禁ぜられて居りました運搬にも一々役人が附添ひ、毛利公の御定紋のもこに村から村へこ運び來られたもので御座いますその物々しい有樣は古老の話に聞かされて居ります。

萩燒は一に高麗燒こも申しまして、凡て朝鮮の手法を其儘に造り上げたもので、即ち御本、三島、井戸、トヽヤこいふやうなものを主こしたものでいづれも窯印を入れる事は許されぬのみならず、共箱にも更に何の印も御座いません、それ故古いものになりますこ、全く朝鮮ものこ區別がつきませず、松本窯か、深川窯かこいふ區別もつかぬものになつて居ります。凡て此等は古萩こ總稱せられて珍重して居ります。



（三）

松本窯は李敬（弟）の窯で坂高麗左衛門こして今日に至り、深川窯は李勺光（兄）の窯で初め山村新兵衛こ苗字を賜つて以來、平四郎、彌兵衛、源次郎を經て六代目藤左衛門に至り、故あつて山村姓を改め坂倉こなりました。その後、五郎左衛門、半平、平助、九郎右衛門を經て私共の父多吉に及んで十一代目で御座います。父は明治三十年春三月沒しましたので、不肖ながら私共が父祖の業を繼ぐ事になりました。

御用窯こしては坂家こ私共ここの外に大和より移り住みて後毛利家に抱へられたる三輪氏の窯があるだけで御座いますが、近時萩燒の名を冠して類似のものを造るものが出來ましたが、昔は如何に技術が優れて居りましても新に窯を初めるこいふ事は禁ぜられて居りましたもので唯私共の家系の中に二代新兵衛の門人に倉崎五郎左衛門こいふ者が雲州侯から毛利家に御所望になつて御召抱へになりました事が傳へられて居るだけで御座います、これは今日の樂山燒こして殘つて居ります窯で御座います。

萩燒は一見樂燒のやうな低火度のもゝやうに見えますが事實は陶器こしてなか〳〵高火度のもので固いもので御座います。土質こ釉藥の關係上非常に早く時代のつくもので、俗に「萩の七化」こ申しまして時代こ共に著しい變化を喜ばれるので御座います。

（四）

以上は唯私の思ひ出しました事を何の秩序もなく書きつゞけたので御座いますが、兎に角昔の萩の作品の中には非常に優秀なものが尠く御座いませんでした。これは一に藩公の力强い御後援があつた事は勿論でありますが、又作者こしても專心研究を重ね苦心をした事に相違御座いません。

不肖ながら私共も先人の遺業を繼ぎましたからには舊藩諸公の鴻恩に對しても恥しくないものを造りたいこ日夜勵んで居ります。今回は茲三四年間の所產の內から特に嚴選を致しましたもので御座います只管江湖の御批判を仰ぎたいこ存じます。

日光の両将軍墳墓



大阪城

閲覧室

十二行